

パウロの ヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-Home-Page.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

1 章



内容

第 1 章：天使よりも優れた神の御子.....	3
I. イントロおよび背景	3
a. エルサレムの当時の状況	3
b. グノーシス主義	6
c. 律法主義.....	13
d. 契約.....	25
e. ディスペンセーション.....	35
f. キリストはロゴス	46
II. 第一章の翻訳：.....	51
III. 第一章の要約と意識.....	52
IV. 節ごとの注解	53
一節	53
二節	59
三節	75
四節	89
五節	94
六節	97
七節から十二節	99
十三節 - 十四節	100

パウロのヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-intro.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第 1 章：天使よりも優れた神の御子

(英文は ichthys.com でご覧いただけます)

I. イントロおよび背景

a. エルサレムの当時の状況

イントロでこの問題についてかなり詳しく述べましたので、ここでは、パウロがこの手紙を書いた当時のエルサレム教会の状況を簡単に振り返っておきましょう。

その日(すなわち、ステパノの殉教の時)、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。(使徒行伝 8 章 1 節後半)(参照. [使徒行伝 8 章 3 節](#); [9 章 1-2 節](#), [22 章 24 節](#); [第一コリント 15 章 9 節](#); [ガラテヤ 1 章 13 節](#), [1 章 23 節](#); [ヘブル 10 章 34 節](#) ギリシヤ語)

これらの出来事は、私たちの主の十字架刑と復活の年、紀元 33 年の年末頃に起こりました¹。その時からヘブル書が記されるまでのおよそ二十年の間に、エルサレムの

¹ ダマスカスへの道でパウロに現れたイエス・キリストの顕現は、ステパノの殉教([使徒行伝 8 章 1 節](#)~)の直後に起こりました。その後、パウロは 3 年間、神の言葉だけに専心しました([ガラテヤ 1 章 18 節](#))。その後、エルサレムに上りましたが、そこにとどまったのは短期間で、その後タルソスに送り返されました([使徒行伝 9 章 26-30 節](#); [ガラテヤ 1 章 17 節](#))。この期間、およそ AD36 年とエルサレム会議(約 47 年)(注: [ガラテヤ 2 章 1 節](#)の「14 年間」は、パウロの回心から経過した期間を示す)の間、パウロとバルナバは小アジアへのいわゆる「最初の宣教旅行」を行いました。AD47 年の会議とパウロの逮捕(52/53 年)の間には、パウロの他の旅が位置付けられ、これにはコリントでの 1 年半の滞在([使徒行伝 18 章 11 節](#))とエペソでの 2 年間の滞在([使徒 19 章 10 節](#))が含まれます。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

a.エルサレムの当時の状況

教会は数において回復していたようです。おそらく、先に述べた迫害が収まった後にかつての住民が戻ってきたことや、また新しい会員の回心によって増えたことがその理由でしょう。主を愛する交わりであれば、たとえそれ以外の要因がなかったとしても、家庭の成長によって自然に数は増えていくものだからです。

使徒たちとユダヤ全土にいた信者たち(文字通り「兄弟たち」)は、異邦人たちも神の言葉を受け入れたことを聞いた。(使徒行伝 11 章 1 節/NIV)

すると、**全会衆**は黙ってしまった。それから、バルナバとパウロとが、彼らをとおして異邦人の間に神が行われた数々のしるしと奇跡のことを、説明するのを聞いた。(使徒行伝 15 章 12 節)

そこで、使徒たちや長老たちは、**全教会**と協議した末、お互の中から人々を選んで、パウロやバルナバと共に、アンテオケに派遣することに決めた。選ばれたのは、バルサバというユダとシラスとであったが、いずれも兄弟たちの間で重んじられていた人たちであった。(使徒行伝 15 章 22 節)

(17)わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。(18)翌日パウロはわたしたちを連れて、ヤコブを訪問しに行った。そこに長老たちがみな集まっていた。(19)パウロは彼らにあいさつをした後、神が自分の働きをとおして、異邦人の間になさった事どもを一々説明した。(20)一同はこれ聞いて神をほめたたえ、そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人中で**信者になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである**。(使徒行伝 21 章 17-20 節)

上記の最初の聖句は、迫害の直後、せいぜい 1 年ほど後の時期を示しています。当時、ユダヤ全土に信者たちが存在し、彼らがエルサレム教会と現在も交わりを保っていた、または少なくともその交わりの中にあっただことがわかります。その次の二つの聖句は、いわゆる「エルサレム会議」と呼ばれる出来事に関するものです。このとき、使徒たちと長老たち、そしてエルサレムのユダヤ人信者たちは、アンテオケの異邦人信者たちに手紙を書きました。その手紙では、「救われるために割礼を受けたり律法を守ったりする必要はない」と保証しています。ただし、ユダヤ人信者にとって特に冒瀆的とみなされる異教的な慣習を避けるように求めました([使徒行伝 15 章 20 節](#), [15 章 29 節](#))。この出来事はおよそ紀元 47 年ごろに起こったものであり、この時点ですでに教会の人数が回復していたことがわかります。最後に引用された聖句は、パウロが最後にエルサレムを訪れたときの出来事です。この直後に神殿での暴動が起こり、彼は逮捕され、その後ローマでの第一次投獄へと至ります。この出来事は、すでに見てきたよ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

a.エルサレムの当時の状況

うに紀元 52 年または 53 年ごろのことです。このときパウロと話していた人々は、集まっていた教会を「幾千もの人々から成る」と述べています。ここで注目すべきより重要な点は、どちらの場合にも、律法への強い執着と、恵みよりも律法主義を高く掲げる傾向が見られることです。最初の事例では、割礼を求める一派がペテロの証言とヤコブの妥協案によって抑えられました。二つ目の事例では、同じような律法主義的な勢力がパウロに対して、すでに無効となっていた儀式に参加するよう求めました。そしてそのことが、後にパウロにとって大きな後悔をもたらすことになったのです。

エルサレムの教会は迫害から数的には回復しましたが、霊的には、聖霊降臨後の初期に顕著だった驚くべき霊的勢いを回復しませんでした(使徒行伝 1 章から 7 章に示されています)。この失敗は、まず、目立った霊的成果の欠如から明らかです：ユダヤ、サマリヤ、異邦人の地域への伝道は、個々の使徒たちを通じて、また迫害で散らされた者たちを通じて行われました([使徒行伝 8 章 4 節](#), [11 章 19 節](#); 参照.[使徒行伝 8 章 5-40 節](#), [10 章 1-48 節](#), [11 章 19-26 節](#))。第二に、さらに懸念されるのは、ヘブル人への手紙全体に現れている律法主義と律法の影への回帰の徴(しるし)です。

(1)さて、異邦人たちも神の言を受けいれたということが、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちに聞えてきた。(2)そこでペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を重んじる者たちが彼をとがめて言った、(3)「あなたは、割礼のない人たちのところに行って、食事を共にしたということだが」。(使徒行伝 11 章 1-3 節)

さて、ある人たちがユダヤから下ってきて、兄弟たちに「あなたがたも、モーセの慣例にしたがって割礼を受けなければ、救われない」と、説いていた。(使徒行伝 15 章 1 節)

(20)一同はこれを聞いて神をほめたたえ、そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである。(21)ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなどと言って、モーセにそむくことを教えている、ということである。(22)どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきっと聞き込むに違いない。(23)については、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。(24)この人たちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。(使徒行伝 21 章 20-24 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

(1) その後十四年たってから(すなわち、彼の回心した時から)、わたしはバルナバと一緒に、テトスをも連れて、再びエルサレムに上った。(2)そこに上ったのは、啓示によってである。そして、わたしが異邦人の間に宣べ伝えている福音を、人々に示し、「重だった人たち」には個人的に示した。それは、わたしが現に走っており、またすでに走ってきたことが、むだにならないためである。(3)しかし、わたしが連れていたテトスでさえ、ギリシヤ人であったのに、割礼をしいられなかった。(4)それは、忍び込んできたにせ兄弟らがいたので——彼らが忍び込んできたのは、キリスト・イエスにあって持っているわたしたちの自由をねらって、わたしたちを奴隷にするためであった。(ガラテヤ 2 章 1-4 節)

これまでに挙げたすべての箇所において、「伝道」に最も熱心で、自分たちの主張を積極的に押し通そうとしているのは、すでに効力を失っていた律法を守るべきだと唱える人々の一派であることがわかります。このような態度が教会全体の信者の間に広く行き渡っていたとは言えませんが、上記聖句の箇所、また特に以下の聖句からも明らかのように、少なくともこの時点までのエルサレム教会の指導者たちは、この問題に関して沈黙せざるを得ない状況に追い込まれていたように見えます。そのような状態は、教会全体に悪い影響を及ぼさずにはいなかったに違いありません。

(11)ところが、ケパ(すなわちペテロ)がアンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあったので、わたしは面とむかって彼をなじった。(12)というのは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしていたのに、彼らがきてからは、割礼の者どもを恐れ、しだいに身を引いて離れて行ったからである。(13)そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた。(14)彼らが福音の真理に従ってまっすぐに歩いていないのを見て、わたしは衆人の前でケパに言った、「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしているのか」。

(ガラテヤ 2 章 11-14 節)

b. グノーシス主義

グノーシス主義とは何でしょうか？ グノーシス主義は(現在も)、より高い、秘密の、神秘的な「知識」を所有していると主張する偽りの教義の体系を指す用語です。この知識を得ることで、その所有者は特別な洞察力だけでなく、特別な力と神およびすべての神聖なものとの特別な「つながり」を得るとされました。先ほど見たように、1 世紀に

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

はグノーシス主義という体系化された宗教は存在しませんでした。² むしろ、異教とユダヤ教の背景を持つ多くの教師たちが、それぞれ類似しつつも独自の「秘密の知識と目に見えない力との接触/戦闘を通じた霊性」を説き、現代で流行している「ニューエイジ教義」のカレイドスコープ(万華鏡)的な多様性に類似した現象が広まったのです。これらの教義が現在と共通している点は、すべてが絶対的に偽りであり、絶対的に危険であるということです。

ヘブル人への手紙が書かれた時代、グノーシス主義は「見えない悪の力との戦いを通じて神を助ける」手段として現れ、その戦いは時折律法の選択的な禁欲主義を模倣しましたが、より頻繁には不法な性行為を伴いました。当然ながら、これに関わる者達は聖書を逆転させる必要がありました。ここに、サタンの三つの嘘が完全に露呈しています：真実から目を背け、その代替えの「真実」に逃げ込み、神の権威を全く考えずに自己を甘やかし、最終的には、このサタンとの戦いに助けを必要とする「別の神」を自分の心の中に置き換えることで、自分自身を正当化するのです。黙示録は、この運動の基盤となった謎めいた、影のような、常に変化する原則を「サタンの深み」([黙示録 2 章 24 節](#))と呼んでいます。なぜなら、それらは実際には悪魔の嘘で悪魔に敵対するものではなかったからです。秘密の知識は常に魅力的でした——無知な者にとって。そうでなければ、サイエントロジーの存在や、悪魔が蛇を通じてエバの頭に植え付けた「神のようになる」(または「神々になる」)という考えに、彼女が魅了されてしまったことについて他に説明が付きません。そして、偽教師がそのような<秘密の>知識を持っていると主張するのは簡単なことです。特に、それ<秘密の知識>が出し惜しみされ、高値を付けられている場合はなおさらです。歴史的にも、そのような出し惜しみや、知識を得るために多大な対価を要求されて、たくさんの人々が興味をそそられ、犠牲になってきたようです。(参照. [列王記下 10 章 5-13 節](#))。

前のセクションから明らかなように、エルサレム教会におけるより大きな問題は、グノーシス主義ではなく律法主義でした。しかし一方では、これらの二つの偽りの道は、私たちが見たように、驚くべき方法で重なり合っていました——あるいはすべての嘘のシステムが、共通の悪の源と共通の悪の目的を共有している限り、それほど驚くべきことではないかもしれません³([第一テモテ 1 章 8 節](#))。グノーシス主義には禁欲的な傾向と放縱的な傾向の両方がありましたが、律法主義もまたしばしば神秘主義へと移行します(グノーシス主義は当時その代表的な形でした)。パウロがエルサレム教会への批判を、天使崇拜への非難から始めたのは、非常に賢明な修辭的戦略でした。というのも、元パリサイ派の人々や、より伝統的な律法主義者たちは、律法の影の中に留まること

² ペテロ・シリーズ#39：偽りの教師、偽りの教え、偽りの組織参照。

³ ペテロ・シリーズ#39：偽りの教師、偽りの教え、偽りの組織参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

への直接的な批判には反発したとしても、グノーシス主義に対するこの反天使崇拝の立場にはむしろ賛同し、支持する傾向があったからです。パウロは、まず天使崇拝という第一の異端の聖書的根拠を打ち砕き、次にそこから出発して、エルサレム教会が陥っていたもう一つの主要な誤り——律法主義——を体系的に解体していくための突破口として、その議論を用いたのです。ヘブル人への手紙の最初の2章における天使崇拝の非難に加え、律法主義と律法への回帰は、エルサレム教会においてより大きな問題であり、解決がはるかに困難な問題でした：表面上は、十字架以前に存在していた礼拝のパターンを続けることは単に「伝統」であり、その伝統の中で育った人々にとって疑いなく極めて快適なものでした。グノーシス主義の誤りを示すことは、知的観点からはるかに容易でした。しかし、グノーシス主義には独自の特別な魅力があり、特に禁じられた知識への人間の基本的な欲望に訴えかけるものでした。

(4)へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。(5)それを食べると、あなたがたの目が開け、神(または「神々」)のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。(6)女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。(創世記3章4-6節)

グノーシス主義が差し出した「秘密の知識」が、礼拝の一環として淫らな行為と厳しい禁欲とを交互に行う機会によって支えられていたことを考えると、その当時におけるグノーシス主義の魅力がどれほどのものであったか、少しは理解できるようになります。大艱難期における反キリストの宗教が、同じような戦略を取るようになるのも、決して偶然ではありません。

あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。(ヘブル12章4節)

すべての人と相和し、また、自らきよくなるよう(聖化)に努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない。(ヘブル12章14節)

すべての人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。(ヘブル13章4節)

ヘブル人への手紙の最初の二つの章において、パウロがグノーシス主義の根拠を論駁したあとで、そのより卑劣な教えを詳しく説明することを、不要な脱線とみなしたのは、まったく理解できることです。とくに、その問題はすでに広く知られており、彼が他の書簡の中で徹底的に扱っていたからです(以下参照)。したがって、パウロは上記の

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

箇所においてその問題に言及し、その結果について警告していますが、彼が天使に関するグノーシス主義の誤用から、律法というもう一つの大きく、同じく深刻な問題——すなわち、その影に戻る——へと議論を移したあとは、この書簡の中でその問題について触れるのは、断片的な示唆に留まっています。しかし、新約聖書の他の箇所からわかるように、グノーシス主義はこの時代、深刻なつまずきの原因となっており、それはユダヤ人出身のクリスチャンだけに限られたことではありませんでした。

あなたがたは、むなしいだましごとの哲学(すなわちグノーシス主義)で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの霊力(タ ストイケイア ta stoicheia)に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。(コロサイ 2 章 8 節)

(20) テモテよ。あなたにゆだねられていることを守りなさい。そして、俗悪なむだ話と、偽りの「知識」(文字通り「グノーシス」)による反対論とを避けなさい。
(21) ある人々はそれに熱中して、信仰からそれてしまったのである。(第一テモテ 6 章 20-21 節前半)

(10) こういう人々は、大胆不敵なわがまま者であって、**栄光ある者たちをそしってはばかるところがない**(すなわち、グノーシス主義の悪霊どもとの戦い)。(11) しかし、[選ばれた]御使たちは、勢いにおいても力においても、彼らにまさっているにかかわらず、彼ら(すなわち、悪霊ども)を主のみまえに訴えそしる(すなわち、彼らをののしる)ことはしない。(第二ペテロ 2 章 10 節後半-11 節)

(8) しかし、これと同じように、これらの人々[偽教師たち]は、夢に迷わされて肉を汚し、権威ある者たちを軽んじ、栄光ある者たちをそしっている(すなわち、グノーシス派の「イーオンら aeons との戦い」)。(9) 御使のかしらミカエルは、モーセの死体について悪魔と論じ争った時、相手をののしりさばくことはあえてせず、ただ、「主がおまえを戒めて下さるように」と言うだけであった。(10) しかし、この人々は自分が知りもしないことをそしり、また、分別のない動物のように、ただ本能的な知識にあやまられて、自らの滅亡を招いている。(ユダの手紙 1 章 8-10 節)

しかし、こういうことはある、あなたはニコライ宗の人々(すなわち当時のグノーシス派や他の偽教師たち)のわざを憎んでおり、わたしもそれを憎んでいる。(黙示録 2 章 6 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

また、ティアティラにいるあなたがたのうち、この教義(すなわち、ニコライ派グノーシス主義)に固執しない者たち、サタンの「深い教え」と彼らが呼ぶものを認めない者たちには、わたしは別にほかの重荷を、負わせることはしない。(黙示録 2 章 24 節/ESV)

上記は、グノーシス主義が直接的、または間接的に言及されている新約聖書の節の抜粋です(その他の例:[ヨハネ 1 章 1-14 節](#); [第一コリント 2 章 4-5 節](#), [3 章 19 節](#); [ガラテヤ 4 章 3 節](#), [4 章 9 節](#); [エペソ 4 章 14 節](#); [第一テモテ 1 章 3-7 節](#); [第二テモテ 2 章 16 節](#), [4 章 3-4 節](#); [テトス 1 章 14 節](#); [第二ペテロ 1 章 16 節](#), [3 章 10 節](#), [3 章 12 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1 節](#), [4 章 2-3 節](#), [5 章 6-8 節](#))。その後、すなわち、パウロがヘブル人への手紙を書いた後の数年間に、ペテロとヤコブは、これまで見てきたように、小アジアの諸教会宛てに、この同じ問題にかなりの部分を割いて手紙を書きました。⁴ 当時のエルサレム教会は、他のキリスト教世界との連絡がまったく途絶えていたわけではありませんでした。実際、それはキリスト教世界の中心であり、母都市でした。これは、教会の初期および使徒時代の終りにおいて、真理と宣教の努力が、そこから地中海世界へと広がっていったことを意味します(少なくとも使徒たちとその書簡を通じて)。しかしその中間の時期には、いわば逆流するように、否定的な影響がエルサレムへと流れ込む期間があったことがわかります。もともと何世紀にもわたって、あらゆる種類の改宗者たちが、年ごとの祭りのために、また律法の有名な教師([使徒行伝 22 章 3 節](#))や、神秘主義者、さらにはグノーシス主義の教師たちと交わるために、エルサレムを訪れていました。そのようなことは、現代においても同様です。したがって、地中海世界のユダヤ人社会で起こっていたあらゆる動きが、やがてエルサレムにも及んだであろうことは確かです。

そのような状況については、新約聖書全体を通して、ユダヤ人社会の中に天使や悪霊に対する過度に病的な関心と好奇心が存在していたことを示す十分な証拠があります。そうでなければ、主とその弟子たちが対応しなければならなかった、あの前例のないほど多くの悪霊憑きの事例を、どのように説明できるでしょうか。福音書を読む者は誰でも、主がユダヤの民に対する地上でのご奉仕の間に行われた数多くの悪霊の追放——それもご自身だけでなく、十二人([マタイ 10 章 8 節](#))や、その後に派遣された七十二人([ルカ 10 章 17 節](#))を通しても行われた——に強い印象を受けずにはいられません。そしてこの傾向は、使徒たちの時代にも続いていきました([使徒行伝 5 章 16 節](#), [8 章 7 節](#), [19 章 12 節](#); [使徒行伝 16 章 16-18 節](#)参照)。

⁴ [ペテロ・シリーズ#39：偽りの教師、偽りの教え、偽りの組織](#)参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたの仲間は何れによって追い出すのであろうか。だから、彼らがあなたがたをさばく者となるであろう。(マタイ 12 章 27 節)

(13)そこで、ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが、悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとねえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる。出て行け」と、ためしに言ってみた。(14)ユダヤの祭司長スケワという者の七人のむすこたちも、そんなことをしていた。(使徒行伝 19 章 13-14 節)

これら二つの聖句は、紀元一世紀中頃のユダヤ人社会において、悪霊的なものへの強い関心が存在していたことを示しています。このことから、悪霊祓いに手を出す者が多くいたのと同時に、悪霊との接触——さらには憑依——を招くさまざまな行為に関わっていた者が、さらに多く存在していたと推測してよいでしょう。当時、聖書に記録されているほど多くの悪霊憑きの事例があったという事実そのものが、このことを裏づけています。なぜなら、悪霊の憑依は、少なくとも最初の段階では、憑依される側に一定の「受け入れの意志」が必要だからです。こうした傾向は、パウロが直面したグノーシス主義への関心と密接に結びついています。それはヘブル人への手紙の場合だけでなく、同じ問題に悩まされていた異邦人とユダヤ人の混合教会にも見られます。このことは、エペソ書とコロサイ書——明確に反グノーシス的内容を含むことでよく知られている二つの書簡——からも明らかです(前注参照)。

(15)そして、[十字架によって神は、**悪霊の**]もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(16)だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。(17)これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。(18)あなたがたは、わざとらしい謙そんと**天使礼拝**とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されてはならない。彼らは幻を見たことを重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、(19)キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、[教会である]からだ全体は、[すべての]節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。(20)もしあなたがたが、キリストと共に死んで[異教の]世のもろもろの霊力(グノーシス主義、ユダヤ教の神秘主義、律法主義の *ta stoicheia*)から離れたのなら、なぜ、なおこの世に生きているもののように、(21)「さわるな、味わうな、触れるな」などという規定に縛られているのか<イクシス直訳: 誤って洗脳されているのか>。(22)これらは皆、使えば尽きてしまうもの、人間の規定や教によっているものである。(23)これらのこと

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

b. グノーシス主義

は、ひとりよがりの礼拝とわざとらしい謙そんと、からだの苦行とをともにうので、知恵のあるしわざらしく見えるが、実は、ほしいままな肉欲を防ぐのに、なんの役にも立つものではない(つまり、罪の性質はこれらの律法主義的な規制で制御できるものではありません)。(コロサイ 2 章 15-23 節)

上の箇所は、グノーシス主義が初期の教会において、ユダヤ人と異邦人の双方から成る信徒たちの間で問題となっていたことを明確に示しています。また、グノーシス主義が律法、すなわちパリサイ派的または神秘主義的な律法解釈と容易に切り離せないものであったこともわかります。この二重の脅威を退けるために、パウロはコロサイの信徒たちに対して、次のようにして彼らの救いを確信させています。(15 節)十字架においてイエス・キリストはすでにサタンとその悪霊たちに勝利されたこと。(16 節)したがって、律法の儀式に関わることは、救いの面でも(キリストの霊的死によって罪がすでに取り除かれたため)、またグノーシス的な「悪霊との戦い」の面でも(キリストがすでに彼らすべてに勝利し、天に昇り、父の栄光を受けられたため)、何の効力も持たないこと。(17 節)律法とはキリストの到来とその勝利を前もって示す「影」にすぎず、したがって救いのためにも、またグノーシス的戦いのためにも、何の助けにもならないこと。(18 節)天使を礼拝したり、悪霊との接触を持ったりするなど、グノーシス的な「不可視の世界」との関わりは、霊的成長への道ではなく、極めて危険な行為であること。(19 節)これらの偽りを教える者たちは、キリストから完全に離れており——そもそも最初からキリストに属していなかった可能性すらあること。(20 節)信仰によって恵みにより救われた者は、すでにキリストの一部とされており、もはや律法の影や、この世の自然的原理(それらは本来、キリストへ導くためのものでしかなかった)へ戻る必要はないこと。そして、もしこれらの偽教師たちの誤った教えに従って後戻りするなら、信徒としての立場そのものを危うくする危険があること。(21-22 節)「触れるな、味わうな、手をつけるな」といった命令や禁止は、物質的な行為にすぎず、霊的な意味を持たないこと——ただし、それらが真の霊性を損なったり破壊したりする限りにおいては、むしろ害をもたらすこと。(23 節)これらのグノーシス的または神秘主義的／律法主義的な教え(多くの場合、両者が混ざり合って極めて有害な形となっていた)は、最終的には何の真の喜びももたらさず、罪に対する有効な防御にもならないこと——むしろ信者をキリストから引き離す結果にしかならないこと。

要するに、これこそがパウロがエルサレム教会の信徒たちにも語ろうとしていることの核心です。しかしながら、エルサレム教会ではこの問題がより深く根づいていたため、パウロがその誤りを正すためには、さらに多くの時間と労力を要することになったのです。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

c. 律法主義

律法主義とは何でしょうか？⁵ イスラエルとユダの王国時代の捕囚以前、異教はユダヤ人の最も顕著な「アキレス腱<弱点>」でした。捕囚からの帰還後、神殿の再建とユダヤ民族の再建を経て、不信仰は最終的に反対の方向に転じ、律法が自己正当化の道具として用いられるようになりました。律法に込められた主への真の礼拝は、いわゆる専門家、書記たち、パリサイ人たちが「人のいましめを教として教える」([マタイ 15 章 9 節](#))ことで、単なる口先だけの礼拝に歪曲されていきました。もちろん、私たちの主はイザヤ書([イザヤ 29 章 13 節](#))を引用しておられました。この事実は、律法主義がその前の時代にも不在ではなかったこと(ちょうど後の時代にグノーシス主義的傾向が不在ではなかったのと同様に)を示しています。実際、律法主義とグノーシス主義は、しばしば認識されているよりもはるかに多くの共通点を持っています。どちらも聖書的知識を装う偽りの体系であり、どちらも神への道であると主張し、どちらも悪魔から出ていて、不信者たちによって真理を覆い隠す目的で広められています([マタイ 13 章 19 節](#))。律法主義の危険さは、聖書と聖書の戒めに身を包みながら、恵みを完全に退けて、行いを救いの手段として置き換えるところにあります——その結果、それを受け入れるすべての人が救われることを不可能にしてしまうのです。

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはிரないし、はいろうとする人をはいらせもしない。(マタイ 23 章 13 節)

人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。(ガラテヤ 2 章 16 節)

律法によって義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまっている。恵みから落ちている。(ガラテヤ 5 章 4 節)

紀元一世紀の律法主義の例は、聖書に数多く記されています：救いには割礼が必要であると教えること([ガラテヤ 2 章 12 節](#)；[テトス 1 章 10 節](#))；律法の祭りの継続を要求すること([ヨハネ 9 章 16 節](#)；[コロサイ 2 章 16-17 節](#))；パリサイ派の食事規則への従順を要求すること([マルコ 7 章 19 節](#)；[ガラテヤ 2 章 12 節](#))。これらのことすべてとさ

⁵ また、[BB 6A:ペリパテオロジー, I.2.C.3, 「識別への障害」](#)についても参照ください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

らに多くのことが、今日の律法主義的なサークルで依然として存在しています(例えば、十分の一献金、水の洗礼、服装、外見、行動への無意味な制約、古今東西で考え出されてきた様々な儀式など)。しかし、あらゆる形の律法主義に共通しているのは、それを実践する人々が、他人の自由と解放に対して自らの意志を押し付け、大小を問わず、あらゆることについて自由意志の行使を一切認めず、その人の事実上すべての決断について、権力ある者に対して答えなければならないように、「説明責任」を負わせようとする傾向があるということです。

それは、忍び込んできたにせ兄弟らがいたので——彼らが忍び込んできたのは、キリスト・イエスにあって持っているわたしたちの**自由**をねらって、わたしたちを**奴隷**にするためであった。(ガラテヤ 2 章 4 節)

自由を得させるために、キリストはわたしたちを**解放**して下さったのである。だから、堅く立って、二度と**奴隷**のくびきにつながれてはならない。(ガラテヤ 5 章 1 節)

律法主義はしばしば禁欲主義と結びつけられ、グノーシス主義は放縦(奔放)と関連づけられやすいのですが、これら二つの誤った教えの体系は、少なくとも一方の足を互いの陣営に踏み入れています。すでに見たように、グノーシス主義は、ある時期には一方の極端からもう一方へと移行する「休暇」のような期間を提供していました。すなわち、最も傾きやすい傾向の反対を、「犠牲」として行うのです。たとえば、好色な者にとっては断食と自己否定、禁欲的な者にとっては宴会と放縦といった具合です。同様の傾向は、律法主義的なユダヤ教のサークルにも見られ、彼らは数秘術、占星術、カバラ、悪魔祓いなどを通じて、秘密の知識を追求する者たちでした。1930 年代のドイツで、ナチスと共産主義者は、名目上は激しい敵対関係にあったものの、左右両極のより穏健派よりも互いに多くの共通点を持っていたことに似ています。そのため、一般党员が気まぐれに一方から他方へと移ることも珍しくありませんでした。同じように、一世紀においても、律法とその神秘的解釈に最も通じた者たちがグノーシス主義の指導者となり、逆に異教的なグノーシス主義者が律法に惹かれるという現象が見られたのです。

(15)そして、[十字架によって神は、**悪霊**の]もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(16)だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。(17)これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。(18)あなたがたは、わざとらしい謙そんと**天使礼拝**とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されては

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

ならない。彼らは幻を見たことを重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、(19)キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、[教会である]からだ全体は、[すべての]節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。(20)もしあなたがたが、キリストと共に死んで[異教の]世のもろもろの霊力(グノーシス主義、ユダヤ教の神秘主義、律法主義の *ta stoicheia*)から離れたのなら、なぜ、なおこの世に生きているもののように、(21)「さわるな、味わうな、触れるな」などという規定に縛られているのか(イクシス直訳: 誤って洗脳されているのか)。(22)これらは皆、使えば尽きてしまうもの、人間の規定や教によっているものである。(23)これらのことは、ひとりよがりの礼拝とわざとらしい謙そんと、からだの苦行をとともなうので、知恵のあるしわざらしく見えるが、実は、ほしいままな肉欲を防ぐのに、なんの役にも立つものではない(つまり、罪の性質はこれらの律法主義的な規制で制御できるものではありません)。(コロサイ 2 章 15-23 節)

私たちはすでに、この箇所をグノーシス主義の観点から考察しましたが、ここではまた、これら二つの異端的傾向が融合している様子を明確に見ることができます。キリストが悪霊の勢力に対して勝利を収められたこと(15 節)に注意を促すことは、私たちがすでにキリストによって成し遂げられたことを「自ら行わねばならない」とするグノーシス主義の思想を否定するものです。また、「食べ物や飲み物、あるいは新月や安息日などの祭日のことで、誰にもあなたがたを批判させてはならない」(16 節)という勧めは、十字架によってすでに成就した影にすぎないものを追い求める、律法主義的行動に対する断固たる戒めです(17 節)。さらに 18-19 節では、偽りの謙遜(すなわち律法主義的な禁欲)や天使崇拜、天使的幻視の報告(すなわちグノーシス主義的体験)によって自分の人生を支配されないようにと警告しながら、パウロはこの二つの誤った体系の両方を非難しています。20 節前半で、パウロが「この世の基本原理(*ta stoicheia*)」を引き合いに出すとき、それは自然界の天体そのものを指しています。ここには、律法主義(これらの天体によって定められた祭日遵守)とグノーシス主義(天体を天使やアイオンと同一視する占星術的神秘主義)の明確な重なりが見られます。しかし、こうした教えは——それが律法に(偽って)関連づけられていようと、「知識(*gnosis*)」に(偽って)基づいていようと——結局のところ「人間の戒めと教え」にすぎません。それらには、肉的な欲望を克服する力も、真の勝利を与える力もまったくありません(21-23 節)。当時、放縱的傾向と禁欲的傾向の両方が、どちらの異端にも存在しており、同じことが今日にも当てはまります。したがって、パウロが一方の問題から他方の問題へと自然に移行しているのは当然のことです。そしてその事実自体が、当時のすべてのクリスチャンがこれら二つの誤りについてある程度の理解を共有していたことを示しています。つまり、律法主義やグノーシス主義のいずれか、あるいは両方に関与することは

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

偶然ではなかったのです。人々はそれを——信者でさえ——楽しみを見いだしたからこそ行っていたのです。それが霊的にどれほど致命的に危険であるにもかかわらず、です。

わたしたちが知っているとおりの、律法なるものは、法に従って用いるなら、良いものである。(第一テモテ 1 章 8 節)

モーセの律法そのものは、旧約聖書全体と同様、神から与えられた真理の体系です。したがって、律法主義という問題は律法そのものに原因があるのではなく、その誤った解釈と実施から生じるのです。

わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。(マタイ 5 章 17 節)

律法と預言者、すなわち旧い契約全体は、十字架を見据えていました。それらが書かれ、与えられた当時、主イエスはまだ世に来られていなかったため、この未来を見通す視点は、必然的に影に包まれていました。その影が取り除かれ、背後にある真理の詳細が完全に明らかにされたのは、キリストが肉体をもって来られ、十字架の勝利と復活が歴史的現実となり、聖霊が与えられ、律法が指し示していた聖書のより深い真理がすべて啓示され、解き明かされたときのことでした。

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならぬが、これも見のがしてはならない。(マタイ 23 章 23 節)

ここで主は、律法を扱う際の誤った律法主義的姿勢の本質を私たちに示しておられます。すなわち、律法に含まれ、将来を指し示していた本当に重い真理を見落とし、その代わりに重要でない事柄にこだわる——しかもそれらの本来の意味と真理までも誤解しているという点です。

(35)そして彼らの中のひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、(36)「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。(37)イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。(38)これがいちばん大切な、第一のいましめである。(39)第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。(40)これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている』。(マタイ 22 章 35-40 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

正しく理解すれば、旧約聖書には、新約聖書、すなわち福音書における主の教えと使徒たちの書簡における教えとが、完全に一致しない箇所は一節もありません。

あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたのしていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。(マタイ 13 章 17 節)

(10)この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。(11)彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。(12)そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

律法が与えられる前から主に親しく歩んでいた人々にとっては、真理は明確に理解されていました。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの例がそれをよく示しています。また、前の聖書箇所が示しているように、敬虔な信仰者たちは律法を誤って用いることはありませんでした。律法の目的は、罪を明らかにして([ローマ 3 章 20 節](#), [7 章 7 節](#))、罪を赦し救いを与えることのできる唯一のお方へと導くことにあったからです([ガラテヤ 3 章 24 節](#); 参照 [ガラテヤ 3 章 19-20 節](#))。ところが、律法を救いの手段そのものとして用いるという誤った使い方——まさに律法学者やパリサイ人が犯した罪——は、神が与えられた律法の本来の目的を、完全に反転させてしまうものなのです。

(21)では、律法は神の約束と相いれないものか。断じてそうではない。もし人を生かす力のある律法が与えられていたとすれば、義はたしかに律法によって実現されたであろう。(22)しかし、約束が、信じる人々にイエス・キリストに対する信仰によって与えられるために、聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めたのである。(ガラテヤ 3 章 21-22 節)

このように、律法の誤った基準を救いの手段としてすり替えることこそが、定義上の「律法主義」です。パウロがこの書簡の中で戦っていた律法主義の特定の形は、モーセの律法の意図的な誤解釈に基づくものでした。しかし、今日のいわゆる「キリスト教」的な律法主義の諸派においても見られるように、信者を縛るために定められた規則や制度と、実際の律法との関係はきわめて曖昧で緩やかなものになっていました。パウロ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

の時代にも同じように、モーセが実際に書き記したものをはるかに超える多くの律法的要求が新たに付け加えられ([マタイ 23 章 4 節](#))、一方で、律法の中にある「もっとも重要なこと」、すなわちその霊的核心と真の意味は、ないがしろにされていたのです([マタイ 23 章 23 節](#))。

(7)偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、(8)『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。(9)人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拜んでいる』。(マタイ 15 章 7-9 節)

安息日の律法主義的な解釈([ルカ 13 章 14 節](#))、水に浸して洗い清めることの強要([マルコ 7 章 3-4 節](#))、十分の一献金の形式的実施([ルカ 11 章 42 節](#))、そして律法の本質をこれらや他の枝葉末節な事柄にすり替えてしまうことは、当時も今も問題でした([マタイ 23 章 23 節](#); [マルコ 7 章 5-16 節](#))。しかし、それらの中でもっとも重大な罪は、律法が指し示していたイエス・キリストのご人格と、その私たちのための犠牲を貶めることにほかなりません。律法主義の中でもっとも深刻な誤り——それが、エルサレムの信者たちが犯していた罪でした。すなわち、彼らは「自分たちが愛している」と告白する「主を再び十字架につけ」、公然と恥をかかせているのです。なぜなら、律法の犠牲制度はすでにキリストによって完全に成就されたにもかかわらず、彼らはなおその影にすぎない古い犠牲を続けていたからです。それは、まだ来っていないメシヤ、まだキリストの血によって買い取られていない救いを示す儀式にしがみつくに等しいのです。

キリストは、すべて[彼を]信じる者に義を得させるために、律法の終り(文字通り「終わり」となられたのである)。(ローマ 10 章 4 節)

神が律法の影を通して民に語りかけた時代は終わり、御子を通して以前隠されていたすべての神秘を直接示される時代が到来しました([ローマ 16 章 25 節](#))。十字架は、神がご計画されたように、歴史を二分するものです。

すべての預言者と律法とが預言したのは、[バプテスマの]ヨハネの時までである。(マタイ 11 章 13 節)

(1)神は、**むかしは**、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2) **しかし今、**この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 1-2 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

律法は、誰も完全に守ることが不可能であったため([ヤコブ 2 章 10-11 節](#)、[ガラテヤ 6 章 13 節](#) 参照)、私たちを救うことは不可能でした([ガラテヤ 2 章 16 節](#))。律法の目的は、私たちが罪人であることを示し([ガラテヤ 3 章 19 節](#); 参照 [ローマ 3 章 20 節](#)、[7 章 7 節](#))、私たちの罪をすべて贖うためにイエスの霊的な死によってのみ成し遂げられることを、自分たちではできないことを示し、その結果、私たちを唯一の救いの道であるキリストへと導くことでした。

このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。(ガラテヤ 3 章 24 節)

今や律法は、イエス・キリストの犠牲によって完全に成就されたため([マタイ 5 章 17-18 節](#); [ローマ 10 章 4 節](#))、その象徴的な規定に従うことには、もはや何の目的もありません。もちろん、私たちクリスチャンは、聖書のどの部分に記されている罪に対する禁令であっても、それを破ることのないよう責任を負っています([ガラテヤ 2 章 17-19 節](#))。しかし、私たちはすでに死んだ者として、モーセの律法の他の規定に従う義務は負っていません([ローマ 7 章 4 節](#))。律法とは、イエス・キリストという現在の実体と、キリストの御体・花嫁である教会としての私たちの結びつきを予表していたにすぎません([ガラテヤ 2 章 19 節](#); [コロサイ 2 章 20 節](#)、[3 章 3 節](#); [第二テモテ 2 章 11 節](#))。このことが意味するのは、たとえば十戒に関しても、それらを守るべきであることに変わりはないものの、第四の戒めである「安息日を守ること」だけは、かつての儀式的な遵守から、より深い霊的現実へと移行したということです。すなわち、今やそれは——日ごと、時ごとに、イエス・キリストとの信仰の歩みにおいて与えられる「安息」の現実となったのです。そして、この原理が最も明確に教えられているのが、[ヘブル 4 章 1-10 節](#)であることは、決して偶然ではありません。

これまで私たちは主に、聖書に記されているモーセの律法そのものについて——正しく理解され、正しく解釈されたかたちで——語ってきました。パウロが「ヘブル人への手紙」を書いた当時、ユダヤに住む人々の中には、「律法を守るとは理論的には可能である」と感じていた者もいたかもしれません。しかし、それが実際には不可能であることを、パウロはすでにローマ書 6 章・7 章およびガラテヤ書全体を通して明確に述べています。そして、議論の余地もなく確かなこととして、そのほんの数年後——エルサレム神殿の崩壊と、それに伴うすべての儀式の中止によって——律法を守るとは、もはや部分的にしか行えなくなったという事実です。すなわち、パウロがこの手紙によって兄弟たちを救おうと必死に試みていた、主イエスの犠牲を予表していた犠牲の儀式のいずれも、もはや行うことが不可能になってしまったのです。祭りは廃止され、十分の一の献げ物も終わりを迎えました。残されたのは、食物規定などの律法の

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

一部だけ——それらは本来、全体の体系の中で意味を持っていたものであり、単独で存在するためのものではなかったのです。

律法の教師たることを志していながら、自分の言っていることも主張していることも、わからないでいる。(第一テモテ 1 章 7 節)

今日、「律法を守ろう」とするすべてのクリスチャンは、定義上すでに失敗しています。なぜなら、たとえ極端に形式的でパリサイ的な適用を行い、霊的現実をまったく無視したとしても、モーセの律法の中には、現在では実際に守ることが不可能な多くの規定があるからです。たとえば——・イスラエルの地における相続に関する律法、・年に三度エルサレムに上り主の御前に出ること、・他の神々を礼拝する不信者を滅ぼす義務、これらはすべて、今日では実行できません。それにもかかわらず、現代の律法主義(リーガリズム)は、こうした致命的な欠陥を無視し、さらに悪いことに、自分たちの集団が重要だとみなす戒めだけを選んで守ろうとします。(まるで他の戒めは重要ではないかのように——しかし、それらも同じく神の御言葉の一部です。)さらに悪いのは、律法主義者たちがそのように選び取った戒めのリスト自体を誤って解釈し、誤って適用しているということです。そして、最も悪質なのは——律法主義の根本にある致命的な虚偽そのものです。すなわち、「人間が作り出した規則のいくつかを守ることによって救われる」という、恐るべき偽りです。実際には、イエス・キリストの御人格と御業以外の何かに頼ることは、救いではなく、裁きの確証となるだけなのです。

同じような傾向は、パウロの時代のエルサレムにおいても、本質的にはすでに見られていました。律法を——どのように定義するにせよ——救いの手段として受け入れることの重大な副作用の一つは、主イエスが激しく非難された、あのパリサイ派的偽善に陥らざるを得なくなるということです([マタイ 23 章 13-36 節](#))。それは必然的なことです。なぜなら、律法の完全な基準は、すべての人間が罪人であることを明白に示しているからです。すなわち、罪を正しく定義し理解するなら、誰ひとりとして、一日たりとも罪を犯さずに生きることはできないのです。そのため、律法を救いの手段とする人は、自分自身が守れる(もしくは他人の目から隠せる)範囲のことだけを禁じるように、意図的に律法(あるいは人間が作り出した一部の規則)を誤って解釈するという偽善を受け入れざるを得なくなるのです。

このような理由から、すべての形の律法主義は、自分たちの歪められた律法を守らない他者に対して、非常に裁断的(ジャッジメンタル)になりがちです。さらに悪いことに、真理を大胆に宣べ伝える人々に対して、あらゆる手段——暴力さえも含めて——で沈黙させようとする迫害的傾向を持つのです。これは、まさにパウロ自身が経験したことでした。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

兄弟たちよ。わたしがもし今でも割礼を宣べ伝えていたら、どうして、いまなお迫害されるはずがあらうか。そうしていたら、十字架のつまずきは、なくなっているであらう。(ガラテヤ 5 章 11 節)

おそらく歴史上、誰よりも、パウロは「キリストの苦しみにあずかる」ことを与えられた人物でした([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ピリピ 1 章 29-30 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第二テモテ 2 章 12 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-13 節](#); 参照. [マタイ 10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#), [10 章 21 節](#), [10 章 38-39 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#), [14 章 27 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#); [第二コリント 4 章 10-11 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#); [第二テサロニケ 1 章 4-5 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#))。そして、主ご自身も彼に警告しておられたように([使徒行伝 9 章 16 節](#); 参照. [第一コリント 4 章 8-13 節](#); [第二コリント 4 章 7-12 節](#), [6 章 3-10 節](#), [11 章 16-33 節](#); [ピリピ 3 章 7-11 節](#); [第二テモテ 3 章 11 節](#); 更に、他の使徒行伝とパウロの書簡の随所)。彼が受けた数々の苦しみも多くは、恵みによる救いと異邦人への福音宣教を拒んだユダヤ人の律法主義者たちの手によって与えられたものでした。([使徒行伝 11 章 2-3 節](#), [15 章 1 節](#)〜; [ガラテヤ 2 章 3-5 節](#), [5 章 1-13 節](#), [6 章 12-13 節](#); [コロサイ 2 章 16-17 節](#); [テトス 1 章 10 節](#))。

(20) 実際、あなたがたは**奴隷にされても、食い倒されても、略奪されても、いばられても、顔をたたかれても**、それを忍んでいる。(21) 言うのも恥ずかしいことだが、わたしたちは弱すぎたのだ。(第二コリント 11 章 20-21 節前半)

ここで私たちは、律法主義のもう一つの側面を見ることができます。律法主義——すなわち、律法そのものに含まれる真理をゆがめ、悪用する偽りの基準への固執——は、恵みの教えに対して、あらゆる手段をもって反対しようとする強烈な熱情を引き起こします([使徒行伝 21 章 20 節](#); [ローマ 10 章 2 節](#); また、パウロ自身が回心以前に信者を熱心に迫害したことからも明らかです: 例えば、[使徒行伝 8 章 3 節](#), [9 章 11 節](#), [26 章 9-11 節](#); [ピリピ 3 章 6 節](#))。しかし同時に、この偽りの熱意と誤った確信が、多くの人々にとって非常に魅力的に見えるという現実もあります。なぜか分かりませんが、自ら進んで「奴隷になる」ことは、多くの人にとって誘惑的な提案のように思えるのです。そうでなければ、人類の歴史の初めからこれほど多くの人々が、さまざまなカルトや宗教に自発的に身を委ねてきた理由をどのように説明できるのでしょうか。彼らは、先に引用した聖書箇所に出てくるコリントの人々の負の手本に倣っています。彼らは、パウロが恵みをもって接し、支援を一切受け取らなかった([第一コリント 9 章 15 節](#); [第二コリント 11 章 7-10 節](#))にもかかわらず、横柄で反抗的な態度を示しました。それなのに彼らは、パウロの後に入り込み、割礼や律法の戒めを教えることによって恵みを覆そうとした偽教師たちの虐げには、喜んで身を委ねたのです。まるで救いがそうした律法

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

的な行為にかかっているかのように——しかし実際には、そのような偽りの教えを受け入れることは、「キリストへの信仰による恵みによる救い」そのもの ([エペソ 2 章 8-9 節](#)) を完全に失わせる行為だったのです。

律法によって義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまっている。**恵みから落ちている。**(ガラテヤ 5 章 4 節)

要するに、律法主義の本質は「奴隷状態」です。それは、真理のふりをした偽りへの奴隷なのです。そして、これはまた、「宗教」一般にも当てはまることです。すなわち、聖書的なキリスト教——神の恵みによって、信仰を通してイエス・キリストに献身する生き方——とは正反対のものです。律法主義と恵みは、根本的に相反するものです。恵みは、人間が作った余計な規則に縛られることなく、自由にイエス・キリストに従えるようにしてくれます。一方、律法主義は、そのような規則を作り出す者たちの気まぐれに厳密に従うことを要求します。その関心は、内面的な霊性ではなく、外面的な体裁(白く塗った墓のような見かけ)に向けられています。そして、そのようなゆがんだ生き方の行き着く先は「死」なのです。

(8)神を知らなかった当時、あなたがたは、本来神ならぬ神々の**奴隷**になっていた。(9)しかし、今では神を知っているのに、否、むしろ神に知られているのに、どうして、あの無力で貧弱な、[異教の]もろもろの靈力に逆もどりして、またもや、新たにその**奴隷**になろうとするのか。(10)あなたがたは、日や月や季節や年などを守っている。(11)わたしは、あなたがたのために努力してきたことが、あるいは、むだになったのではないかと、あなたがたのことが心配でならない。(ガラテヤ 4 章 8-11 節)

(21)律法の下にとどまっていたいと思う人たちよ。わたしに答えなさい。あなたがたは律法の言うところを聞かないのか。(22)そのしるすところによると、アブラハムにふたりの子があつたが、ひとり**は女奴隷**から、ひとり**は自由**の女から生れた。(23)**女奴隷**の子は肉によって生れたのであり、**自由**の女の子は約束によって生れたのであった。(24)さて、この物語は比喩としてみられる。すなわち、この女たちは二つの契約をさす。そのひとりはシナイ山から出て、**奴隷**となる者を産む。ハガルがそれである。(25)ハガルといえば、アラビヤではシナイ山のことで、今のエルサレムに当る。なぜなら、それは子たちと共に、**奴隷**となっているからである。(26)しかし、上なるエルサレムは、自由の女であつて、わたしたちの母をさす。(ガラテヤ 4 章 21-26 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

したがって、そこに妥協の余地はまったくありません。律法(あるいは、律法の一部を選び出して組み合わせ、強制的な行動規範として体系化した教え)を、救いの手段として受け入れることは、必然的に滅びをもたらします。なぜなら、救いはただ、神の恵みによって、イエス・キリストへの信仰を通してのみ与えられるからです。したがって、恵みと律法主義は完全に相容れないものであり、それに反するあらゆる主張や印象は、明らかに偽りです。律法主義とは奴隷状態であり——最終的には悪魔への奴隷です。一方で、恵みとは神が人類全体に対して示された慈愛に満ちた方針であり、イエス・キリストの御人格と御業——すなわち、私たちのために死に、罪の罰をすべて支払われた方——に関する真理を受け入れる者すべてに、代価なしで救いを提供するものです。

(14)キリストはわたしたちの平和であって、[ユダヤ人と異邦人という]二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、(15)数々の**規定から成っている戒めの律法**を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、(16)十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と[人とを]和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。(エペソ 2 章 14-16 節)

(13)あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで[靈的に]死んでいた者であるが、[父なる]神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。(14)神は、わたしたちを責めて不利におとし入れる証書を、その規定もろともめり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。(コロサイ 2 章 13-14 節)

御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、**価なしにそれを受ける**がよい。(黙示録 22 章 17 節)

私たちクリスチャンは、罪の奴隷状態から贖われ([ローマ 6 章 6 節](#), [6 章 18 節](#), [6 章 20 節](#), [6 章 22 節](#))、また律法ののろいからも贖われました([ガラテヤ 3 章 13 節](#))。それは、キリストの血、すなわち私たちのための十字架上での靈的な死によるものです。このため、私たちは、「キリストが私たちを自由にしてくださったその自由のうちに、しっかりと立ちなさい」——そして再び「奴隷のくびきに縛られてはならない」という権利を与えられているのです([ガラテヤ 5 章 1 節](#))。しかし、律法主義はこれらの祝福の正反対です。律法主義は、恵みの代わりに行いを救いの条件とすることで、事実上「キリストは無駄に死なれた」と宣言しているようなものです([ガラテヤ 2 章 21 節](#))。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

c. 律法主義

この人々に自由を与えると約束しながら、彼ら自身は滅亡の奴隷になっている。おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである。(第二ペテロ 2 章 19 節)

律法から離れ、イエス・キリストの犠牲によって今私たちが持っている自由の生活へと進むことは、パウロの時代のユダヤ人信者たちにとって、さまざまな意味で困難な転換でした。この変化こそ、言ってみれば、使徒時代全体の主要な目的であったと言っても過言ではありません(前に見たとおりです⁶)。恵みの大使者である偉大な使徒パウロ自身も、この転換を一瞬で、あるいは何の波風もなく成し遂げたわけではありません。彼が律法よりも恵みを完全に受け入れるようになるまでには時間がかかり、そして神はその時間を与えられました。彼はすぐには、アンテオケで異邦人信者と食卓を共にすることを拒んだペテロの偽善を指摘しませんでした([ガラテヤ 2 章 11-14 節](#))。また、彼はすぐに割礼([使徒行伝 16 章 1-3 節](#); 参照: [ガラテヤ 2 章 3-5 節](#))やヨハネの水のバプテスマ([第一コリント 1 章 13-17 節](#))といった、すでに置き換えられた行いをやめたわけでもありませんでした。さらに、誓願の使用([使徒行伝 18 章 18 節, 21 章 23 節](#); 参照: [第一コリント 11 章 2-16 節](#))もすぐにはやめませんでした。つまり、パウロでさえも、律法の儀式へのいかなる関与も恵みの否定である([ガラテヤ 5 章 4 節](#))こと、そしてその血のいけにえを続けることは、事実上、私たちのために死なれたイエスの犠牲を拒むことになることと理解するまでに、真理のうちで多くの成長を要したのです。彼が、自分より先に使徒とされた人々に対して、自然な遠慮を抱いていたのも理解できます([ガラテヤ 2 章 2 節](#))。しかし、この傾向は彼にとって高い代償を伴うこととなりました([使徒行伝 21 章 20-24 節](#))。それでも、ヘブル書を執筆した時点で、パウロの律法との決別——すなわち、主の霊的死を予表するための儀式的な実行からの決別——は完全なものとなっていました([第一テモテ 1 章 8 節](#))。彼は、妥協の結果を苦い個人的経験を通して悟り、ヘブル書において全力で戦い、愛する人々を、伝統・感傷・妥協によって信仰を損ない、律法を熱心に守ることで義と救いを得ようとする偽りの熱情に陥る結果として、最終的にはさらに深刻な結末を招く危険から救おうとしました([ヘブル 6 章 4-6 節, 10 章 29 節](#))。

(2) わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。(3) なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。(4) キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。(ローマ 10 章 2-4 節)

⁶ 使徒行伝は、多くの点で、律法から恵みへの移行を記録することに費やされています。 [BB 6B: 教会論. I.B.5.c, 「使徒行伝の本質」](#)を参照ください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

旧約聖書全体は、重要であり、価値があり、神のことばの欠かすことのできない一部です。そして、それを正しく理解するならば、私たちの霊的成長に大きく貢献するものです([ローマ 15 章 4 節](#))。律法は、それを正しく用いるならば、本来は良いものです([第一テモテ 1 章 8 節](#))。そもそも「律法」という言葉、「トーラー」は「教え」を意味し(トーラーtorah は「教える」という意味の動詞ヤーラーyarah に由来)、その中心的な教えとはイエス・キリストご自身であり、そして私たちが絶対的にキリストを必要としているということです。私たちは、律法の行いによって**ではなく**、恵みによって、信仰を通して義とされるのです([エペソ 2 章 8-9 節](#))。

(1) 悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。(2) このような人は主のおきて(トーラー)をよこび、昼も夜もそのおきて(トーラー)を思う。(詩篇 1 篇 1-2 節)

(28) わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。(29) それとも、神はユダヤ人だけの神であろうか。また、異邦人の神であるのではないか。確かに、異邦人の神でもある。(30) まことに、神は唯一であって、割礼のある者を信仰によって義とし、また、無割礼の者をも信仰のゆえに義とされるのである。(31) すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。(ローマ 3 章 28-31 節)

d. 契約

(6) あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう。(7) われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近くおられる。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。(8) また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか。(申命記 4 章 6-8 節)

この箇所が示しているように、律法の主要な目的の一つは、イスラエルが神によって聖別された民であり、神への奉仕と礼拝のために選ばれた民であることを通して、諸国民を宣教することでした。しかし、十字架の勝利、主の復活、そして聖霊の到来によっ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

て、この宣教の働きは、もはや一つの民族に限定されたものではなくなりました。それは、かつての「異邦人への光」([イザヤ 42 章 6 節](#); [49 章 6-8 節](#))という国民的・局地的な使命から、聖霊によって力を与えられ、導かれるすべての信者に委ねられた、全世界的な働きへと拡大したのです。

それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。(出エジプト 19 章 5 節)

イスラエルの大部分は、王冠を求めるあまり十字架につまずき、メシヤを拒みしました([第一ペテロ 2 章 7-8 節](#); 参照: [ルカ 20 章 17-18 節](#); [ローマ 9 章 32-33 節](#))。しかし、メシヤの到来の後、イエス・キリストの教会全体が、今や神の特別な民としての特権を享受しているのです。

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。(第一ペテロ 2 章 9 節)

ここでは旧約から新約への移行、律法の影からキリストの奥義の啓示への移行による主な結果の一つを目にします([ローマ 16 章 25 節](#); [エペソ 3 章 8 節](#), [5 章 32 節](#), [6 章 19 節](#); [コロサイ 1 章 26-27 節](#), [2 章 2 節](#); [4 章 3 節](#); [第一テモテ 3 章 16 節](#))。すなわち、異邦人が教会に受け入れられ、イスラエルに与えられた約束を共有し、全世界を宣教する使命に参加するということです([マタイ 28 章 18-20 節](#))。⁷

(3)すなわち、すでに簡単に書きおくれたように、わたしは啓示によって奥義を知らされたのである。(4)あなたがたはそれを読めば、キリストの奥義をわたしがどう理解しているかがわかる。(5)この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。(6)それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。(エペソ 3 章 3-6 節)

異邦人は、かつて旧い契約のもとでは除外されていましたが([エペソ 2 章 12 節](#))、新しい契約のもとでイスラエルと共に相続人となりました。(ただし、救いは常にすべて

⁷ [「サタンの反乱: 第 5 部: 人類の歴史における 7000 年の時代」 II.8.b.iii](#)、「キリストの奥義」を参照ください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

の人に、そして全く同じ「恵みによる信仰」を通して与えられてきたことを忘れてはなりません。)このようにして、異邦人は今やユダヤ人と共に、かつてのイスラエル王国における地域的・民族的な証しに代わって、イエス・キリストの福音を全世界的かつ個人的に証しする存在となっているのです([ローマ 15 章 8-9 節](#)など)。したがって、聖書が語る「契約」という語の意味を正しく理解することは、律法のもとでの「真理の地域的な証し」から、新約における「イエス・キリストの奥義の啓示による世界的な証し」への移行を理解する上で不可欠です。この原理を正しく把握することは、パウロがヘブル書において旧い契約と新しい契約を巧みに対比させるその議論を理解するためにも、特に重要なことなのです([ヘブル 8 章 6 節](#); [8 章 8 節](#); [8 章 13 節](#); [9 章 10 節](#); [9 章 15 節](#); [10 章 20 節](#); [12 章 24 節](#))。

しかし今は、わたしたちをつないでいたものに対して死んだので、わたしたちは律法から解放され、その結果、古い文字によってではなく、新しい霊によって仕えているのである。(ローマ 7 章 6 節)

神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺し、霊は人を生かす。(第二コリント 3 章 6 節)

聖書的な「契約(カヴェナント)」とは何でしょうか。まず第一に注目すべき点は、英語の「covenant(契約)」と「testament(遺言／誓約)」という語が、聖書の中ではまったく同じ語(ヘブル語では ベリート beriyth[בְּרִית], ギリシヤ語では ダイアテーケ diathēkē [διὰ θεῶν])を訳すために用いられているということです。したがって、聖書的な意味において「契約」と「遺言(誓約)」の間に違いはまったくありません。第二に、「契約」という語は、モーセの律法に限らず、それ以前に神が結ばれた契約にも、そしてもちろんその後結ばれた契約にも用いられています。その中でも、新しい契約は、イエス・キリストの血、すなわち主の霊的な死によって確証されたものです([マタイ 26 章 28 節](#); [マルコ 14 章 24 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [第一コリント 11 章 25 節](#))。⁸

⁸ 聖書解釈者の中には、旧約聖書に数多くの契約が存在すると主張する人が多くいますが、アダム(救い主の約束:創世記 3 章 15 節)から、ノア(神のために選択し続ける自由と機会の約束:[創世記 8 章 20-9 章 17 節](#))、アブラハム(子孫の約束:[創世記 12 章 7 節](#), [13 章 15 節](#), [17 章 19-21 節](#))、ダビデ(息子の約束:[サムエル記下 7 章 5-16 節](#))に至るまで、これらの「補足的な」契約はすべて、旧約(モーセの律法としても知られる:参照 [出エジプト 24 章 8 節](#))と同じ目的、すなわち、私たちの救い主イエス・キリストの人格と働きを予表する目的を果たしています。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の**契約**のしるしとなる。(創世記 9 章 13 節)

最も基本的な意味において、「契約」とは同意、あるいは取り決め (agreement) を指します。そして聖書の中で最も重要な「取り決め」は、神と人との間で結ばれたものです。このことから、神がご自身の誓いに偽りをなさないという事実を考えると、契約とは本質的に、神が人間に対して与えられた約束(または一連の約束)であると言えます。その中で最も重要な契約は、私たちが罪と死から救うという神の約束、すなわち、イエス・キリストの十字架によって開かれた、恵みによる信仰を通して与えられる救いの約束です。

食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる**新しい契約**である。(ルカ 22 章 20 節)

したがって、旧い契約(旧約)と新しい契約(新約)の本質は、イエス・キリストが私たちのために死なれ、私たちの救いを妨げていた罪のために霊的な死を遂げてくださったことによって、信仰を通してこの救いを受け取ろうとするすべての人に与えられる神の救いの賜物です(例:[コロサイ 2 章 13-14 節](#))。この意味において、この「契約」は私たちの理解する「遺言 (testament)」でもあります。というのも、遺言が効力を持つためには死が必要であるように、この契約もまた、イエス・キリストの死によって有効となったからです。

(15)それだから、キリストは**新しい契約**(デアテーケ diatheke)の仲保者なのである。それは、彼が**初めの契約**(デアテーケ)のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。(16)いったい、**遺言**(デアテーケ)には、遺言者(デアテーメノス diathemenos)の死の証明が必要である。(17)**遺言**(デアテーケ)は死によってのみその効力を生じ、遺言者(デアテーメノス)が活着している間は、効力がない。(ヘブル 9 章 15-16 節)

旧い契約(旧約)と新しい契約(新約)、すなわち旧約聖書と新約聖書の主な違いは、旧約が罪を明らかにし([ローマ 3 章 20 節](#), [7 章 7 節](#)[参照:[ガラテヤ 2 章 19 節](#)])、罪の問題が神ご自身の愛する御子の大きい犠牲によって解決されるその日を待ち望むものであったのに対して、新約はその救いを、いわば「前払い」ではなく、ただちに与えるものであるという点です([ローマ 3 章 23 節-36 節](#))。救いとは、神が人類と結ばれた究極の契約、すなわち私たちが救われるために必要なすべてのことを神ご自身が成し遂げてくださるという約束です。ただしそれは、私たちが信仰を通してそ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

の救いを受け入れ、その後も忠実に主に従い、信仰を「終わりまで堅く保つ」([ヘブル 3 章 6 節](#), [3 章 14 節](#), [6 章 11 節](#))ならば、現実のものとなります。

たとえば、アブラハムは「主を信じた」ので、「それが彼の義とみなされた」のです([創世記 15 章 6 節](#) [参照:[ローマ 4 章 3 節](#)])。同じように、私たちはイエス・キリストが人として来られ、私たちの罪のために死に、よみがえられたことを信じることによって義と認められ、キリストにあって義とされるのです([ローマ 3 章 24 節](#), [3 章 28 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 9 節](#), [8 章 30 節](#); [第一コリント 6 章 11 節](#); [ガラテヤ 2 章 16 節](#), [3 章 24 節](#))。救いは、十字架の前も後も本質的に同じです。すなわち、神が備えられた方法によって、罪と死から私たちを救ってくださると信頼することによって与えられるのです。違いがあるとすれば、アブラハムはまだ完全には現れていなかった救いを将来に見つめていたのに対し(参照:[第一ペテロ 1 章 10-12 節](#))、私たちは今やキリストの御顔において完全に現された救いを振り返って見ているという点です。このキリストこそが、一度限りで永遠に、私たちの罪から贖ってくださったお方なのです([ヘブル 7 章 27 節](#), [9 章 6 節](#), [9 章 28 節](#), [10 章 10 節](#))。

いかなる契約も、「神に従うことなしにその契約を自分のものにできる」という意味で無条件ではありません。一方で、神とその御子を信じ、その信仰を終わりまで忠実に保つ者に対しては、神のことは決して破られることがないという意味において、すべての契約は無条件でもあります。したがって、「契約」という概念の中には、今この世においても、また来たる永遠においても、救いと祝福が保証されているという意味が含まれています。その保証は、さまざまな形で、またそれぞれに応じた報いを伴って語られています。新しい契約は、たとえば地上の遺言における遺産の保証のように、遺言者の死によって効力を持つものとして説明されています([ヘブル 9 章 15-16 節](#)参照)。この保証は、神が御父として、御子であり私たちの主である救い主を通して、(すなわち、十字架の前であれ後であれ)その犠牲を土台として、神の子どもたちに与えられる約束なのです。

契約という概念は、古代の信仰者たちにとって非常に理解しやすいものでした。古代中東世界における一般的な契約は、二者の間で結ばれるものであり、両者がその条項を守ることを誓約するための正式な血の犠牲を必要としました。聖書における契約とは、神が人類に代わって結ばれる約束であり、神はご自身に忠実に従うすべての者を祝福することを約束しておられます。究極の契約、すなわち十字架を前に見つめた旧い契約と、十字架を後に見つめる新しい契約において、神の側の役割は二つあります。第一に、祝福を備えること(その頂点は復活と永遠のいのちです)。第二に、血の犠牲を提供すること(すなわち、御子を賜って私たちの罪を贖い、祝福を可能にしてください)です。私たちの側の役割は、神への信仰を守り続けることです。つまり、キ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

リストを受け入れ、信頼し、信じ、従い、歩み続けることです([創世記 15 章 6 節](#)参照)。したがって、神の契約とは、神に従うことを心に定めた者に与えられた、確かな希望の根拠となる正式な約束です。なぜなら、神は永遠のいのちとそれに伴う祝福を約束されただけでなく、ご自身をもってそれを必ず実現されることを誓われたからです。

(16) いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。(17) そこで、神は、[アブラハムの信仰にならって]約束のものを受け継ぐ人々に、(救いとそれに伴う祝福に関する)ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。[\(創世記 22 章 16-17 節\)](#)(18) それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がら(すなわち、御言葉と誓約)によって、前におかれている望み(すなわち、永遠の命、復活、永遠の報い)を捕えようとして[怒りが臨もうとしている]世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。(19) この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする[真の]錨であり、かつ「[天にある]幕の[至聖所]内」にはいり行かせるものである。(20) その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。(ヘブル 6 章 16-20 節)

したがって、これらの契約の成就の一部はまだ未来に属しており、そのため、神の恵みによる救いの申し出を受け入れた人々は、アブラハムの信仰と忍耐の模範になり、その成就を忍耐強く待ちながら神を信頼し続ける必要があります。しかしながら、その成就是、神の約束を受け入れ、信仰のうちに歩み続けるすべての人にとって、絶対に確実なものです。古い契約も新しい契約も、いずれも血によって確証されました。古い契約は動物の血による影のかたちとして、新しい契約は主イエス・キリストの十字架上の死によって確証されました。キリストの死の現実(私たちのために、私たちの身代わりとして死なれたこと)は、「キリストの血」という表現によって象徴されています([ヘブル 9 章 16-22 節](#))。⁹ 神は約束を与え、その約束を正式に定め、それを成就するために最も重い代価——すなわち、御自分の愛するひとり子の犠牲——を払われました。私たちは、イエスを信頼し、忠実に従い続けるならば、この無条件で栄光に満ちた恵みの行為の恩恵を受けるのです。それは、たとえば現代の信者が、「これは多くの人

⁹ キリストは出血過多で死なれたのではないことを理解することが重要です。そうではなく、救いが成し遂げられた後に、その人間としての霊を息とともに差し出されたのです([ヨハネ 19 章 30-37 節](#); 参照 [マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 37 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#))。「キリストの血」とは、聖霊によって聖別され用いられている比喻であり、私たちのすべての罪のために主が裁きを受けられたという大いなる犠牲を、非常に生々しく表すものです。[BB 4A『キリスト論』第 II.4.「キリストの血」](#)を参照のこと。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

の罪の赦しのために流される、わたしの契約の血である」(マタイ 26 章 28 節 [NKJV])と宣言される、キリストの血による救いの完成を記念する聖餐式にあずかるときであっても、あるいは過去の信者たちが([出エジプト記 12 章 1-12 節](#); [創世記 31 章 51-54 節](#)参照)、将来の救いの現実を象徴する「契約の食事」にあずかったときであっても、その参加は、「主が来られるまで、主の死を告げ知らせる」([第一コリント 11 章 26 節](#))行為なのです。それは、私たちの信仰と忠実さを継続的に誓うしるしでもあります。このようにして、旧い「影としての契約」([エゼキエル 16 章 60 節](#)「若き日の契約」参照)も、記念としての「新しい契約」(同「永遠の契約」参照)も、いずれも私たちがキリスト・イエスにある神の働きを通して、信仰を持ち続けることにより、その相続人であり、またその恵みにあずかる者である救いを宣言しているのです。

(11)しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、(12)かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。(13)もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、(14)永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうであろうか。(15)それだから、キリストは新しい契約の仲保者なのである。それは、彼が初めの契約のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。(ヘブル 9 章 11-15 節; 参照. [ヘブル 12 章 24 節](#))

前にも述べたように、「契約」または「遺言」を意味するヘブライ語の語は ベリート (beriyth／בְּרִית) であり、しばしば「条約」「同盟」「協定」といった意味合いを持ちます。しかし、聖書における旧い契約と新しい契約は、国家や個人同士の条約のように対等な立場の二者によって結ばれるものではなく、神ご自身が主導して、人間のために結ばれるものです。そのため、翻訳者たちは古来、これらの神的契約を、人間同士の取り決めとは区別して表現する必要を感じてきました。けれども、ベリートという言葉の主要な意味のひとつは、まさに神がご自身を縛って、語られたすべての約束を必ず成就されることを選ばれたという点にあります。それは神のためではなく、私たち人間の益のためです。つまり、神が一度語られたことは真実であり、必ず成し遂げられるのです。しかし、神はさらに、私たちが励ましを受け、信仰を保ち続けられるように、私たちが到底ふさわしくもなく、求めることもできないほどの確証を与えてくださいました。それが、ご自身のことばを正式な「契約」というかたちで確定し、保証してくださったという事実です。しかも、神の完全な誠実さのゆえに、これらの契約は決して破られることはありません([ヘブル 6 章 16-20 節](#))。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

したがって、契約(covenant／testament／beriyth)とは、何よりもまず神からの約束です。このため、新約聖書の中で「契約(beriyth)」という言葉が、神が私たちに与えてくださった約束の概念と密接に結びついているのです([ガラテヤ 3 章 17 節](#); [エペソ 2 章 12 節](#))。したがって、契約(beriyth)の本質を理解する最良の方法は、それを神が人類に与えられた究極の約束として捉えることです。旧い契約——すなわち、アダムとエバ、ノア、アブラハムなどに与えられた一連の約束([使徒行伝 13 章 23 節](#), [13 章 32-33 節](#), [26 章 6 節](#); [ローマ 4 章 13 節](#), [9 章 4 節](#); [ガラテヤ 3 章 16 節](#), [3 章 29 節](#), [4 章 28 節](#); [エペソ 3 章 6 節](#); [第二テモテ 1 章 1 節](#); [ヘブル 4 章 1 節](#), [6 章 12 節](#), [9 章 15 節](#), [10 章 36 節](#), [11 章 38-39 節](#); [第一ヨハネ 2 章 25 節](#)参照)——は、何よりもまず救いの約束(およびそれに伴うすべての祝福)でした。そして新しい契約とは、キリストの受肉・犠牲・復活によって、この究極の約束が成就されたものです([マタイ 26 章 28 節](#); [マルコ 14 章 24 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [第一コリント 11 章 25 節](#))。したがって、[創世記 3 章 15 節](#)における約束の子孫(Seed)、および[創世記 12 章 7 節](#)でアブラハムに約束された子孫(Seed)は、すべてイエス・キリストにおいて成就されたのです([ガラテヤ 3 章 16-29 節](#))。このように、旧い契約は影を通して新しい契約を見つめるものであり、新しい契約はキリストという実体、すなわち神のすべての救いと永遠のいのちの約束が完全に実現されたものです([第一コリント 11 章 25 節](#); [第二コリント 1 章 19-20 節](#); [3 章 6 節](#); [ヘブル 9 章 15 節](#))。

わたしたちは、神が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのである。神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。(使徒行伝 13 章 32-33 節前半)

わたしは言う、キリストは神の真実を明らかにするために、割礼のある者の僕となられた。それは父祖たちの受けた約束(すなわち、契約)を保証すると共に、(イエスを通して救いを与えられて)異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるためである、(ローマ 15 章 8 節-9 節前半)

神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字(すなわち律法)に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字(すなわち律法)は人を殺し、霊は人を生かす[永遠の命へと導く]。(第二コリント 3 章 6 節; 参照. [ローマ 2 章 29 節](#), [8 章 10 節](#); [ガラテヤ 4 章 29 節](#))

人間の側から見れば、希望こそが、契約というかたちで厳粛に定められた神の約束の中心的な意味です。神が、私たちの救いを備えることを約束し、誓い、ご自身に義務づけられた(旧い契約の視点)ということ、そしてキリストがご自身の血によって旧約のすべての約束を成し遂げ、完全に確証された(新しい契約の視点)ということは、まこ

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

とに言葉では言い尽くせないほどの励ましであり、まさに「良き知らせ(福音)」そのものです。この真理は、私たちに「いつの日か必ず主とともにいる」という希望を強め、その希望に力を与え、いわば信仰によって与えられた天の故郷に、魂のいかり(錨)を下ろすかのように、私たちをしっかりと結びつけてくれるのです([ヘブル 6 章 19 節](#))。

古い契約は、約束されたメシヤの到来、すなわちその働きを通して全人類があがなわれることを見つめていました([ローマ 11 章 27 節](#))。そして、イエス・キリストの到来と十字架での御業がすでに成就した今、神がすべての人類と結ばれた新しい契約には、罪の赦しだけでなく、数えきれないほどの祝福が含まれています。その中でも特に重要なのが、聖霊の賜物です(([ヨハネ 7 章 39 節](#); 参照. [イザヤ 59 章 21 節](#))). キリストがすでに復活し、天に昇り、父の右に座しておられる今、私たちはキリストを信じる者として、聖霊の賜物を受け、また霊的な賜物も受けているのです。これらは古い契約の視点から見ればまだ成就していなかった約束でしたが、キリストの受肉が現実となったように、新しい契約においてはすでに実現している現実です([イザヤ 44 章 3 節](#); [ヨエル 2 章 28 節](#)と[使徒行伝 2 章 14-21 節](#); [ローマ 12 章 5-8 節](#); [第一コリント 12 章 1-11 節](#); [エペソ 4 章 7-13 節](#)を比較参照)。

したがって、イエス・キリストこそが、二つの契約が象徴する歴史の二つの段階をつなぐ鍵です。彼はただひとりの預言者([申命記 18 章 17-19 節](#))、永遠の大祭司([詩篇 110 章 4 節](#))、そして約束された王([イザヤ 9 章 6-7 節](#))です。彼は旧約聖書におけるすべての約束の成就者であり([ローマ 15 章 8 節](#); 参照. [使徒行伝 3 章 24-26 節](#))、古い契約そのものの成就者でもあり([第二コリント 3 章 14 節](#); [ヘブル 7 章 22 節](#))、さらに律法の完成者でもあります([ローマ 10 章 4 節](#); [ヘブル 7 章 12 節](#))。キリストは私たちを古い契約の束縛から解放し、新しい契約の自由へと導いてくださった方です([ガラテヤ 4 章 24 節](#)以下)。また主こそが、かつての契約よりも優れた契約、すなわちよりすぐれた約束の上に築かれた契約を、私たちのために仲介してくださった方なのです([エレミヤ 31 章 31-34 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#), [12 章 24 節](#); 参照. [エペソ 2 章 12 節](#); [ヘブル 9 章 15-16 節](#))。

モーセの律法は、旧約聖書における他の約束や契約を置き換えたり、無効にしたりしたものではありません([ガラテヤ 3 章 17 節](#)参照)。むしろ、それらすべてをひとつの壮大な救いの約束の中に要約したものと言えます——正しく理解し、解釈するならば。古い契約の律法そのものには、人を救う力はありませんでした。しかしそれは、私たちが救うことのできるお方の到来を指し示していたのです。エルサレムの教会、そしてその後の多くのユダヤ人や異邦人たちの失敗は、この最も重要な真理を見過ごし、律法が本来導くべき信仰によってではなく、律法の行いによって救いを得ようとしたことにあります。それは神が意図されたことではなく、本質的に不可能であり、冒瀆的な

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

d. 契約

誤りです。このような道を歩む者は、神のご計画の隅の石であるイエス・キリストにつまずき([イザヤ 8 章 14 節](#); [ローマ 9 章 33 節](#); [第一ペテロ 2 章 8 節](#)参照)、その結果として、永遠のいのちではなく、罪と死の奴隷となるのです。

(21)律法の下にとどまっていたと思う人たちよ。わたしに答えなさい。あなたがたは律法の言うところを聞かないのか。(22)そのしるすところによると、アブラハムにふたりの子があったが、ひとりには女奴隷から、ひとりには自由の女から生れた。(23)女奴隷の子は肉によって生れたのであり、自由の女の子は約束によって生れたのであった。(24)さて、この物語は比喩としてみられる。すなわち、この女たちは二つの契約をさす。そのひとりにはシナイ山から出て、奴隷となる者を産む。ハガルがそれである。(25)ハガルといえば、アラビアではシナイ山のことで、今のエルサレムに当る。なぜなら、それは子たちと共に、奴隷となっているからである。(26)しかし、上なるエルサレムは、自由の女であって、わたしたちの母をさす。(27)すなわち、こう書いてある、

「喜べ、不妊の女よ。声をあげて喜べ、産みの苦しみを知らない女よ。ひとり者となっている女は多くの子を産み、その数は、夫ある女の子らよりも多い」。

(28)兄弟たちよ。あなたがたは、イサクのように、約束の子である。(29)しかし、その当時、肉によって生れた者が、霊によって生れた者を迫害したように、今でも同様である。(30)しかし、聖書はなんと言っているか。「女奴隷とその子とを追いつけ。女奴隷の子は、自由の女の子と共に相続をしてはならない」とある。(31)だから、兄弟たちよ。わたしたちは女奴隷の子ではなく、自由の女の子なのである。(ガラテヤ 4 章 21-31 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

e. ディスペンセーション

「(12)バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている(すなわち、新しい時代への転換を前にしたサタンの攻撃の激化を意味します)。(13)すべての預言者と律法とが預言したのは、**[洗礼者]ヨハネの時まで**である(すなわち、これ以降は「現れたイエス・キリスト」こそが、やがて到来する御霊の時代における中心的な焦点となることを暗示しています)。」([マタイ 11 章 12-13 節](#); 参照 [マルコ 1 章 15 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#))

律法と預言者とは、**ヨハネの時まで**である。それ以来、神の国が宣べ伝えられており(「福音として告げられている」、文字通りには「良い知らせとして差し出されている」)(ルカ 16 章 16 節)

(4)しかし、**時の満ちるに及んで**、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。(5)それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。(6)このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。(ガラテヤ 4 章 4-6 節)

(7) 私たちは、この御子にあって、その血による贖い、罪の赦しを受けている。それは、神の豊かな恵みによるのである。(8) この恵みを神はあらゆる知恵と理解力をもって私たちにあふれさせ、(9) 御心の**奥義**を御旨に従って、キリストにあって私たちに知らせてくださった。(10) それは、**時が満ちるに至るディスペンセーション**において、天にあるものも地にあるものも一つに集めるためであった。(NKJV 訳 エペソ 1 章 7-10 節)

(4)神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。(5)神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。(6)彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、**定められた時**になされたあかしにほかならない。(第一テモテ 2 章 4-6 節)

ただ一度きり、時代と時代の接合期においてキリストは御自身を犠牲として罪を取り除くために現れた。(イクシス訳 ヘブル 9 章 26 節後半)

これまで何度も述べてきたように、イエス・キリストの誕生、生涯、犠牲、そして復活は、人類史における大いなる分岐点をなしています。十字架は、それ以前にあったす

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

すべてのことと、それ以後に起こるすべてのことを隔てる境界線です¹⁰。十字架以前の時代においては、救いは言わば「前貸し(on credit)」として与えられていました([ローマ 3 章 25-26 節](#))。すなわち、イエスがまだ肉体をもって来られず、私たちの罪のために死なれていなかったため、過去の信仰者たちは死後、地下の楽園(パラダイス)へ行ったのです。しかし、十字架の出来事が現実のものとなり、キリストが復活し、昇天し、父なる神の右に座し、栄光を受けられたその後になって初めて、眠りについた信者たちは第三の天において神の御前に立つことができるようになりました。そして、主の偉大な勝利の後になって初めて、聖霊の賜物が与えられたのです([ヨハネ 7 章 39 節](#))。このようにして、十字架以後になって初めて、教会時代(Church Age)が始まりました。それは、聖霊の力によって拡大していくキリストの集い(エクレーシア)の時代であり、イエス・キリストの死と復活による救いという福音によって人々が導かれていく時代です。これらの劇的な出来事——人類史において最も重要な出来事——は、神が築かれたすべての歴史の土台となる岩(すなわち「岩なるキリスト」)であり、それによって多くの変化がもたらされました。そのうちの最も重要なものの一つが、パウロがヘブル人への手紙で語る「律法の変更」([ヘブル 7 章 12 節](#))です。これは、神のご計画における「時代の変化(ディスペンセーション)」、すなわち神の経綸の完全な転換を意味しています。それは、起こるまでは隠されていた神の奥義(ミステリオン)であり、モーセの律法のもとにあるイスラエルを中心とした神のご計画から、聖霊の力によって全世界に広がる教会(キリストの集い)へと焦点を移すものでした。こうして、「すべてのもの」が、勝利者であり神のご計画全体の基盤であるメシヤ、すなわち私たちの主であり救い主であるイエス・キリストにあって一つとされることになったのです。

(8) 神は…あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり、(9) 御旨の奥義を、自らあらかじめ[キリストにあって]定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。(10) それは、時の満ちる<成就>(直訳「分配・管理」オイコノミア oikonomia) (すなわち、教会が完成する教会時代)に及んで**実現される**ご計画(すなわち、教会が完成する教会時代)にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。(エペソ 1 章 8 節後半-10 節前半)

ディスペンセーション(dispensation)とは何でしょうか。この語は、いわゆる福音主義の世界において、かなり独特で「カラフルな」歴史を歩んできた言葉です。その主な理

¹⁰ 私の親しい友人リン・マレーLynn Murray が、ずっと以前にこの点を最初に指摘してくれたことに深く感謝します。読者の方には、この節を読み進める前に、ぜひ以下をお読みいただくことを強くお勧めします。SR 5『人類史における七つの千年期』第 II.5 節「人類史における五つのディスペンセーションの区分」および BB 6B『教会論』第 I.B.5.a 節「聖霊のディスペンセーション」。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

由は、有名な『スコフィールド注解付き聖書 (Scofield Reference Bible)』における重要な位置づけと、そこから発展した解釈学派——すなわち「ディスペンセーションナリズム (dispensationalism)」——の影響によるものです。

この学派は今日に至るまで、多くの福音派神学に強い影響力を保持しています。まず最初に明確にしておくべきことは、聖書における「ディスペンセーション (経綸・時代区分)」は、この神学的学派およびその派生形で用いられている体系的な概念と、厳密には同一ではないという点です。新約聖書において「ディスペンセーション (dispensing)」に関係するギリシヤ語は、英語の economy (経済) や economic (経済的) という語の語源となっている言葉群であり、その語源的・本来の意味はギリシヤ語の「家 (オイコス oikos)」に由来します。ギリシヤ語で oikonomos (オイコノモス) とは、「家の管理者 (スチュワード)」あるいは「家令 (ハウスホールド・マネージャー)」のことであり、家全体とその中にいる人々の世話を任せられ、必要な物資——とくに食糧——を分配・供給する責任を負う者を指します。したがって、聖書的に言う「ディスペンセーション」とは、神がご自身の「家」(すなわち被造世界とその中に生きる人々)を管理し、特定の時代ごとに異なる方法で恵みと真理を分配 (ディスペンス dispense) される、神の経綸 (divine administration) を意味しているのです。

(42) そこで主が言われた、「主人が、召使たちの上に立てて、時に応じて定め
の食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令 (直訳「配給者」：オイコノモス
oikonomos から) は、いったいだれであろう。(43) 主人が帰ってきたとき、そのよ
うにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。(44) よく言うておくが、主
人はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう。(ルカ 12 章 42-44
節)

私たちの主が、上の箇所が続く節々で、不当あるいは怠惰な家令、すなわち主人の家を忠実に管理しない者を非難しているのと同様に ([ルカ 12 章 45-48 節](#))、上の箇所では、家の他の成員のために「適切な時に」食物を与えることによって忠実に仕える家令をほめているのを見ます。ここで主が語っているのは、聖書の読者が皆知っているように、文字通りの食べ物のことではなく、神の御言葉の真理の教えのことです。良い牧者・教師は、自分に委ねられた人々がその霊的糧によって成長し続けることができるよう、時を得て、適切な時にその糧を与えることを怠ることはありません。このイメージ——すなわち、真理を託された者たちが、与えられた奉仕の場において、熱心にそれを分かち与える——という姿こそが、聖書的な「ディスペンセーション (経綸)」の本質なのです。つまり、聖書の中で「ディスペンセーション」という概念が実際に扱われている箇所では (神学的議論上の抽象的区分とは異なり)、それは常に霊的食物 (spiritual food) の分配、すなわち神の真理を与える務めに関係しているのです。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を**養いなさい**。(ヨハネ 21 章 17 節)

ペテロが決して口にしなかった問い——それこそ、ここで私たちが答えなければならぬ問いです。すなわち、「主よ、どのように (How, Lord?) ?」という問いです。神の視点から見たとき、歴史の時代ごとの主要な違いは、与えられるべき真理そのものの違いにあるわけではありません。というのも、真理は、エデンから新しいエルサレムに至るまで、創世記から黙示録に至るまで、常に同じ真理だからです。むしろその違いは、その真理がどのような方法で伝達されるか、すなわち「**どのように**供されるか」という点にあるのです。このことこそ、まさにパウロがエルサレム教会に宛てた手紙(ヘブル書)を始める際の出発点でした。彼は、もはや効力を失った律法という「古びた食物」から彼らを離れさせ、今や復活し、啓示されたイエス・キリストにおける御霊の真理という「堅い食物」へと導こうとしたのです([ヘブル 1 章 1-2 節](#); 参照. [第一コリント 3 章 2 節](#); [ヘブル 5 章 12-14 節](#))。

(1) 神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2) **[しかし今]**、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 1-2 節)

モーセの律法とその定めは、その本質において、神の真理を伝達する手段でした。そして、その真理が「分配された (dispensed)」方法はきわめて独特でした。それは、単に書き記された御言葉として与えられただけでなく、さまざまな儀式・規定・いけにえ・祭りを通して、その内に含まれる真理を、視覚的かつ体感的に表現するものでもあったのです。このような方法は、当時の世界がまだ文字を読むことのできない人々を多く抱えていた(前識字社会であった)という事実を考えると、神の知恵に満ちた配慮であったと言えます。さらに、律法に含まれている多くの真理は、「影(シャドウ)」の中に覆われたままであり、まだ完全には明らかにされていない奥義(ミステリー)でした。それは、律法の目的が、やがて肉体をもって現れ、いけにえとしての御業を成し遂げられる救い主への信仰へと人々を導くことにあったため、その時が来るまでは、必然的に隠されたものでなければならなかったのです。

律法が主の御生涯と犠牲によって成就される以前は、それは神の真理を御自身の民に伝える正当な手段であり、すなわち、救い・霊的成長・前進・実りに必要なすべて

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

を「分配 (dispense)」するための手段でした。しかし、いったんそれが成就された後は、この分配の方法が永遠に続けられることは、神の御計画にはありませんでした。すなわち——律法がその影として示していた方、すなわちキリストが、肉において来られ、それを成就された後には、もはやその必要はなくなったのです。すなわち、御霊 (聖霊) がすべての信者に与えられ、私たちが真理のうちに照らすために来られた後には、もはや律法を介する必要はなくなったのです。すなわち、新約聖書が完成し (ヘブル書の時点では完成間近でした)、そこに啓示の全体が明らかにされた後には、もはや古い体制にとどまる理由はありません。すなわち、律法によって定められた神殿に宿っていた神の栄光が離れ、今やキリストの教会という神殿、すなわち世界中の信者のうちに住まわれる聖霊なる神のうちに留まるようになった後には ([第一コリント 3 章 16-17 節](#); [第二コリント 6 章 16 節](#); [エペソ 2 章 21 節](#); [第一ペテロ 2 章 5 節](#))、旧い神殿の意義は終わったのです。すなわち、律法のもとで真理を教える務めを担っていたレビ系祭司職が、今やすべての信者——あらゆる部族のユダヤ人と異邦人——に置き換えられた後には ([第一ペテロ 2 章 5 節](#), [2 章 9 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#))、その旧い職務はもはや存在しません。すなわち、イエス・キリストの初臨・犠牲・復活、そして御霊の働きと新約聖書の靈感と完成によって、これまで隠されていた奥義 (ミステリーオン) がすべて完全に明らかにされ、十分に説明された今となつては、律法という旧い分配の体系に戻ることは、神の御心ではないのです。

(1)このようなわけだから、人はわたしたちを、キリストに仕える者、神の**奥義を管理している者** (原語は「ディスペンサー」、オイコノモス oikonomos から) と見るがよい。(2)この場合、**管理者に要求されているのは、忠実である** (すなわち、信頼に値する) ことである。(第一コリント 4 章 1-2 節)

(1)こういうわけで (すなわち、教会を聖なる神殿として築き上げるため: 参照. [エペソ 2 章 14-22 節](#))、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ——(2)わたしがあなたがたのために神から賜った恵みの務 < NKJV 訳では **ディスペンセーション** > について、あなたがたは (すなわち、異邦人にキリストの名を伝えるという使徒としての使命について: [使徒行伝 9 章 15 節](#)) たしかに聞いたであろう。(3)すなわち、すでに簡単に書きおくれたように、わたしは啓示によって**奥義** (異邦人を召されたこと) を知らされたのである。(4)あなたがたはそれを読めば、キリストの**奥義**をわたしがどう理解しているかがわかる。(5)この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。(6)それ[この奥義]は、異邦人が、福音 (彼の勝利の宣教) によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。(7)わたしは、神の力がわた

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

しに働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである。(8)すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、(9)更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた**奥義**にあずかる務がどんなものであるか(文字通り「その摂理」が福音の真理によって成就されていること)を、明らかに示すためである。(10)それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、(11)わたしたちの主キリスト・イエス[というお方]にあって実現された神の永遠の目的(すなわち、歴史)にそうものである。(エペソ 3 章 1-11 節)

(25)わたしは、神の言を**告げひろめる**務を、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっているのである。(26)その言の**奥義**は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。(27)神は彼らに、異邦人の受くべきこの**奥義**が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、(救われた異邦人、ユダヤ人、そしてイエス・キリストが内住するすべての)あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。(コロサイ 1 章 25-27 節)

作り話やはてしのない系図などに気をとられることもないように、命じなさい。そのようなことは信仰による神の**務**＜真理の**配分**(デスペンシング)＞を果すものではなく、むしろ論議を引き起させるだけのものである。(第一テモテ 1 章 4 節)

監督たる者(すなわち、牧師・教師・長老)は、**神に仕える者**(文字通り「分配者」、オイコノモス oikonomos から)として、責められる点がなく…(テトス 1 章 7 節前半)

あなたがたは、それぞれ[特定の霊的な]賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人(原文「分配者」、オイコノモス oikonomos)として、それをお互のために役立てるべきである。(第一ペテロ 4 章 10 節)

神のご計画(前掲[エペソ 3 章 11 節](#))では、私たちの主の復活と、それに続く聖霊の賜物の後に、異邦人が前例のない数でキリストの集會に流れ込むことが、常に予定されていました。しかし、その事実が起こる以前には、この真理は大いなる奥義でした(前掲の最初の箇所にある[エペソ 3 章 9 節](#)参照。比較：[ローマ 11 章 25-27 節](#)；[コロサイ 1 章 26-27 節](#)；[エペソ 3 章 1-11 節](#)，[5 章 25-32 節](#))。すなわち、この真理は十字架の後までは啓示されず、この出来事も始まらなかったのです。私たちの現在の学びに関して言えば、パウロは上記で、この教会の大いなる拡大における自らの役割につい

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

で、「ディスペンセーション」という概念を二度用いて言及しています(前掲の最初の箇所にある[エペソ 3 章 2 節](#)と[3 章 9 節](#))。この比喻において、パウロは家令(管理者)であり、エペソの信者たちは彼が仕える家の者たちです。パウロは、彼らがまず信者となり、その後、生き残り、成長し、繁栄し、そしてキリストに仕えるために必要な霊的糧——すなわち真理——を分配し、供給(ディスペンス)しているのです。

このように、聖書におけるディスペンセーション(神の時代区分・経綸-けいりん)の概念とは、要するに神の「供給の仕組み」を指しています。ここで言われるのは、私たちがこの世で生き続け、イエス・キリストに仕えるために不可欠な物質的糧の供給ではありません(それも確かに必要ですが)。神は私たちの物質的な必要をさまざまな方法で満たされます。ごく日常的には、私たちに仕事を与えて食卓にパンを置かれることを通して、また奇跡的には、イスラエルの子らに天からのマナを与えられたこと、エリヤをカラスに養わせたこと、あるいは主ご自身がパンと魚を五千人や四千人に増やされたことなどによってです。しかし、聖書が語る「ディスペンセーション」とは、神が私たちに**霊的**な糧を備えられる手段を指しており、その手段は人類史のさまざまな時代において異なってきました。エデンの園では、主は直接アダムとエバに語られました(例：[創世記 3 章 8-10 節](#))。また、アブラハムのような信仰者の家族の族長や預言者にも直接語られました(例：[創世記 12 章 1-3 節](#))。イスラエルにおいては特別なケースがあり、多くの預言者が立てられただけでなく、その民に主とその真理を教えるための律法全体が与えられ、様々な儀式・規定・祭りを通じて教育されました(例：[詩篇 147 篇 19-20 節](#))。またしばしば預言を通じて、そしてモーセから始まる神の書き記された言葉(例：[出エジプト記 34 章 1 節](#))を用いて教えられ、それが時を経て旧約聖書全体へと展開していきました。しかし、このように多角的で多様な方法を用いて信者に必要な真理を供給・分配してきた仕組みは、「神の言葉そのものであられる方」の到来によって劇的に変革されたのです。

(1)神は、**むかしは**、預言者たちにより、**いろいろな時に、いろいろな方法で**、先祖たちに語られたが、(2) **[しかし今、]**この終りの時には、**御子**によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 1-2 節)

イエス・キリストは、神の計画全体が据えられているその岩です([出エジプト記 17 章 6 節](#); [民数記 20 章 8 節](#); [申命記 32 章 4-37 節](#); [サムエル記上 2 章 2 節](#); [サムエル記下 23 章 3 節](#); [詩篇 18 章 2 節](#), [18 章 46 節](#), [19 章 14 節](#), [118 章 22 節](#), [144 章 1 節](#); [イザヤ書 8 章 13-15 節](#), [17 章 10 節](#), [28 章 16 節](#), [44 章 8 節](#), [51 章 1 節](#); [ダニエル書 2 章 44-45 節前半](#); [ハバクク書 1 章 12 節](#); [マタイ 16 章 18 節](#); [ローマ 9 章 33 節](#); [第一コリント 3 章 11 節](#), [10 章 4 節](#); [第一ペテロ 2 章 4 節](#); [マタイ 7 章 24-27 節](#);

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

[ルカ 6 章 47-49 節](#))。彼こそがその計画であり、ロゴス、すなわち神の言葉そのものです([ヨハネ 1 章 1-5 節](#); [コロサイ 1 章 25 節](#); [テトス 1 章 3 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-3 節](#))。彼の生涯、そして特に十字架における勝利と復活は、人類史を分ける分岐点であり、それは父なる神によって定められたことです([ヘブル 9 章 26 節](#)後半; [マルコ 1 章 15 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#); [ガラテヤ 4 章 4 節](#); [エペソ 1 章 10 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#))、その後教会時代における聖霊のディスペンセーションが続き、彼が再臨されて世界を統べ治められる時まで続くのです。

すべての預言者たちと律法が預言したのは、**ヨハネ**[バプテスマのヨハネ]の時まででした。(マタイ 11 章 13 節)

ヨハネのメシヤに備えるための宣教([マタイ 3 章 3 節](#), [11 章 10 節](#), [マルコ 1 章 2-3 節](#), [ルカ 1 章 76 節](#), [3 章 4 節](#), [7 章 27 節](#))は、神がイエス・キリストにおけるご自身の計画についての真理を「多くの時に、多くの方法で」([ヘブル 1 章 1 節](#))授けられた、これまでのすべての手段と方法の頂点でした。これは、上の聖句で主ご自身が「預言者と律法」という言葉で総括されたものです。御父の御子がおいでになり、律法のすべてとそのすべての預言を成就され、十字架において神の計画を成し遂げられた後には、すべてが新しくなります([マタイ 26 章 28 節](#); [マルコ 14 章 24 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [第一コリント 11 章 25 節](#); [第二コリント 5 章 7 節](#); [ガラテヤ 6 章 15 節](#); [黙示録 21 章 5 節](#))。そして、古いものはすべて成就されたがゆえに取り替えられます([マタイ 5 章 17 節](#); [ヘブル 7 章 12 節](#); [8 章 13 節](#))。このことは、メシヤを待ち望んで行われたヨハネの象徴的で儀式的な水のバプテスマが、私たちの勝利者であり救い主であるイエス・キリストが授けてくださった、聖霊のバプテスマという力強い現実によって置き換えられたことに、はっきりと示されています。

わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。(マタイ 3 章 11 節)

わたしは水でバプテスマを授けたが、このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」。(マルコ 1 章 8 節)

そこでヨハネはみんなの者にむかって言った、「わたしは水でおまえたちにバプテスマを授けるが、わたしよりも力のあるかたが、おいでになる。わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。(ルカ 3 章 16 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

イエス・キリストという「奥義」の啓示、旧約におけるすべての影の成就、そしてすべての信者の内に宿る聖霊の賜物 — この三つが結び合わさることによって、私たちはかつてないほどの力を与えられ、真理を学び、それを実際に生きることが可能となりました。これこそが、教会時代を他のいかなる時代とも異なる「特別なディスペンセーション（神の経綸の区分）」としている理由です。教会時代は特別な期間であり、神が真理を供給される方法が、これまでとは全く異なる独自のかたちをとっています。聖霊の到来と、その働きを通じて聖書が完成したことにより、私たちはキリストにふさわしい生涯を歩むために必要な本質的糧を、また主が私たちを召された戦いを戦うために必要な「弾薬」を、かつての信者たちが夢見ることしかできなかったほどの量と質において、神から供給されているのです。今や、書かれた御言葉は全体として完成し、すべての人に開かれています。新約は、過去にはかすかに影としてしか示されなかった主とその教会に関する奥義を、鮮明に明らかにしています。さらに、聖霊の個人的な働きと、聖霊によって力づけられた教師たちの奉仕を通して、私たちは「神の全計画 (the whole counsel of God)」をかつてないほどに学び、実践できるようになりました ([使徒行伝 20 章 27 節](#))。その結果、私たちの人生を数えきれないほどの驚くべき方法でキリストのために用い、同時に素晴らしい永遠の報いを得ることができるのです。

(1) ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。(2) わたしは、ただこの一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。(3) あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか。(ガラテヤ 3 章 1-3 節)

今日においてもなお、あまりにも多くの信者たちが、私たちの今の時代を特別なものとしている御霊の賜物を用いないばかりか、むしろ「肉のわざ」と呼ばれる何らかのものに逆戻りしてしまっています。まさにこれは、パウロがヘブル人への手紙を書いた当時のエルサレム教会の状況そのものでした。御霊が最初に与えられたのはまさにエルサレムにおいてです ([使徒行伝 1 章 4-5 節](#); [2 章 1-6 節](#))。またそこで数々の驚くべき御霊の力のあらわれが目撃されたのです (例: [使徒行伝 3 章 1 節](#) [エペソ 3 章 9 節](#)~, [5 章 1 節](#)~, [5 章 12-16 節](#), [12 章 7-17 節](#), [12 章 21-23 節](#))。それにもかかわらず、上記で触れたガラテヤの信徒たちの場合と同じく、エルサレムの信徒たちは自分たちが見て体験した恵みを忘れてしまい、すでに廃れた律法の儀式や行いへと逆戻りしていたのです。こうして彼らは、新しいもののために古いものを捨てるどころか、古いものを抱きしめることによって、聖霊の力を自らの人生の中で消し去ってしまっていたのです。 ([第一テサロニケ 5 章 19 節](#); 参照. [エペソ 4 章 30 節](#))。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

確かに、パウロがこの手紙を書いた時点では、イスラエルの時代から教会の時代への移行期は、すでにほぼ完了しつつありました¹¹。その結果、正典が完成に近づき、使徒たちの時代も終わりつつあったため、あからさまな奇跡のしるしは少なくなっていました。しかし本来ならば、主が働かれ、十字架にかけられ、復活され、そして御霊が最初に与えられたあの町の信者たちの心の中でも、同じように移行が完了しているべきでした。ところが彼らは、以前のディスペンセーションのやり方へと逆戻りしていました。そのような行動によって、エルサレムの信者たちは、本来ならば彼らを前例のない霊的成長へと助け導くはずであった、聖霊の大きな力を無効にしていました。むしろ、彼らはすでに得ていた以前の前進から後退し、まだ到来していない救い主を示す古いやり方に加わることによって、事実上、イエス・キリストを否定することになっていたのです。彼らの伝統への奴隷状態は、霊的成長を無にし、霊的な後退を引き起こしただけでなく、御霊の賜物とそのディスペンセーションを可能とされた、あの方——救い主の到来と勝利を成し遂げられた方——に対する重大な侮辱でもありました。

律法と預言者とはヨハネの時までのものである。それ以来、神の国が宣べ伝えられ、人々は皆これに突入している。(ルカ 16 章 16 節)

かつて教会の戦う姿(“Church militant”)を導く立場を告白していたその教会は、今や、後ろ向きに古いものへと目を向け、新しいものの良い知らせを受け入れようとしなかったことで、教会の拡大を妨げる存在となっていました。これは、まさに逆のことを望まれていた方——神の真理の新しいディスペンセーションを御霊によって可能にされた、勝利を成し遂げられたあの方(ヨハネ 7 章 39 節)、そしてその方こそが真理そのもの——が望まれたこととは正反対のものでした。

(17)律法はモーセをとおして与えられ、めぐみとまこととは、イエス・キリストをとおしてきたのである。(18)神を見た者はまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 17-18 節)

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

¹¹ [「BB 6B: 教会論\(Ecclesiology\)」の I.B.5.「移行期と現状との対比」](#)を参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

e. ディスペンセーション

(1)神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから——わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた者たちの信仰を強め、また、信心にかなう真理の知識を彼らに得させるためであり、(2)偽りのない神が永遠の昔に約束された永遠のいのちの望みに基くのである。(3)神は、定められた時に及んで、御言を宣教によって明らかにされたが、わたしは、わたしたちの救主なる神の任命によって、この宣教をゆだねられたのである——(テトス 1 章 1-3 節)

イエス・キリストは、いつの時代にも神のご計画そのものであり、みことばであり、ロゴスです。それは、「時が始まる前から」(上の 2 節)真実であったことです。しかし、私たちの救い主が来られ、十字架での勝利を成し遂げられ、復活と栄化を受けられ、そしてその結果として私たちに与えることを許された御霊の賜物がもたらされたことによって、「すべてのものが新しくなった」のです([黙示録 21 章 5 節](#); [マタイ 26 章 28 節](#); [マルコ 14 章 24 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [第一コリント 11 章 25 節](#); [第二コリント 5 章 7 節](#); [ガラテヤ 6 章 15 節](#))。その御霊における新しさを活かさなかったことは、重大な機会の喪失でした。そして、すでに置き換えられた古いものへと戻ることは、エルサレム教会を根本から損なう妥協となり、キリストの教会における新しいディスペンセーションの「時を見分ける」ことに失敗することであり、以前の世代がメシヤを認識することに失敗したことと通じるものでした。

(41)いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、(42)「もしおまえも、この日に、平和をもたらず道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。(43)いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、(44)おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」。(ルカ 19 章 41-44 節)

この預言は、エルサレムの信者たちがこの書簡を受け取った時点から、成就までほんの数年しか残されていませんでした。彼らが個々に、そして共同体としてどのような経過をたどることになるかは、この書簡に対する彼らの応答に大きく左右されることになったのです。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

f. キリストはロゴス

f. キリストはロゴス

要点をまとめれば、エルサレム教会がつまずいていたのは、後退したり停滞したり「霊的に乾いている」と感じたり、あるいは他の形で失敗している信者がいつもつまずくところ、すなわちイエス・キリストへの焦点と献身を失ったことにありました。口先では依然として主を称えてはいたものの、心の中では、主を自分たちの人生で最も大切なお方として大切にしていなかったのです。この失敗は、今日においても多くの原因から生じ、さまざまな否定的な形で現れる、よくあることです。エルサレム教会の場合、主な原因は迫害と、真理に対するなまぬるさが相まって生じたもので、その結果は主から離れることでした……そしてそのことが彼らを律法へと引き戻し、あるいは律法へと引き戻されることが、さらに主から離れることにつながったのです。どちらが原因でどちらが結果であったにせよ、最終的な結末は同じでした。すなわち、教会のかしらであるお方との結びつきを失い([コロサイ 2 章 18-19 節](#))、私たちのいのちそのものであるお方、愛する主イエス・キリストから漂い離れてしまったのです。

(1) こういうわけだから(すなわち、神のご計画全体に勝利を得られた神人としてのロゴスであるキリストが御使いたちにまさる無限の優越性を持つがゆえに)、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうしないと、**おし流されてしまう**。(2) というのは、御使たちをとおして語られた御言(ギリシヤ語 logos ロゴス、すなわち本質においてロゴスについて語っている律法)が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、(3) わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々(すなわち教会初期の人々)からわたしたちにあかしされ、(4) さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うこと(すなわち霊的賜物)によって、あかしをされたのである。

パウロが直前で言及している「聞かされていること」とは、読者が第一章で思い起こされたところのもの、すなわちイエス・キリストの神性と人性についての基本的な教義、そして神の計画におけるキリストの中心性に関する教えです。キリストこそがみことば(ロゴス)、すなわち神の計画そのものであり、その計画はこのお方の上に立てられ、このお方のうちにのみ成就するのです。[\(ヨハネ 1 章 1-14 節; ヘブル 1 章 1-4 節; 第二ペテロ 3 章 5-7 節; 第一ヨハネ 1 章 1-4 節; 黙示録 1 章 2 節; 19 章 13 節\)](#)。¹²

¹² [「BB 4B: 救済論\(Soteriology\)」の I.2「個々の信者の救いに関する神の計画」](#)を参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

f. キリストはロゴス

(15)御子(すなわちイエス・キリスト、13 節参照)は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。(16)万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17)彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている(ヘブル 1 章 3 節参照)。(コロサイ 1 章 15-17 節)

わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリストのみがいますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっている。(第一コリント 8 章 6 節)

この退歩は、律法の儀式へと戻ってしまった以上、ある意味で避けがたいものでした。というのも、律法はすでにイエス・キリストによって成就され、その象徴としての役割は完全に効力を失っており、信者がそれにこれ以上忠誠を示すことは、単なる伝統的な惰性的行為にすぎなくなっていたからです。そのような行為は、それ自体によって霊的な退廃をもたらしたばかりか、御言葉という「水」と、その御言葉が御霊によってもたらす力(ヨハネ 7 章 38-39 節)を拒むことによって、これらの信者を間もなく霊的に完全に「乾いた」状態へと追い込み、グノーシス主義の誘惑に対して脆弱な状態にしていきました。「かしら」(コロサイ 2 章 18-19 節)との交わりを失った結果、これらの信者は霊的に漂流することとなり、真理の安価な代用品を受け入れやすい状態にあったのです。そして、折衷的で誤った教えを持つグノーシス主義こそ、その時代における悪魔の主要な策略でした。律法主義とグノーシス主義という二つの問題は、いずれもイエス・キリストに関する尊い真理を、サタン的な虚偽へと歪めるという本質を共有していたため、しばしば一つの異端的な図絵の中で継ぎ目なく融合し、一方が他方へと導くことすらあったのです。

真のロゴスであるイエス・キリストは、神であると同時に人でもあり、受肉以来、永遠にわたって滅じられることのない神性と真の人性を、一つの完全な人格において有しておられます。この本質的な真理は、メシヤが真の神として人間の姿を取られたという考えに敵対的であった当時のパリサイ的律法主義と、メシヤを物質的ではない超天神的・半神的存在とみなしたグノーシス主義の考え方の双方に対して、妥協なく対立する教えでした。しかし、私たちの罪を贖うことができるのは、神-人であるイエス・キリストおひとりなのです。この重要な真理をはじめ、救い主についての多くの教えが、この信徒共同体の多く、もしくは大多数の心から失われてしまっていました。それは、迫害の結果

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

f. キリストはロゴス

であっただけでなく、聖書の真理の教えに対する全般的な無関心、そして本来教える責任を負っていた者たちが、その務めを怠ったことによるものでもあつたに違いありません。

わが子よ、訓戒を聞くのをやめてみよ。あなたは知識の言葉から迷い出ることになる。(新改訳IV 箴言 19 章 27 節)

これは私たちすべてが心に刻むべき良い警告です。どれほど前進していても、どれほど学んでいても、真理によってどれほど主に近づいていても([ヤコブ 4 章 8 節](#); 参照 [詩篇 73 篇 28 節](#); [エレミヤ 30 章 21 節](#); [ヘブル 7 章 19 節](#))、前に進んでいなければ、やがて後退してしまう可能性が高いのです。そして登った坂を下るのは登るよりも容易であるだけでなく、はるかに早いのです。エルサレムの信徒たちはまさにそのことを示しています。

イエス・キリストは神のご計画そのものであり、サタンの反逆によって失われたすべてのものに対し、父なる神が裁きと回復と置き換えをする手段なのです。その基盤は、主が十字架で成し遂げられた犠牲にあります。¹³ ご計画を成し遂げる方(ギリシヤ語ロゴス)として、イエス・キリストご自身が神のことば(ギリシヤ語ロゴス)、父のメッセージ、父のご計画の具現であり、受肉したロゴス、生ける神のことばなのです。

初めに言[イエス・キリスト]があつた。言は神[御父]と共に(すなわち、同一の神性)あつた。言は神であつた。(ヨハネ 1 章 1 節)

初めからあつたもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言(イエス・キリスト)について——(第一ヨハネ 1 章 1 節; 参照 [ヨハネ 1 章 1-4 節](#); [1 章 14 節](#))

彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。(黙示録 19 章 13 節)

イエス・キリストはメッセージそのものであり、メッセンジャーであり、また十字架においてそのメッセージに力を与え、それを歴史を通じて執り行われる方でもあります。そしてそれを直接ご自身で行われるのが、初臨と再臨という二つの到来の時なのです。過去のすべての神的啓示は、影と象徴を通してキリストの来臨と十字架を指し示していました。また、キリストの復活・昇天・御座での着座・栄光化・そして聖霊の派遣以後に与えられるすべての神的啓示は、キリストがどのような方であり、私たちのために何を成し

¹³ これは三つの段階で起こります。詳しくは [Satanic Rebellion \(サタンの反乱\) シリーズ](#)、特に第 5 部・第 IV 節「来たるべき事柄」を参照のこと。あわせて [BB 2B: 終末論 \(Eschatology\) 第 1 節「人類史における神の計画」](#)の要約も参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

f. キリストはロゴス

遂げられたのかを指し示しています。同時に、それらは「祝福に満ちた望み」、すなわち主の再臨を私たちに見上げさせるものでもあります([テトス 2 章 13 節](#))。これらの真理は聖書を読む信者にとっては明白であるべき事柄ですし、多少なりとも健全な聖書教育のもとにある信者であればなおさらのことです。ところが、エルサレムの信者たちはイエス・キリストの中心性から目をそらしてしまい、かつて彼らが信じ、さらにはそのために苦しむことさえ厭わなかった真理を損なってしまっていたのです([ヘブル 10 章 32-35 節](#), [11 章 26 節](#), [13 章 13 節](#))。忍耐して歩むべきところ([ヘブル 10 章 36-37a 節](#))、彼らはむしろ信仰から完全に落ちてしまう深刻な危険の中にありました([ヘブル 10 章 37 節後半](#), [2 章 1-3 節](#), [3 章 12-19 節](#), [4 章 11-13 節](#), [6 章 4-8 節](#), [10 章 26-31 節](#))。

兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない。(ヘブル 3 章 12 節)

このようにパウロは、自分の名を明らかにせず手紙を始めました。それはいつものような挨拶ではなく、かつて忠実で勇敢であった信徒たちが背を向けてしまったお方、すなわち教会のかしらであり、私たちを救ってご自身のものとしてくださったイエス・キリストの栄光を、鮮やかに再確認することから始めたのです。

あなたがたに知ってもらいたい。すべての男のかしらはキリストであり…(第一コリント 11 章 3 節前半)

そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。(エペソ 1 章 22 節)

愛にあって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。(エペソ 4 章 15 節)

キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であられるように、夫は妻のかしらである。(エペソ 5 章 23 節)

そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである。(コロサイ 1 章 18 節)

そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼

第一章：天使よりも優れた神の御子

I. イントロ及び背景

f. キリストはロゴス

はすべての支配と権威とのかしらであり、(コロサイ 2 章 10 節)

キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、からだ全体は、節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。(コロサイ 2 章 19 節)

エルサレムの信徒たちが失ってしまったものを、パウロはこれから徹底的に回復させようとする。すなわち、読者が故意に忘れてしまった基本から始め、律法の正しい理解を詳しく説明し(同時にグノーシス主義を暗に論駁しながら)、必須の教理を一から再確認させただけでなく、イエス・キリストの勝利と、やがて来ようとしている栄光についての驚くべき洞察を与えたのです。

Ⅱ．第一章の翻訳：

- (1) 神は、昔から多くの時代にわたり、またさまざまな方法で、預言者たちの中にあって私たちの先祖たちに語られたが、
- (2) [しかし、今や]この終わりの時代には、御子にあって私たちに語られた。この御子を神は万物の相続者として定め、さらに御子を通して宇宙(すなわち、時空)を創造されたのである。
- (3) 御子は、父の栄光の輝きであり、その本質の完全なかたちであり、その力御言ある葉によって万物を保っておられる。また、[人間としての][私たちの]罪の清めを成し遂げられた後、高き所における威光の御座の右に着座された。
- (4) [そして、イエスは、御座への着座によって]御自分の相続財産として、天使たちよりもはるかに栄光に満ちた御名を受け継ぐほどに、御使いたちよりも[明らかに]優れた者となられた。
- (5) 神がかつていずれの天使に向かって、「あなたはわたしの子。今日、わたしはあなたを生んだ」([詩篇 2 篇 7 節](#))と言われただろうか。また、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」([サムエル下 7 章 14 節](#))とも言われたであろうか。
- (6) さらに、神が「長子」を再び世界に導き入れられるとき、こう言われる、「神のすべての天使は、彼を礼拝せよ」([詩篇 97 篇 7 節](#)後半)。
- (7) そして天使たちについては、「神はその天使たちを霊とし、そのしもべたちを燃える火として用いられる」([詩篇 104 篇 4 節](#))と言われるが、
- (8) 御子については、[神は、こう言われる、]「神[すなわち、メシヤ]よ、あなたの御座は永遠に続き、あなたの御国の杖は正義の杖である。
- (9) あなたは義を愛し、不法を憎んだ。ゆえに神、あなたの神は、あなたに油をそそぎ、あなたの仲間たちにまさって喜びの油であなたを祝福された」([詩篇 45 篇 6-7 節](#))。
- (10) さらに[また御父は]こうも言われる。「主よ、あなたは初めに地を据え、天はあなたの御手の業である。
- (11) それらは滅びても、あなたはいつまでもおられる。それらは衣のように古び、
- (12) あなたが外套のようにそれらを巻き換えられると、それらは変わる。しかしあなたは同じであり、あなたの年は尽きることがない」([詩篇 102 篇 25-27 節](#))。
- (13) また、どの天使に向かって、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」([詩篇 110 篇 1 節](#))と言われただろうか。
- (14) 天使たちは皆、仕える霊であって、救いを受け継ぐことになる者たちに仕えるために遣わされているのである。

Ⅲ．第一章の要約と意識

神の子：イエス・キリストは父なる神の唯一の使者であり、まさに神の御子であり、人となられた神です。目に見えない天使的戦いにおいて勝利を収められたお方であり、あらゆる点において御使いたちよりも優れておられます。

御子は神のことばであり、父の使者であり、同時にメッセージそのものです。すでに世に来られた今、永遠の入り口に立つ私たちに対してははっきりと示されており、そのため、過去に神がさまざまな方法や手段で真理を示されたときのすべてよりも、本質的にすぐれています。御子は父のまことの相続人であり、創造されたすべてのものの相続人です。御子は実際に、存在するすべてを創造された方です。イエス・キリストは神であり、神のことばである方の力あることばによってこの世界を保っておられるので、御子なしに存在し続けられるものは何ひとつありません([コロサイ 1 章 16-17 節](#))。御子は全人類の救い主であり、ご自身の血、すなわち十字架での私たちのための犠牲によって、天使たちの反逆という見えない戦いの中で勝利を得られた方です。御子のわざは父によって受け入れられ、それは御子の復活、昇天、そして父の右における栄光の着座によって証明されています。あなたがたの中には誤ったグノーシス派の教えに流されてしまった者もありますが、では、御子が天使たちにまさることについて、いったい何の疑いがあるでしょうか。

聖書を考えてみてください。父が、イエスについてはそうしておられるように、天使の誰かをご自分の子と呼ばれたことは一度もありません([詩篇 2 篇 7 節](#))。また、メシヤについて明確に言われているように、天使の誰かに対して「自分が父である」と言われたことや、「父になる」と言われたことも一度もありません([サムエル記下 7 章 14 節](#))。実際、父は、メシヤが再臨される時に、すべての天使に対して、メシヤを神として礼拝するよう命じておられませんか([詩篇 97 篇 7 節](#))。そして、天使たちが神のしもべとして明確に描かれている一方で([詩篇 104 篇 4 節](#))、メシヤが神と呼ばれ、全地に広げられる義の統治の完全さについてほめたたえられ、父がその務めを委ねられた方として称賛されているのを、聖書の中で読んだことがないのですか([詩篇 45 篇 6-7 節](#))。また、メシヤが世界を創造されたこと、その永遠の統治が、ご自身が造られたこの世界の一時的な性質と対比されていること、そしてその同じ箇所、メシヤご自身の永遠の存在が確認されていることを読んだことがないのですか([詩篇 102 篇 25-27 節](#))。

こうしたことが天使について語られたことはありますか。父が天使に対して、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか([詩篇 110 篇 1 節](#))。天使たちは、本当のところ、神のしもべではありませんか。そうです。そして、私たちのために、すなわち、私たちがイエス・キリストの死によって救いの共同の相続人とされている私たちのために、御子によって遣わされているのです。

IV. 節ごとの注解

一節

神は、昔から多くの時代にわたり、またさまざまな方法で、預言者たちの中にあって私たちの先祖たちに語られたが、(ヘブル 1 章 1 節)

ここから、私たちの救い主である人となられた神、イエス・キリストについての、聖書全体の中でも最も力強く、簡潔でありながら包括的な記述のひとつが始まります¹⁴。パウロは、いつものように挨拶から始めるのではなく、古典詩の最高峰にふさわしい、見事な頭韻の技巧で書き始めています。これらの言葉の美しさは、ギリシヤ語で声に出して読まなければ説明しがたいものです。繰り返される P と R と L の組み合わせ (polymerōs kai polytropōs palai ho theos lalēsas tois patrasin en tois prophētais ポリュメロス・カイ・ポリュトロポス・パライ・ホ・テオス・ラレサス・トイス・パトラシン・エン・トイス・プロフエタイς πολυμερῶς καὶ πολυτρόπως πάλαι ὁ θεὸς λαλήσας τοῖς πατράσιν ἐν τοῖς προφήταις))は見事であり、選ばれた語の意味の力を少しも弱めるところか、ギリシヤ語を母語とする人が聞けば、その意味がいっそう強く響くものです。このような壮大な技巧は、大きな著作やその一部分の冒頭でしばしば用いられたもので、読者の注意を引きつけるための古典作家たちの方法でした。それは、現代の話し手が同じ目的でジョークや面白い話を使うときに起こりがちな品位の低下を招くことなく、むしろ格調を高めるものでした。パウロは古典にも精通しており、聖書の中でも、アラトス Aratus([使徒行伝 17 章 28 節](#))、メナンドロス Menander([第一コリント 15 章 33 節](#))、エピメニデス Epimenides([テトス 1 章 6 節](#))を引用しています。ギリシヤ語でこの節を初めて耳にした者なら誰でも、著者がどれほどの注意と労を尽くしてこの文を書いたか、そしてこれから語られる内容の重要性がどれほど大きいかを、すぐに悟ったに違い

¹⁴ 読者の皆さんには、詳細について『[BB 4A: キリスト論](#)』および『[BB 4B: 救済論](#)』をぜひ参照されることを強くお勧めします。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

一節

ありません。というのも、当時のすべての文書や手紙は声に出して読まれるものであり、黙読されることは想定されていなかったからです。したがって、静かに英語訳を読むときには、この効果の多くが失われてしまうのです。しかし、パウロがこの最初の文(2節の終わりまで続く)で用いた言葉そのものとその意味は、それ以上に強力です。すなわち、この第一節をしっかり受け止めると、読者は、エルサレム教会が逆戻りしてしまった「過去」と、啓示された救い主・メシヤであるイエス・キリストという「栄光に満ちた現在の現実」との、鮮やかな対比へと導かれるのです。

神は：

パウロはまず、神である父がすべてを支配しておられ、諸時代の区分(ディスペンセーション)と、それぞれにふさわしい方法でご自分の真理を伝えるように定められた方であることを、読者に思い起こさせます。律法も、神殿も、その儀式も、それらに関わるすべてのものも、神から来たものです。それらは人間の力によって勝手に作り出されたものではなく、神の御心に反して間違った形で続けてよいものでもありません。神こそが、ただお一人、決定される方です。計画は神のものであり、これらの問題は、悪魔が示唆したがるような「選択の対象」ではありません。律法と神殿の儀式は、それらが有効であった時、イスラエルにとって任意のものではありませんでした。同じように、今(また著者が書いていた当時)真理が配られる手段も、父が永遠の昔に決めておられたものです。神である父こそが権威であり、唯一の権威です。サタンは、「被造物は自分たちの方法を定めることができる」といった同じような提案によって天使の三分の一を誘惑した、元からの戦略家であり、エルサレム教会が誤って律法の礼拝へ戻ることでイエス・キリストへの信仰を損なっていた、その背後にいる者でもあります。グノーシス主義者も律法主義者も、この点を共有しています。つまり、危険な思い込み——自分が選ぶ方法で神を礼拝でき、神が喜んでくださるのだという思い込みです。実際には、私たちは神の方法に従うことでしか、物事を行うことも、救われることもできません([創世記 4 章 3-7 節](#)参照)。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

人々が決めることが、そのまま神の御心なのだと信じる愚かさを認識することは、今ほど重要な時はありません。というのも、まさにそれが、私たちの現在の教会時代がしていることだからです。「ラオデキヤ」とは、「民の声が正しい」という意味です。今の私たちの時代が、そのような生ぬるさのために主の口から吐き出される危険に直面しているのと同じように([黙示録 3 章 16 節](#))、エルサレム教会も、後退し、今や時代遅れとなった律法の儀式へ戻ったことによって、そのともしびが完全に消される瀬戸際にあったのです。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

一節

ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。わたしは言って置く、『主の名によってきたるものに、祝福あれ』とおまえたちが言う時の来るまでは、再びわたしに会うことはないであろう」。(ルカ 13 章 34-35 節)

昔から多くの時代にわたり、またさまざまな方法で：

これらの言葉によって、パウロは父なる神が過去において真理を語られた仕方を総括しています。それは聖書の歴史全体にわたって、きわめて多様で多面的なものでした。そしてそれは、かつて神が真理を分与された手段と、現在ただ一人の真理のメッセンジャーであるロゴスご自身、すなわち、私たちの愛する主であり救い主イエス・キリストとの間に、鮮やかな対比を示すためのものでした。旧約時代を通じて、来たるべき救い主の約束は、神によって明確に与えられていました。「多くの時に、多くの方法で」しるしや象徴、型や儀式、そして預言を通して、それらは影に包まれながらも告げ知らされており、そしてついにメシヤご自身が来られるその日まで続いたのです([創世記 3 章 15 節](#); [申命記 18 章 15 節](#); [詩篇 2 篇](#); [110 篇](#); [イザヤ書 9 章 1-7 節](#), [11 章 1-5 節](#), [49 章 5-7 節](#), [52 章 13 節-53 章 12 節](#); [ダニエル書 7 章 13-14 節](#); [ゼカリヤ書 13 章 1 節](#)参照)。それは**今となつては遠い昔**に起こったことです(「παλαι (パライ, palai, 『昔に』)」という語は、古文書学「パレオグラフィ(paleography)」、旧石器時代「パレオリシック(Paleolithic)」、古生物学「パレオントロジー(paleontology)」などの接頭語の語源でもあります)。しかし、ただ一人の救いの道であるお方がすでに来られ、真理の言葉を語られ、彼らと私たちの罪のために苦しみ、死なれ、よみがえり、天に昇り、栄光の座に着き、父の定められた完全な時に再び来られるのを待っておられる**今となつては**、古い「多様な方法」に逆戻りすることは、**唯一の**道であられるお方に対する、結構露骨な侮辱にほかなりません([ヨハネ 14 章 6 節](#))。

確かに偉大なのは、この信心の奥義である、「キリストは肉において現れ、霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた」。(第一テモテ 3 章 16 節)

語られた：

言い換えると、父なる神は、過去の信者たちの世代に対して、さまざまな時に、さまざまな方法で、みことばを語ってこられました——しかし、それはいつも同じみことば、同じロゴスであり、すなわち神のことばそのもの、私たちの救い主イエス・キリストを通しての救いでした。今(つまり、十字架以後であり、したがってパウロがこのエルサレム教会に書いていた時

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

一節

点で)、異なるのは、まだ成し遂げられていない救いを、影の中でぼんやりと見ながら望みを抱くのではなく([ローマ 3 章 23 節](#)参照)、キリストの血、つまり私たちのための十字架の上での霊的な死によって成し遂げられた贖いを、確信を持って受け取っているということです。したがって、律法の血の儀式は、今や完全に現された真理を私たちに教えるためにはもはや必要ではなく(この教会は福音書すべてと、多くの書簡をすでに持っていました)、そのような儀式を続けることは、事が成し遂げられた後では、まったく誤ったメッセージを伝えることにもなりました—すなわち、もし十字架だけで私たちのこの大いなる救いが十分であるなら、なぜこれらの儀式を続ける必要があるのか、ということになり、十字架が私たちのこの偉大な救いを実現するのに十分ではなかったかのように暗示することになってしまう、ということです。律法と神殿、そしてそれらに関わる儀式は、確かに過去において、父なる神が用いられた「多くの方法と多くの時」の一部でした。しかし、これらの象徴が示していた本体を、御子が十字架での霊的死によって完全に成就された後にも、これらが続けられるべきだと父なる神が考えておられるとみなすことは—すべての事柄の土台であるその現実を踏まえれば—不適切であり、危険だったのです。父なる神によるその種の真理の伝達は、すでに終わっていて、イエス・キリストが来られた時以来そうでした。そしてこれが、パウロが、父なる神の以前の真理の配分(ディスペンセーション)に属するこれらの「時と方法」について、過去形を用いている理由なのです。¹⁵

わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためではなく、**成就するために**きたのである。(マタイ 5 章 17 節)

キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終り(**成就**)となられたのである。(ローマ 10 章 4 節)

私たちの父祖に：

エルサレムの住民たちは、自分たちの血統、遺産、そして伝統を誇りに思っていました。それはごく当然のことです。しかし、伝統主義が価値を持つのは、それが真理を守り、真理を明らかにする限りにおいてです。逆に、もしそれが真理を覆い隠したり、さらに悪いことには誤ったやり方を存続させようとするのであれば、その時点で完全に退けられるべきなのです。これはユダヤの人々にとって学ぶには難しい教訓であり、大きな意味で「この世代」([マタイ 24 章 34 節](#); [マルコ 13 章 30 節](#); [ルカ 21 章 32 節](#))、すなわちこのような頑なな人々のあり方が、キリストの栄光ある再臨までユダヤの民の特徴となる理由を説明しています([詩篇 12 篇 7-8 節](#); [ローマ 11 章 25 節](#); [申命記 32 章 5 節](#), [20](#)

¹⁵ ここに用いられている分詞 *lalesas* (ラレサス, $\lambda \alpha \lambda \eta \sigma \alpha \varsigma$, 「語られた」) のアオリスト形は、最も一般的な場合と同様に、先行する動作(antecedent action)を示しています。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

一節

[節；詩篇 95 篇 10 節；箴言 30 章 11-14 節；エレミヤ書 2 章 31 節；7 章 29 節](#)参照)。

(29)偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、(30)『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。(31)このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。(32)あなたがたもまた先祖たちがした悪の枅目を満たすがよい。(マタイ 23 章 29-32 節)

(47)あなたがたは、わざわざいである。預言者たちの碑を建てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。(48)だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なのだ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから。(ルカ 11 章 47-48 節)

「私たちの父祖たち」という表現を強調することによって、パウロは疑いなく読者に以上のことを思い起こさせようとしていたのであり、それによって、主が先に指摘されたように不十分であることが明らかになった過去の伝統からは、明確な決別が必要であることを、暗に示そうとしていたのです。これらの伝統は、主の生涯とみわざによってすでに完全に不要となり、もはや有効ではなくなっていたからです。さらに、初臨以前には正当であった儀式であっても、主が実際に来られたことによって、それらはただその到来を指し示していた影にすぎなかったものとして取り去られたのです。

預言者たちの中で：

預言者たちに言及するとき、パウロは彼らの預言を思い起こさせ、律法が先に見ていたイエス・キリストとその犠牲に関するすべての預言が、今や完全に成就したことをほめかしています([イザヤ 53 章 1 節以下](#)；[ルカ 24 章 27 節](#)参照)。また、キリストご自身の言葉と後の聖書の証言によって、昔の著名な預言者たちが、エルサレムの当時の信者たちが犯していたのと同じ誤りを、決して犯さなかったことを私たちは確かに知っています。というのも、彼らは自分たちに与えられた預言の成就を切に待ち望んでいたからです。

あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたのしていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。(マタイ 13 章 17 節)

あなたがたに言うておく。多くの預言者や王たちも、あなたがたのしていることを見ようとしたが、見るができず、あなたがたの聞いていることを聞こう

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

一節

としたが、聞けなかったのである」。(ルカ 10 章 24 節)

あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」。(ヨハネ 8 章 56 節)

(10)この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。(11)彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光(救いのことなど)とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。(12)そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

この手紙がエルサレムで読まれた時、新約聖書はすでに少なくとも半分は完成に至っていました。したがって、彼ら信者は自分たちの信仰や実践において、旧約聖書だけに全面的に依存せざるを得なかったのだ、という言い訳はできませんでした。それどころか、彼らは他のどの教会も経験していないほど、使徒たちの教えを豊かに与えられていたのです。確かに聖書全体は祝福であり、「教え、戒め、矯正、義の訓練のために」([第二テモテ 3 章 16 節](#))有益です。そして律法もまた有益ですが、正しく用いる場合に限ってのことです([第一テモテ 1 章 8 節](#))。

そこで、イエスは彼らに言われた、「それだから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなものである」。(マタイ 13 章 52 節)

これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。(ローマ 15 章 4 節)

したがって、父なる神がかつて「預言者たち」を通して過去の世代に真理を伝えられたことを強調し、そしてこの以前の方法(旧い時代におけるディスペンセーション)と、今や父が真理を授けるための選ばれた手段である「御子」とを対比することによって、パウロは御霊のうちの神のことばを鋭い剣のように用いて、これらの信者たちの後ろ向きの誤った道と、彼が呼び戻そうとしている前を向いた正しい道とを分けています。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

選択肢は二つしかありません。すなわち、みことばの側に立つか、自分自身の道を行くかです。実際の聖書に注意を向けるなら、今やイエスこそが、信者である私たちの持つもの、また行うすべてのことの真の焦点であることは明らかです。

わたしは彼の足もとにひれ伏して彼を礼拝しようとした。すると彼はわたしに言った。「そうしてはいけません。わたしは、あなたと、イエスについてのあかしをしっかりと保っているあなたの兄弟たちの、同じしもべです。神を礼拝なさい。イエスについてのあかしこそが、預言の本質(文字どおりには『霊』)なのです」。(黙示録 19 章 10 節-NKJV)

二節

[しかし、今や]この終わりの時代には、御子にあって私たちに語られた。この御子を神は万物の相続者として定め、さらに御子を通して宇宙(すなわち、時空)を創造されたのである。(ヘブル 1 章 2 節 NKJV)

[Now(今や)]:

これ(「今や」という言葉)は、どの英訳においても加えてよい注記であり、ギリシヤ語本文を読むと明らかな点——すなわち、旧約のもとにあった以前の状況と、現在「御子にあって」なされている御父による御民への語りかけという新しい秩序との、鮮やかな分岐を強調するためのものです。かつては、多くの預言者や多様な手段を通して、父なる神は人類史の中心的出来事、すなわち神の御子の誕生、奉仕、犠牲、復活へと導いてこられました。しかし十字架と私たちの主イエスの復活、そして聖霊の賜物以後、すべてが変わったのです。これこそがヘブル人への手紙の本質的な主題であり、この書簡におけるパウロのすべての論述の基盤です。聖霊の時代、すなわち教会時代のディスペンセーションは、すべての信者に注がれる油注ぎと聖霊の内住、これまでに与えられたことのなかった霊的賜物を分け与え力づける働き、そして(当時)間近に迫っていた新約聖書正典の完成——その中でこれまでの奥義がすべて明らかにされる——を伴うという特徴を持ちます。これは以前の時代とはあまりに異なっており、今の「この終わりの時代に」古きものへと逆戻りすることは、せいぜい真理に対する近視眼的な見方に終わるだけでなく、新しい啓示を見落とし、聖霊による解明と力づけを無視するという、きわめて霊的に危険なことでもあったのです。

この終わりの時には:

ここで現在を過去の日々と対比するとき、初臨が大きな分岐点になります([マタイ 11](#)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

[章 12-13 節](#); [マルコ 1 章 15 節](#); [ルカ 16 章 16 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#); [ガラテヤ 4 章 4-6 節](#); [エペソ 1 章 7-10 節](#); [第一テモテ 2 章 4-6 節](#); [ヘブル 9 章 26 節](#)参照)。パウロがここで語っている「この終わりの時に」とは、教会時代のディスペンセーションを指しています。それは、私たちの主イエス・キリストの再臨に先立つ最後のディスペンセーションです。すでに学んだように、ディスペンセーション——すなわち、御父が御自分の真理をどのように分配なさるかという観点から人類の歴史を区分されたもの——は、次のようになります：

1. 異邦人家長時代: アダムからアブラハムまで(主に個々の信者を通して)
2. ユダヤ人家長時代: アブラハムからモーセまで(主にユダヤの族長を通して)
3. モーセの律法時代: モーセからキリストまで(主に預言者、レビ人、旧約聖書＝律法・預言書・諸書を通して)
4. 教会時代: キリストの初臨から再臨まで(初めは使徒と特別な賜物を持つ人々を通して、その後は聖霊と完成された正典、そして牧会教師を通してすべての信者に)
5. 千年王国: キリストの再臨から歴史の終わりまで(無限に豊かな真理が多様な源から提供される: [イザヤ書 11 章 9 節](#); [ハバクク 2 章 14 節](#)参照)

上の説明は、時代区分の違いを完全に述べようとするものではありません(これについては前にすでに扱いました¹⁶)。しかし、主が来られる前に、御父がご自分の真理を世に分配するために用いてこられた「多くの方法と多くの手段」の主な違いの要点は示しています。まず付け加えるべき重要なことは、律法の時代と教会の時代の間、つまり主の三年半の宣教期間において、真理を本当に求めるすべての人にとって、生ける神のことばである主ご自身が、真理の主要な源であったということです。主の生涯、働き、そして犠牲は、すでに上で述べたように、神が定められた大きな分岐点だからです。

第二に、教会時代は、使徒職、預言、異言といった多くの独特な霊的賜物が与えられることから始まりました。これらは、キリストの集まりをイスラエルの外へ、異邦人の世界全体へ広げる助けとなるためでした。しかし、これらの賜物は決して永続するものとして意図されておらず、実際、聖書の正典が完成し「完全なもの」となった時点で([第](#)

¹⁶ 詳しくは、「サタンの反逆」第五部の『人類史の七つの千年日』の第 II.5 節「人類史の五つの時代区分」を参照してください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

[一コリント 13 章 8-11 節](#))、御霊はこれらの「しるしの賜物」を与えることをやめられました。その時点以降(およそ紀元 68 年)、黙示録の執筆と使徒ヨハネの死をもって、聖書、聖霊の普遍的な内住、そして備えられ、賜物を与えられ、資格を持つ牧師・教師の教えの務めが、父なる神がご自分の真理を示すために用いられる手段となりました。律法を儀式的に守ることは、もはや有効ではありません。

第三に注意すべきことは、三番目のディスペンセーション、すなわち律法のもとにあるイスラエルの時代には、まだ七年間が残されているということです([ダニエル 9 章 24-25 節](#),[26-27 節](#)参照)。この七年間とは、大艱難期のことです。私たちの主の再臨に先立つ最後の七年間は、教会時代の最後の七年間と同時に進行することになります。その結果、キリストの再臨直前、艱難期の時に、再臨前の二つの最後のディスペンセーションが一つに合流するのです¹⁷。

ここで私たちの現在の学びに関わるのは、この手紙が書かれた当時のエルサレムの信者たちの状況です。それは、父なる神が真理を世界に分与される方法という観点から見れば、基本的には今日私たちが直面しているものとほとんど同じでした。唯一の例外は、まだ使徒たち(パウロのように)が存在しており、教会全体に対して神から直接与えられた権威を持っていたという点です。また、他の特別な啓示の賜物がまだ与えられていた可能性もありますが、パウロは[ヘブル 2 章 4 節](#)でそれらを過去形で語っており、これは信者たちに「そう遠くない過去」を思い起こさせる文脈の中で述べられています。私たちが確信をもって言えることは、この時点において、律法のディスペンセーションは神の視点からすでに遠く過ぎ去り、そして決定的に終わっていた、ということです。神殿が依然として存在し、律法に基づく儀式や典礼が——しばらくの間——続けられていたという事実にもかかわらず、です。したがって、「この終わりの日に」という表現によって、パウロは、聖霊によって力づけられた新しいディスペンセーションの現実と、御子の到来と犠牲と復活によって、真の目的がすでに完全に成就した律法の古いディスペンセーションとを、鋭く区別しているのです。

私たちに語られた：

父なる神こそが御計画を持つお方です。したがって、その御計画に関するすべての啓示や伝達は、父から来ます。その伝達とは御言葉、すなわちロゴス、イエス・キリストです。

¹⁷ [サタンの反逆第 5 部『人類史における七つの千年の日』.II.9.e「艱難期の重なり」](#)を参照してください。＜印刷本では 439 頁参照 訂正：「艱難期との重なり」→「艱難期の重なり」に訂正します＞

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかたの(すなわち父)目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである。(エペソ 1 章 11 節)

ここヘブル 1 章 2 節の文脈において、「わたしたち」という言葉は、父なる神の伝達の受け手としての私たち信者を指しています。イエス・キリスト、御子は、そのメッセージであり、またメッセンジャーでもあります。そしてそれは常にそうでありました。ただし、この現在のディスペンセーション、すなわち教会時代において異なるのは、次のことです。今や私たちは、メシヤを肉において見せられました。今や私たちは、十字架という事実、すなわち私たちすべての罪の代価としてすでに支払われた事実を持っています。今や私たちは、かつては秘められていた奥義をすべて、新約聖書において完全に啓示され、説明されるかたちで受けています。新約聖書は神の書かれた御言葉であり、同時に御自身が生ける御言葉である方に見える対応物です(ヨハネ 1 章 1-5 節; 第一コリント 2 章 16 節; 第一ヨハネ 1 章 1-3 節; 黙示録 19 章 13 節)。そして今や、私たちは聖霊の内住を与えられ、また、教会全体に多くの霊的賜物が与えられており、私たちが皆、神の真理を学び、それに従って生きることを助けるためのものとなっています。それは神の栄光のためであり、私たちがここにいる理由である、愛する主イエス・キリストを喜ばせるためです。

これらは、以前のディスペンセーションとは決して些細な違いではなく、決定的な相違点です。以前の時代では真理の分与が一つの国(イスラエル)に集中していましたが、今は全世界に拡大されています。以前は数人の預言者、祭司、レビ人に託されていたものが、今やキリストのからだであるすべての信者に託されました。それぞれの信者が、父の真理の分与において重要な役割を担っているのです。それは直接的に(伝道者、牧会教師や関連する賜物を通して)であったり、間接的に(証し、祈り、あるいは様々なかたちでの宣教・教育活動への支援を通して)であったりします。そしてその背後では、聖霊ご自身が賜物を配分し、それを力づけておられます。御子は私たちに個々の働きを割り当てられ、父はその働きの効果を定められます。

(4) 霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。(5) 務は種々あるが、主は同じ(すなわちイエス・キリスト)である。(6) 働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じ(父)である。(7) 各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。(第一コリント 12 章 4-7 節)

すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。(第一コリント 12 章 11 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。(エペソ 4 章 7 節)

ここで重要なのは、「わたしたちに」という表現が、異邦人もユダヤ人も含むすべての信者を指しているということです。特にここではエルサレムの信者たちも含まれていました。彼らもまた、教会時代に固有のこれらのすばらしい祝福の受け手だったのです。彼らにも賜物が与えられ、その賜物に伴う奉仕の責任が与えられていました。しかし彼らはそれを果たしていませんでした。彼らは霊的成長を怠り、そのためにそれを果たす力を持っていなかったのです([ヘブル 5 章 12-14 節](#); [6 章 1-8 節](#); [10 章 26-35 節](#); [31-33](#), [34-35](#) 参照)。その代わりに彼らは、律法という「弱く、みじめなものである要素」([ガラテヤ 4 章 9 節](#); [申命記 4 章 19 節](#); [ガラテヤ 4 章 3 節](#); [コロサイ 2 章 16 節](#), [20 節](#); [第二ペテロ 3 章 10 節](#), [12 節](#) 参照)と、その律法主義的に脚色されたパリサイ派的慣習に戻ってしまっていました。これはエルサレム教会に特有の過ちではありません。前にも見てきたように、律法主義とその反対極である反律法主義(グノーシス主義)は、使徒時代の末期において健全な教理に対する主要な二大脅威でした。そして私たちの現代の教会時代(ラオデキヤの時代)もまた、この点で非難を免れません。伝統は常に強い引力を持ち、とりわけそれが真理の名残を含んでいる場合には(律法がそうであったように、また現代のキリスト教諸派が程度の差はあれそうであるように)。同様に、あらゆる束縛を投げ捨てる生き方もまた、しばしば「聖なる」「霊的な」「真理の本物の表現」などと主張される場合には、強い魅力を持ちます(カリスマ派やキリスト教的装いをした諸々の異端が主張しているように)。したがって、私たちはパウロとともに、そのような真理からの逆戻りを厳しく退けつつも、ラオデキヤ時代にある私たちの教会も、決して完全ではないことを認めざるを得ません。私たちもまた「汚れた唇の民の間に住んでいる」([イザヤ書 6 章 5 節](#))からです。

[ひとりの]御子にあって：

ここにあるギリシヤ語を英語に訳すのは難しいところです。まず第一に、ギリシヤ語には定冠詞も不定冠詞もついておらず、これは偶然ではありません。しかし、英語では“a Son”でも“the Son”でもないただの“Son”とは訳せません。特に、ここでは明らかに「働きかける主体(働き手)」を示す表現が使われているので、なおさら英語では成立しません。英語では“through God”や“through Christ”や“through Jesus”と言うことはできますが、“through Son”と言うことはできないからです。第二に、ここで用いられている前置詞(エン en + 与格)は、通常ギリシヤ語で「働き手」を表すためのものではありません。むしろ、これは一般に「道具性」、つまり「ある力が働いた結果」という意味を伝えるための言い方であって、「人格的な主体の行動」を表すものではありません。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

せん。これら二つの通常ではない使い方が組み合わさって、「in Son(御子において)」という語句は、ギリシヤ語では非常に強い印象を与えるのです。英語の読者が予想しないほど際立った表現です(とはいえ、英語では不自然すぎてそのまま訳せません)。では、なぜパウロはこのように書いたのでしょうか。そして、「in Son(御子にあつて)」とは正確には何を意味するのでしょうか。

この劇的な言い回しは、この手紙を聞く人々の注意をつかむために用いられています。手紙は声に出して読み上げられ、聞いて受け取るものであり、黙読されることは古代世界では非常にまれだったからです。ギリシヤ語を聞く人は「御子」という語を、神や主といった称号のように受け取り、神の御子が唯一であること——ただの「ひとりの子」ではなく「御子」であること——をはっきり理解します。そして、これを聞くことで、彼らが本来心に留め続けるべきイエス・キリストを、高く掲げてこなかった事実を思い起こさせようとしているのです。イエスはただの人以上であり、ただの預言者以上であり、どんな天使よりも偉大な方です。イエスはまさに神であり、受肉以来、真の人間でもある方で、神性と人間性の両方を持つ、宇宙で唯一の方です。これらのことを知識として知っていても、それを厳密に自分に適用していない場合があります。また、霊的に前進していないために、私たちの主イエス・キリストについての真理——その唯一のご存在と、私たちのために十字架でしてくださったこと——の力と荘厳さが、時とともに弱まり、薄れてしまうこともあります。いわば、光をかき消す雑草によって覆われてしまうように。この地上にいるかぎり、イエスがどれほど壮大な方で、してくださったことがどれほど素晴らしいかを完全に理解することはできません。しかし、これらを過小評価してしまうことは確かに可能であり、神の言葉の真理の光から離れるなら、かつて持っていたわずかな感謝・理解(appreciation)さえも、暗闇の中で冷え込んでしまうのです。

常に主を恐れる人はさいわいである、[真理に対して]心をかたくなにする者は災に陥る。(箴言 28 章 14 節)

主が復活されたその日、私たちの主はエマオへ向かう道で二人の信者と語り合われました([ルカ 24 章 13-35 節](#))。主は意図的にご自身の姿を覆い隠され、彼らが認識できないようにされました。そして会話の中で、「聖書を彼らに説き明かされた」のです([ルカ 24 章 32 節](#))。

(25)そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。(26)キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。(27)こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

どもを、説きあかされた。(ルカ 24 章 25-27 節)

それから、あとで彼らが一緒にパンを裂いていたとき、私たちの主はご自身を彼らに現されました([ルカ 24 章 31 節](#))。私たちの主がエマオ途上のこの二人の信者にしてくださったことを、パウロはエルサレム教会に対してしようとしているのです。私たちの目から覆いがかけられたままではなく、神の御子の現実は今や肉となって私たちに示されています([ヨハネ 1 章 14 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-2 節](#))。しかし、エマオへ向かって旅していた信者たちのように、エルサレム教会も、自分たちが自分の目を見たものが心から薄れてしまうことを許していました。神の御子の威光を思い起こさせることは、霊的成長を求めて父なる神との交わりに彼らを戻すための、必要な第一歩でした。なぜなら、イエス・キリストこそが、今や神のご計画全体における、目に見える個人的な中心だからです。

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目を見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言(すなわちイエス・キリスト)について——
(第一ヨハネ 1 章 1 節; 参照. [ヨハネ 1 章 1-4 節](#); [1 章 14 節](#))

父を敬うことは御子を敬うことなしには不可能です。したがって、律法に戻ることによって御子の犠牲を無視したり(あるいはグノーシス主義に従って御子を御使いと同列の被造物とみなしたり)して、自分は霊的に歩んでいると思い込む人は、実際には自分を欺いているにすぎません。

彼(ペテロ)がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。(マタイ 17 章 5 節; 参照 [第二ペテロ 1 章 16-21 節](#))

(22) 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。(23) それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。(ヨハネ 5 章 22-23 節前半)

わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節後半)

御子は、父の使者であり、父の語られるご自身のメッセージそのものでもある、まさに神のことばその方です。ですから、御子は、神が過去に真理を伝えてこられた多くの方

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

法や手段に比べて、本質的に優れています。真理そのものであるイエス・キリストによって父が示される、この新しい方法を受けとめないことは、御子に対する無礼であり([ヘブル 6 章 6 節](#); [10 章 29 節前半](#))、聖霊を悲しませることになります([ヘブル 10 章 29 節後半](#); 参照 [イザヤ 63 章 10 節](#); [マタイ 12 章 31-32 節](#); [ルカ 12 章 10 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#); [エペソ 4 章 30 節](#))。

万物の相続人と定められた方:

相続という主題は、聖書において非常に重要なものです。律法の中でも、新約聖書全般においても([マタイ 5 章 5 節](#), [19 章 29 節](#), [25 章 34 節](#); [マルコ 10 章 17 節](#); [ルカ 10 章 25 節](#), [18 章 18 節](#); [使徒行伝 20 章 32 節](#); [ローマ 4 章 13-14 節](#), [8 章 17 節](#); [第一コリント 6 章 9-10 節](#), [15 章 50 節](#); [ガラテヤ 3 章 18 節](#), [29 節](#), [4 章 1 節](#), [7 節](#), [30 節](#), [5 章 21 節](#); [エペソ 1 章 11 節](#), [14 節](#), [5 章 5 節](#); [コロサイ 3 章 24 節](#); [テトス 3 章 7 節](#); [ヤコブ 2 章 5 節](#); [第一ペテロ 1 章 4 節](#), [3 章 9 節](#); [黙示録 21 章 7 節](#); 参照 [コロサイ 1 章 12 節](#); [第一ペテロ 5 章 3 節](#))、そして特にヘブル書の中でも([ヘブル 1 章 2 節](#), [4 節](#), [14 節](#), [6 章 12 節](#), [17 節](#), [9 章 15 節](#), [11 章 7-8 節](#), [12 章 17 節](#))そうです。相続は、エルサレム教会のユダヤ人信者たちにとっても非常に重要なものでした。彼らの多くは、イスラエルがカナンの地に入った後に、ヨシュアによって最初に割り当てられた祖先の土地と、依然としてつながりを持っていましたし、他の者たちは、彼らの本来の相続地が再び回復されることを望んでいたかもしれません(それは実際には、ヨベルの年ごとに 50 年ごとに起こるべきものでした: [レビ記 25 章 8-44 節](#), [26 章 34-35 節](#), [42-43 節](#), [27 章 16-24 節](#); [民数記 36 章 4 節](#))。この永続的な相続制度は、もちろんモーセの律法の中にあり、それと切り離せないものでした。しかし、新約聖書から私たちが知っているのは、信者は皆、アブラハムの肉による子孫だけではなく、神の相続人であるということです。また、私たちの真の相続財産は、この一時的な地上に結びついていないことも知っています。私たちの永遠の相続財産は地上のどの都市でもなく、新しいエルサレムにあり、私たちは神がイエス・キリストにあって約束してくださったすべてのことが実現するのを、希望をもってその都に目を向けて待ち望んでいるのです。

勝利を得る者は、これらのもの(すなわち新しいエルサレムの栄光)を受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。(黙示録 21 章 7 節)

イエス・キリストこそが律法のすべての要求を成就し、私たちが切望する永遠の相続を可能にされた方です。イスラエルの土地の一区画は、その相続の象徴にすぎませんでした。私たちは、イエス・キリストこそが死んでくださった方であり、その方を通して、またその方とともに、私たちが共同の相続人となったことを理解しています([ローマ 8 章 17 節](#); [エペソ 3 章 6 節](#); [第一ペテロ 3 章 7 節](#); 参照 [ヘブル 11 章 9 節](#))。すなわち、

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

神に属する者となったので、私たちは神の子とされ、神の子である御子とともに相続人とされたのです([ガラテヤ 3 章 26 節](#); [4 章 5-7 節](#); [エペソ 1 章 5 節](#); 参照 [マタイ 5 章 9 節](#), [5 章 45 節](#); [ルカ 20 章 36 節](#); [ヨハネ 8 章 35 節](#); [ローマ 8 章 14 節](#); [第一テサロニケ 5 章 5 節](#); [ヘブル 2 章 10 節](#))。というのも、父なる神のすべての約束はただ一人、イエス・キリストを通してだけ成就するからです。

これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、**永遠のいのちを望む**ことによって、御国をつぐ者となるためである。(テトス 3 章 7 節)

(3)ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける**望み**をいだかせ、(4)あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない**資産**を受け継ぐ者として下さったのである。(5)あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。(第一ペテロ 1 章 3-5 節)

イエス・キリストとともに相続人とされているということは、死とすべての喪失の代わりに、父なる神が計り知れない恵みによって、永遠の相続財産を約束してくださったということです。この相続財産は、私たちの主であり救い主であるその愛する御子の死によって買い取られ、代価が支払われたものです。私たちは信仰によってその契約・遺言・約束——すなわち相続の約束——に入ります([エペソ 2 章 8-9 節](#))。信じることによって、死によってこの相続財産を与えるために死に、その後よみがえられた方の共同相続人とされます。私たちがその方の死によって義と認められ([ローマ 3 章 24 節](#), [5 章 9 節](#), [8 章 30 節](#))、その方とともによみがえりにおいて栄光を与えられるためです([テトス 3 章 7 節](#))。そして、私たちは新しい住まいである新しいエルサレムにおいて、その方とともに永遠に生きるのです。これが約束されています。これを私たちは信じています。そして、これこそが私たちの望みであり、神が言われたとおりに成し遂げてくださるという確かな保証に基づく望みです。その契約・約束を確かにしたのは信仰であり、またその成就の時まで、その契約が保たれるように助けてくださるのが御霊です([第二コリント 1 章 22 節](#); [エペソ 1 章 11-14 節](#), [4 章 30 節](#); [第一ペテロ 1 章 4-5 節](#))。

(39)さて、これらの人々(すなわちヘブル 11 章に出てくる偉大な信仰者たち)はみな、**信仰**によってあかしされたが、**約束**のものは受けなかった。(40)神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが**全うされる**(すなわち復活と報いを受ける)ことはない。(ヘブル 11 章 39-40 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

すべての信者が永遠に受けることになるこの共通の永遠の祝福の一式は、イスラエルの民が約束の地に入ったときに受けた相続財産にたとえることができます——より正確に言えば、その一時的な相続こそ、永続する永遠の相続を教えるためのたとえなのです(ちょうど地上の神殿が、まことの天の現実の単なる写しであるように)。実際、新約聖書はこの相続(嗣業)のたとえで満ちており、私たちが現在のつかの間の世界ではなく、やがて受ける永遠の所有に心を向けることが、どれほど重要かを示しています。キリストのからだの一員として、私たちは神の相続人であり、またキリストの相続人であり、神の永遠の御国における永遠のいのちの相続財産を受け継ぐ者であって、その豊かさは、今の私たちには想像すらできないものです。私たちがこの地上の生涯で、どれほど少し、あるいはどれほど多く主のために働いたかに関わらず、すべての信者はイエスと御国において完全な分け前を受けるのです([マタイ 20 章 1-16 節](#))。

(16)御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さい。(17)もし子であれば、相続人でもある。神の**相続人**であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の**相続人**なのである。(ローマ 8 章 16-17 節)

もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、**約束**による**相続人**なのである。(ガラテヤ 3 章 29 節)

(11)私たちはイエス・キリストにあって**相続財産**を受けており、すべてのことを御心の望みにしたがって働かせておられる方のご計画に従って、あらかじめ定められているのです。(12)それは、以前からキリストに**望み**を置いていた私たちが、(この地上の)生涯においてその栄光への賛美を生み出すという目的に仕えるためです。(13)あなたがたもまた、救いの良い知らせである真理の**ことば**を聞き、キリストを信じたときに、**約束の御霊**、すなわち聖なる御霊によって**封印**されました。(14)この御霊は、私たちの相続財産を贖って保持するための保証(すなわち、私たちの復活と報いをあらゆる面で守る保証)であり、その栄光がほめたたえられるためなのです。(エペソ 1 章 11-14 節/NKJV 訳)

あなたがたの心の目を明らかにして下さいように、そして、あなたがたが神に召されていただいている**望み**がどんなものであるか、聖徒たちが**つぐべき**神の国がいかに栄光に富んだものであるか、(エペソ 1 章 18 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

光の国にある聖なる者たちの**相続財産**にあずかるに足る者としてくださった父に、感謝をささげています。(コロサイ 1 章 12 節/ NIV 訳)

(23)何をするにも、人にではなく主に仕えるように、心を込めて主のために働きなさい。(24)あなたがたが主から嗣業としての報いを受けることを知っているからです。あなたがたが仕えているのは主キリストです。(コロサイ 3 章 23-24 節/ NIV 訳)

そこで、神は、[アブラハムの信仰にならって]**約束のものを受け継ぐ人々に**、[救いとそれに伴う祝福に関する]ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。(創世記 22 章 16-17 節)。(ヘブル 6 章 17 節)

そしてこの理由のために、かれは**新しい契約**の仲介者となりました。すなわち、招かれた人々が、第一の契約のもとで犯した違反から私たちを贖うために、かれが受けられた死にもとづいて、**永遠の嗣業**を受けることができるようになるためです。(ヘブル 9 章 15 節)

愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに**約束された御国の相続者**とされたではないか。(ヤコブ 2 章 5 節)

イエス・キリストは、悪魔の反逆によって引き起こされた見えない戦いにおける勝者であり、十字架において究極の勝利を収められました(ヨハネ 12 章 31-32 節; [コロサイ 2 章 15 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#); [黙示録 5 章 5 節](#); 参照 [ダニエル 7 章 14 節](#); [マタイ 28 章 18-20 節](#); [使徒行伝 2 章 36 節](#), [10 章 36 節](#); [ローマ 14 章 9 節](#); [第一コリント 15 章 27 節](#); [エペソ 1 章 20-22 節](#); [ピリピ 2 章 9-11 節](#); [コロサイ 1 章 16-20 節](#); [ヘブル 1 章 2 節](#), [2 章 8 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#); [黙示録 11 章 15 節](#), [17 章 14 節](#), [19 章 16 節](#))。この勝利、すなわち私たちのためにご自身をささげてくださいましたその霊的な死こそが、悪しき者の力から私たちを贖い出した根拠です([マタイ 20 章 28 節](#); [マルコ 10 章 45 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#); 参照 [第二テモテ 1 章 10 節](#); [ヘブル 2 章 14 節](#))。この勝利は、御父から与えられた務めを完全に果たされたことによる、御子ご自身の栄光化の根拠でもあります。その栄光化の一部として、勝利の戦利品のすべてを受けることがあります。それには、今私たちがあずかっている御霊の賜物([ヨハネ 7 章 39 節](#))、主の勝利を生かして歩むことを可能にする霊的な賜物([エペソ 4 章 8 節](#))、そして三つの勝利の冠、すなわち義の冠([第一コリント 9 章 25-27](#)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

節；[第二テモテ 4 章 8 節](#)）、いのちの冠([ヤコブ 1 章 12 節](#)；[黙示録 2 章 10 節](#))、そして栄光の冠([第一ペテロ 5 章 4 節](#))が含まれます。「勝利者にこそ戦利品は与えられる」のです([詩篇 68 篇 12 節](#), [68 篇 18 節](#), [82 篇 8 節](#), [110 篇 1-7 節](#), [111 篇 5 節](#) [[ヘブル語本文](#)]；[イザヤ 33 章 23 節](#), [53 章 12 節](#)；[マタイ 28 章 18-20 節](#)；[ルカ 11 章 21-22 節](#), [20 章 16 節](#)；[ヨハネ 16 章 7 節](#)；[エペソ 4 章 7-10 節](#))。そして、王の王・主の主に自らの身をゆだねた者として、私たちは、その戦利品の分け前を、復活後のキリストの裁きの座において与えられるのです。それは、この地上の最初の体にあつて、まだここで戦っている間に、私たちがどのように戦ったかに見合った報いとなります([マタイ 13 章 23 節](#), [19 章 29 節](#), [25 章 14-30 節](#)；[マルコ 4 章 20 節](#)；[ルカ 8 章 8 節](#), [19 章 11-27 節](#))。

イエス・キリストは相続者であり、初めの契約のもとで犯された罪のために死なれ([ヘブル 9 章 15 節](#))、そのことによって、新しい契約、すなわち私たちの相続の根拠となる遺言書([ローマ 3 章 25 節](#)；参照：[黙示録 21 章 5 節](#))が与えられることを可能にされました。主はご自身の血、すなわち十字架におけるご自身の霊的な死によって、私たちを買い取ってご自分のものとしてくださいました([第一ペテロ 1 章 18-19 節](#))。したがって、私たちは主の嗣業(相続財産)なのです([黙示録 5 章 9 節](#))。そして、主に属する者として、私たちは主が持っておられるすべてのものを、主とともに受け継ぐ共同の相続人となります。これが私たちの希望です。すなわち、神ご自身が誓いをもって保証しておられるこれらの約束([ヘブル 6 章 16-17 節](#), [7 章 20-21 節](#), [7 章 28 節](#))が、神の時に、私たちが復活し、栄光のうちに戻られる主イエスとお会いするときに、確実に私たちのものとなるという、確かな確信です。この約束、この一連の約束が必ず成就することを、私たちは信仰によって受け入れ、確認します([ヘブル 11 章 1 節](#), [11 章 6 節](#))。そしてその希望、すなわち望まれている事柄のすべては、適切な時に成就します。それは、私たちのために主がすべてを可能にするために、ちょうどよい時に死んでくださったことと同じです([ローマ 5 章 6 節](#))。これが新約聖書(New Testament)が意味するところです。すなわち、イエス・キリストに属するすべての者に対しての、永遠のいのちと永遠の報いの約束を含む、破られることのない契約・遺言書であり、それは、私たちがその相続人であり、同時に主がご自分の相続財産としてくださった存在であるそのお方の血によって、確定されたものなのです([エペソ 1 章 7 節](#)；[コロサイ 1 章 14 節](#)；[ヘブル 9 章 12 節](#)；[第一ペテロ 1 章 18-19 節](#))。

そしてこの理由のために、彼は**新しい契約**の仲介者なのです。それは、召された人たちが、旧い契約のもとでの罪を贖うために彼が受けられた死にもとづいて、**永遠の相続財産**を受けることができるようになるためです。(ヘブル 9 章 15 節/NKJV 訳)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

(20)永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引き上げられた平和の神が、(21)イエス・キリストによって、みこころにかなうことをわたしたちにして下さり、あなたがたが御旨を行うために、すべての良きものを備えて下さるようにこい願う。栄光が、世々限りなく神にあるように、アメン。(ヘブル 13 章 20-21 節)

なぜなら、私たちの主は、私たちを御自分の嗣業として確証するために死なれただけでなく、再び命を取られて、御自分の花嫁として私たちを受け入れるため、すなわち主ご自身の永遠の嗣業(相続財産)として受け入れるためでもあったからです(マタイ 9 章 15 節, 25 章 1-13 節; マルコ 2 章 19 節; ルカ 5 章 34 節; ヨハネ 3 章 29 節; 第一コリント 15 章 23 節; 第二コリント 11 章 2-3 節; エペソ 1 章 22-23 節, 5 章 25-27 節; 黙示録 19 章 7-9 節, 21 章 2-4 節, 21 章 9-27 節, 22 章 17 節)。

(17)父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。(18)だけれど、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受け取る力もある。これはわたしの父から授かった定めである」。(ヨハネ 10 章 17-18 節)

したがって、ヘブル 1 章 2 節のこの部分は、イエス・キリストのユニークな人性を強調しています。相続は本質的に人間に関わる事柄であり、それは相続の基盤となる契約を有効にする出来事、つまり死の原理から切り離すことができません。人類の歴史の中で唯一、イエスは、他のどんなものよりも優れた相続、すなわち永遠のいのちを私たちに与えるために死なれただけでなく、神の子として、また相続人として(マタイ 21 章 38 節; マルコ 12 章 7 節; ルカ 20 章 13-14 節)、多くの兄弟たちの中で最初に生まれた方となるために(ローマ 8 章 29 節)、すなわち御自身のからだである教会のかしら、花嫁、そして御自身の相続財産となる者となるために(第一コリント 11 章 3 節; エペソ 4 章 15 節; コロサイ 1 章 18 節; 2 章 10 節, 2 章 19 節; 黙示 21 章 9 節)、命を再び取り戻されたのです。

(16)御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さい。(17)もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと**共同の相続人**なのである。(ローマ 8 章 16-17 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

イエス・キリストが真の人間であられたからこそ、このような関係が主と私たちの間に成り立つのです(参照、[ヘブル 2 章 11-15 節](#))。キリストが相続人であること、そして私たちが主とともに共同の相続人であることは、イエスの人間性の真実性とその唯一性を証明しているのです。

(14)このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

御子によって世界を創造された：パウロの語ることを聞く人—あるいは今日聖書を読む人—で、イエス・キリストの神性について何か疑いを持っていた(持っている)者は、この言葉によって完全にその疑いを取り除かれるべきです。宇宙を創造できるのは、神だけだからです。三位一体において、御父は計画する方であり、御霊はその計画に力を与える方であり、御子はそれを実行する方です。だからこそ、パウロがここで語る[御父が]**この方を通して**創造を行われたという表現の意味が説明されます。

すべてのものは、**これ**(すなわち「ことば」、イエス・キリスト)**によって**できた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(ヨハネ 1 章 3 節)

彼は世にいた。そして、世は**彼によって**できたのであるが、世は彼を知らずにいた。(ヨハネ 1 章 10 節)

しかし、私たちにとっては、一人の神である父がおられ、すべてのものはこの方から[存在するようになり]、私たちはこの方のために[今、生きています]。そして、一人の主であるイエス・キリストがおられ、すべてのものは**この方を通して**[存在するようになり]、私たちはこの方を通して[今、生きています]。(第一コリント 8 章 6 節/NKJV)

(15)御子[イエス・キリストは]は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。(16)万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、**御子によって**造られ、御子のために造られたのである。(17)彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(コロサイ 1 章 15-17 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

さらに、「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、**み手のわざ**である。(ヘブル 1 章 10 節)

2 節で「宇宙」と訳されている語句は、ギリシヤ語では トゥース・アイオーナス(tous aionas) で、しばしば「時代(ages)」と訳されます。ここに、ギリシヤ語と英語の表現方法の主な違いが見られます。つまり、第四の次元である時間がなければ物理的な宇宙は成り立たず、また、時間が流れるための物理的宇宙がなければ時間も存在しません。英語は後者に(「宇宙」は物理的であることに)焦点を当て、ギリシヤ語は前者に(「時代」は時間的であることに)焦点を当てています。しかし、「宇宙」も「時代」も実際には同じことを表しており、それは空間と時間(時空)であり、神によって造られたものです。神は空間と時間の外に存在され、神は私たち被造物が存在するための場として、この時空を造られたのです。

宇宙、時代、時空とは、神があらかじめ定められたご計画が展開されている場であり、そこではこれまで起こったすべての出来事、そしてこれから起こるすべての出来事が、やがて「世々の世」に至るまで成就していきます([ガラテヤ 1 章 5 節](#); [ピリピ 4 章 20 節](#); [第一テモテ 1 章 17 節](#); [第二テモテ 4 章 18 節](#); [ヘブル 13 章 21 節](#); [第一ペテロ 4 章 11 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#), [1 章 18 節](#), [4 章 9 節](#), [4 章 10 節](#), [5 章 13 節](#), [5 章 14 節](#), [7 章 12 節](#), [10 章 6 節](#), [11 章 15 節](#), [15 章 7 節](#), [19 章 3 節](#), [20 章 10 節](#), [22 章 5 節](#))。つまり、私たちが知っている時間、すなわち天使と人間の歴史(天使の前史に、人間の歴史の七千年の日々が加えられ、補われ、完成するもの)が、その歩みを終え、永遠が(すなわち「世々の世が」)、歴史(連続して定められた時間)に取って代わり、永遠に続く変わらない祝福の状態になるということです。([黙示録 21 章 25 節](#), [22 章 5 節](#))。

時間の存在しない「永遠」が、イエス・キリストに属する私たちにとって実際にどのようなものになるのかは、今の時点では知ることができません「時代」に相当するヘブル語が「オーラム(‘olam)」であり、「アーラム(‘alam)」から来て「隠された、秘密の、神秘的な、知られていない」という意味をもつことは、決して偶然ではないでしょう。永遠における神のご計画は、ちょうど今、神ご自身が私たちからご自分を覆い隠しておられるのと同じように、現時点では私たちに対して覆われているのです([出エジプト記 33 章 20 節](#); [ヨハネ 1 章 18 節](#); [第一テモテ 6 章 16 節](#); 参照: [詩篇 10 章 1 節](#); [箴言 25 章 2 節](#); [イザヤ 45 章 15 節](#))。今の時点では私たちには覆い隠されているのです。確かに、今の私たち人間は大きな限界を持った被造物であるため、多くのことをまだ知ることにはできません([第一コリント 2 章 7 節](#); [エペソ 3 章 9 節](#); 参照: [ヘブル 9 章 26 節](#); [ユダ 1 章 25 節](#))。私たちが今見ているのは、祝福された未来のほんのかすかな一端

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

二節

にすぎず、「鏡におぼろげに映る」程度です。しかしこれらの神秘は、私たちが復活を迎えた後には明らかにされ、私たちが知られているように、私たち自身も知るようになるのです([第一コリント 13 章 12 節](#))。その間、私たちがその方のために造られ、またその方によって造られた御子を([コロサイ 1 章 16 節](#))示していただいています。

神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 18 節)

グノーシス主義者たちは、実在しないアイオーン(天使や半神など)を、ある時は礼拝し、またある時は彼らと戦っていると、自分たちで思い込んでいました([第二ペテロ 2 章 10 節後半-12 節](#); [ユダ 1 章 8-10 節前半](#))。しかし、本当の「アイオーン」、すなわち宇宙の「時代」と、その中で起こるすべての出来事は、父なる神がイエス・キリストを通して創造されたのです。時空のすべてを御手の中に保っておられる方、つまり万物がその方のうちにのみ存在しているという方です([コロサイ 1 章 17 節](#))。そして神のご計画が、イエス・キリストによってすべて成し遂げられた後には、神が「すべてにおいてすべて」となられるとき([第一コリント 15 章 28 節](#); [第一コリント 12 章 6 節](#); [エペソ 1 章 23 節](#))、すべてのものが新しくされるのです。

(6) [神は]キリスト・イエスにあつて、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。(7)それは、キリスト・イエスにあつてわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。(エペソ 2 章 6-7 節)

(1)わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。(2)また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。(3)また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、(4)人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。**先のものが、すでに過ぎ去ったからである**」。(5)すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、**わたしはすべてのものを新たにする**」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである」。(黙示録 21 章 1-5 節)

三節

彼は、父の栄光の輝きであり、その本質の正確なかたちであり、神として大能のことばによって宇宙を保っておられる方です。人として私たちの罪のきよめを成し終えて、高い所におられる大いなる方の右の座に着かれました。(ヘブル 1 章 3 節/NKJV)

彼は：

パウロが 1 節と 2 節で述べたことは、創造から十字架と復活に至る主イエスの全体を、過去にさかのぼって示し、それによって教会時代の現在の現実——エルサレム教会が意図的に無視していた祝福に満ちた新しい現実——を説明するための土台を築くものでした。パウロは、十字架の後、御霊が与えられた今の時代において事柄がどのようにになっているのか、天におけるメシヤの現在の位置と、地上でなお戦い続けている私たちに、そのことが何を意味するのかに焦点を当てて説明し始めます。受肉以来、イエス・キリストは私たちの罪から救うために真の人間性をとられたので、人でもあられます([ヨハネ 3 章 16 節](#))。しかし、イエスはいつでも神であられました。ところが、伝統的なユダヤ教はメシヤについてこの事実を認めておらず、そしてどうやらエルサレム教会も同じ点で苦しんでいたようです。

(1) 言(ことば) [イエス・キリスト] は初めから存在しておられた。そして、言は神 [父なる神] とともにおられた。言は神であった。(2) この方は初めから神と相互の交わりの中におられた。(3) すべてのものはこの方によって造られた。この方によらずに造られたものは一つもなかった。(ヨハネ 1 章 1-3 節/NKJV 訳)

わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。(ヨハネ 6 章 38 節)

わたしと父とは一つである。(ヨハネ 10 章 30 節)

十字架の前から、イエス・キリストはいつも神であり、父が神であるように、また御霊が神であるように、まことの神でした。三位一体の古典的な定義は真実であり、聖書全体に示されています。神は位格においては三つであり、本質においては一つです。¹⁸ 父、子、聖霊はすべて神であり、父、子、聖霊はそれぞれが独自の、固有の、別個の

¹⁸ 聖書の基礎 1: [「神について」II「神の位格:三位一体」](#)を参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

位格です。この世界が創造される前、時空の外側で、これがどのような「あり方」であるのかは、私たちには知ることができません。なぜなら神は創造をしなければならなかったわけではなく、ただ私たちを愛されたゆえに創造されたのであり([ヨハネ 3 章 16 節](#))、また私たちは時空に制限された被造物であり、復活まで隠されている驚くべき事柄を、まだ知らされていないからです。しかし、私たちはこの世界での神の働きを通して、神がどのようなお方であるかを見ます。そして、イエス・キリストというお方を通して、父がどのようなお方であるかを見ます。

イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。(ヨハネ 14 章 9 節前半)

いまや三位一体の第二位格である、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストは、受肉によってまことの人間とされました——そして、それによって神であることが少しも減らされてはいません。この結果として、律法の影は取り除かれ、私たちはもう何の覆いもなく、イエス・キリストのうちにある神の御顔を見つめるのです。

(12) こうした(霊の働きによって与えられる支えに基づく確かな)望みをいだい
ているので、わたしたちは思いきって大胆に語り、(13)そしてモーセが、消え去
っていくものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけた
ようなことはしない。(14)実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、
彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られない(ほんとうの
栄光を隠す)ままに残っている。それは、キリストにあってはじめて取り除かれる
のである。(15)今日に至るもなお、モーセの書が朗読されるたびに、おおいが彼
らの心にかかっている。(16)しかし主に向く時には、そのおおいを取り除かれる。
(第二コリント 3 章 12-16 節)

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の
栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。
(第二コリント 4 章 6 節)

イエス・キリストはまことに神であり、昔からずっと神であられます([イザヤ 9 章 6 節](#);
[40 章 3 節](#); [ローマ 1 章 4 節](#); [マタイ 1 章 23 節](#), [22 章 41-46 節](#), [28 章 19 節](#); [ルカ 1 章 35 節](#), [5 章 20-21 節](#); [ヨハネ 1 章 1-18 節](#), [5 章 18 節](#); [ローマ 9 章 3-5 節](#); [ピリピ 2 章 5-8 節](#); [コロサイ 1 章 15-20 節](#), [2 章 9 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#);
[第二ペテロ 1 章 1 節](#); [第一ヨハネ 5 章 20 節](#); [黙示録 22 章 13 節](#), [22 章 16 節](#))。イ

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

イエス・キリストはまことに人間であり、受肉以来そうであられます([ルカ 22 章 19 節](#); [第一コリント 10 章 16-17 節](#); [エペソ 2 章 14-16 節](#); [コロサイ 1 章 21-22 節](#), [2 章 9 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#), [7 章 27 節](#), [10 章 5-10 節](#); [第一ペテロ 2 章 24 節](#))。したがってイエス・キリストはまことに唯一無二のお方であり——この世界を救うために来られた神と人であられるお方であり、この世界を救うことの**できる**唯一のお方なのです。¹⁹

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3 章 16 節)

栄光の輝き：

聖書における「栄光」という言葉は、その「栄光」を持つものの内側にある現実が表に現れることを示すために、さまざまな意味で使われます。それは、人間の栄光のようなものもあれば、ここで扱われているように、人間が近づけない神の栄光のような場合もあります。パウロが 3 節で使っているギリシヤ語の「栄光」は、聖書で通常使われるドクサ(δόξα / dóxa) という語で、古典ギリシヤ語では「評判」という意味を持ちます(ヘブル語の一般的な語は カーボド cabhódh で、文字どおりには「重さ」を意味し、重みある重要性を表します)。聖書では、「栄光」と「光」はほぼ同義として扱われることが多く([第一テモテ 6 章 16 節](#); [第一ヨハネ 1 章 5 節](#); 参照:[ダニエル 2 章 22 節](#); [ヤコブ 1 章 17 節](#))、人間の肉体の目で父なる神のまばゆい栄光そのものを見た者はいません。しかし、イエス・キリストはその人としての身体において、この栄光を私たちに示す方です。御子は神としてこの栄光を持ち、父の栄光をその存在すべてにおいて、そして私たちのためにしてくださったすべてのことを通して、完全に映し出しています。

(6)わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名を**あらわしました**。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。(7)いま彼らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものであることを知りました。(8)なぜなら、わたしは**あなたからいただいた言葉**を彼らに与え、そして彼らはそれを受け、**わたしがあなたから出たものであることを**ほんとうに知り、また、**あなたがわたしをつかわされたこと**を信じるに至ったからです。(ヨハネ 17 章 6-8 節)(参照:[ヨハネ 3 章 34 節](#), [4 章 34 節](#), [5 章 23-24 節](#), [5 章 30 節](#), [5 章 36-38 節](#), [6 章 29 節](#), [6 章 38-39 節](#), [6 章 44 節](#), [6 章 57 節](#), [7 章 16 節](#), [7 章 18 節](#), [7 章 28-29 節](#), [7 章 33 節](#), [8 章 16 節](#), [8](#)

¹⁹ 聖書の基礎 4A:「[イエス・キリストについての研究](#)」I.2.a.「[キリストが真の人間性を帯びることは、私たちに救いを与えるために必要でした](#)」を参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

[章 18 節](#), [8 章 26 節](#), [8 章 29 節](#), [8 章 42 節](#), [9 章 4 節](#), [10 章 36 節](#), [11 章 42 節](#), [12 章 4-45 節](#), [12 章 49 節](#), [13 章 20 節](#), [14 章 24 節](#), [15 章 21 節](#), [16 章 5 節](#), [17 章 3 節](#), [17 章 8 節](#), [17 章 18 節](#), [17 章 21 節](#), [17 章 23 節](#), [17 章 25 節](#), [20 章 21 節](#)

イエス・キリストは永遠の昔から神であり、父と聖霊と同じ神の本質を持っています。しかし、神のご計画を成し遂げるために、イエス・キリストは父によってこの世に遣わされました(上の引用聖句が明確に示すとおり)。その目的は、神の御心、すなわち救いの計画を完成させることにありました。この救いこそが、世界が造られた根本の目的です。遣わされた方として、イエス・キリストは神の栄光をこの世界に示す唯一の方です。実際、私たちが神について知ることができるのは、見えない聖霊の働きによってであり、聖霊はイエスが語り、行われたことを通して、ロゴスである御子を私たちに示してください。

すべての事は父からわたしに任せられています。そして、子を知る者は父のほかにはなく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子を選んだ者とのほかに、だれもありません。(マタイ 11 章 27 節)

神を見た者はまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 18 節)

光り輝く方、すなわち神の栄光を私たちのために映し出してくださるお方として、私たちが父について、またあらゆる真理について知るための唯一の道は、主イエス・キリストです。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

三位一体のうちでご自身を現された方として、勝利を得て神のご計画を実行しておられる方であるイエス・キリストは、誰もその完全な栄光の現れの中で見たことがない父の、まさにその「輝きの現れ」なのです。(出エジプト 33 章 20 節; ヨハネ 1 章 9 節, 6 章 46 節; 第一テモテ 6 章 16 節; 第一ヨハネ 4 章 12 節, 20 節; 参照: コロサイ 1 章 15 節)。

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

父の栄光と愛を、その人生と教えと、私たちのための犠牲を通して表すことによって、イエス・キリストは父を私たちに示してくださいます。イエス・キリストはまさにその「栄光の輝き」であり、父がどれほど良いお方であるか、どれほど私たちを愛しておられるかを示す方です。父はご自分のひとり子をこの世に遣わし、私たちがその御子を通して生きるようにしてくださったのです。

[父なる神の]本質の正確なかたち：

パウロがここで用いている表現は、イエスが父ではないにしても、父が神であるようにイエスも神である、ということを具体的に示すためのものです。言い換えれば、三位一体が多くの信者に十分理解されていなかった状況と、エルサレムの不信者たちがこの教えを受け入れていなかった状況の中で、パウロはこの両方の点を明確に述べる必要があったのです。²⁰

ここで「正確なかたち」と訳されるギリシヤ語は カラクテール(charaktēr) で、英語の「character(キャラクター)」の元になった語です。この語は、動詞 カラッソー(charassō) に由来し、専門的な意味では「刻む」「彫りつける」ことで、特に硬貨に刻まれた像を指します。したがってギリシヤ語の「カラクテール」は、しっかりした、はっきりと見える、そして本質的に変わることのない表現という意味を持ちます。劇の世界でも、硬貨に刻まれた像が人物を示すのと同じように、「キャラクター」は特徴が明確で変わらない登場人物を指しました。そして今日でも文学で同じように使われています。そうした意味で、神の「キャラクター(本質)」に関して言えば、イエスと父は同じであり、また御霊とも同じで、三位一体の三位は同じ神の本質を共有しているのです。

イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。(ヨハネ 14 章 9 節前半)

パウロが「その本質の正確なかたち」と述べるのは、神は本質において霊であり三位一体である一方、イエスは受肉によって本物の人間にもなられ([ヘブル 2 章 14 節](#))、しかしなお神でもあられるという事実を示すためです。このためパウロは、子と父の違

²⁰ ここで「本質」と訳されている語 ヒュポスタシς(ὑπόστασις/hypóstasis) は、他の箇所ではパウロによって「確信」という意味でのみ使われています([第二コリント 9 章 4 節](#), [11 章 17 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#), [11 章 1 節](#))。しかし語源的には「下に立つ」という意味で、そこから「土台／基礎」という意味を持つようになり、その結果として、物事の 本質的な存在、つまり「本質」を表す語として一般的に用いられました。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

いを、実質的な意味でこのように説明します。すなわち、イエスは人として現れたことによって、誰にも見ることのできない神の本質と性質を、目に見える「刻印」のように表示しておられるのです。もしイエスが人であり同時に神でもなければ、このように神の本質を人間として完全に表すことは不可能です。私たちの肉の目には、父なる神も、御霊も、イエスの神としての本質そのものも見ることができません。しかし、イエスの人としての姿・言葉・行いによって、私たちは神を見ています。天の父をまだ直接見ることはできなくても、御子のうちに、その「正確な刻印」を見ることができるのです([第二コリント 4章6節](#))。

(1)初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について—— (2)このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである——(第一ヨハネ 1 章 1-2 節)

私たちはユリウス・カエサルを直に見たことはありませんが、硬貨の像から、彼の人物像(キャラクター)を知ることができます。同じように、天の父をまだ顔と顔を合わせて見ることはできませんが、その「正確な刻印」を御子のうちに見ることができます。イエス・キリストは神であり、今は真の人間でもあり、その人性の中に父の本質の刻印を宿し、言葉と行いのすべてにおいて、父の完全な神の性質を表しておられます。

(15) [イエス・キリスト]は見えない神の**正確なかたち**であり、すべての創造物に**先立つ長子**です。(コロサイ 1 章 15 節/NKJV)²¹

キリストにこそ、満ちみちている**いっさいの神の徳が、かたちをとって宿**っており、(コロサイ 2 章 9 節)

イエスが神であり、かつ神の「正確なかたち」であるためには、人にもなれる必要がありました。そうして人となられたキリストは、その人性を通して父の神性を完全に映し出し、父の恵み・あわれみ・真理を一点のずれもなく表し示されたのです。

²¹ 上のコロサイ 1 章 15 節で「正確なかたち」と訳されている語は、ギリシヤ語の **Εἰκὼν** (eikōn) です。この語は、本物とまったく同じという意味を表す語であり、そのことはヘブル書での用例からも明らかです。「というのも、律法は、将来の良いものの影であって、事物そのものの正確なかたち(Εἰκὼν eikōn)ではないからです」(ヘブル 10 章 1 節 NKJV)

すべてのもの(宇宙)を保ち支えておられる方：

私たちの主が「すべてのもの」を保ち、支え、維持しておられる手段は、「力あるみことば」だと述べられています。これは、みことばそのもの、すなわちロゴスであるお方の全能を示しています。また、この表現は、神の真理そのもの——神のことば——に内在する力を思い起こさせます。私たちは、そのみことば(福音)によって、またそのみことばであるお方(イエス・キリスト)によって、救われているのです。

しかし、主の言葉は、とこしえに残る」。これが、あなたがたに宣べ伝えられた御言葉(直訳「福音として与えられたみことば」)である。(第一ペテロ 1 章 25 節)

「すべてのもの」という語はギリシヤ語で タ・パンタ(ta *pan* ta) であり、(パンデミック *pan* demic が「すべての人々に及ぶ」という意味を持つのと同様に)ギリシヤ文学では宇宙全体、すなわち時間と空間の総体を表す標準的な言い方です。これは 2 節で説明した トゥース・アイオーナス(tous aionas: 諸々の時代=宇宙) とほぼ同義です。2 節において、父なる神が、創造の計画者として、イエス・キリストを通して宇宙を創造されたことを見ました。イエスは創造の「働き手」であり、御霊はその力をもたらされた方です。ここで心に留めるべき非常に驚くべき事実は、創造は、創造された瞬間だけでなく、今この時も、造られた方ご自身によって支え続けられているということです。もし主がこの宇宙を支えることを止められたなら、宇宙は一瞬で存在を失うでしょう。すべてのものは、主の内にあり、主によって存在を保っています。これは時間の始まりから今に至るまで真実であり、さらには、主が十字架にかけられ、人々に嘲られていたその時ですら真実でした。主を嘲った者たちは、主がご自身の神性によって彼らを支えておられたがゆえに、その瞬間もなお存在していたのです([ヘブル 1 章 2 節](#), [10 節](#); [2 章 10 節](#); 参照:[ヨハネ 1 章 3 節](#), [10 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#))。

(16)万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子(イエス・キリスト)にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17) 彼は万物よりも先にあり、**万物は彼にあって成り立っている**。(コロサイ 1 章 16-17 節)

私たちの罪のきよめを成し遂げられた：

パウロは、主イエスが宇宙を創造し、それを保ち支えておられる方であるという本質的な役割を、すでに読者に告げていましたが、ここでは同じように、イエスこそがすべての人に救いを与えられた方であることを思い起こさせます([ヨハネ 3 章 16-17 節](#), [12](#)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

[章 47 節](#))。創造とその維持は、キリストの神性によって成し遂げられましたが、救いを与えることができるのは真の人間だけでした。なぜなら、罪を負い、罪のために死ぬことができるのは、人間だけだからです。この救いの使命は、主が再び父のもとに上られる前に、完全に成し遂げられました。こうして、主に信頼しようとするすべての者に、永遠のいのちへの門が開かれたのです([マタイ 7 章 7-8 節](#); [ルカ 11 章 9-10 節](#), [13 章 24-25 節](#); [第一コリント 16 章 9 節](#); [第二コリント 2 章 12 節](#); [コロサイ 4 章 3 節](#); [黙示録 3 章 8 節](#), [20 節](#); 比較:[マタイ 23 章 13 節](#), [25 章 10 節](#))。

わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。(ヨハネ 10 章 9 節)

救いは、歴史全体の中で最大の出来事です。神の視点からすれば、救いこそが歴史なのです。というのも、救いとは、永遠の昔にサタンによって始められた、神と光の勢力に対する闇の勢力の戦いにおいて、神が決定的な勝利を収める出来事だからです。そしてこの戦いは、神のかたちに造られ、永遠の運命を自ら選ぶ自由意志を持つ被造物が造られるのであれば、必然的に生じるものでした。それこそが創造の目的だからです。この戦いは、主イエスがご自身のいのちを私たちのために差し出された十字架によって、すでに完全に勝利しています。救いは、創造の目的であり、その中心となる出来事として、十字架によって成し遂げられたのです。

そして、もろもろの支配と権威との武装(悪霊の勢力)を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(コロサイ 2 章 15 節)

救いは、宇宙全体の歴史の中心にある出来事です。救いには多くの側面があり、パウロはここでも言及することができました(その多くを彼はこの後の章で扱います)²²。しかし、今この場面では、御霊によって導かれ、パウロは罪とそのきよめという問題に焦点を当てています。なぜなら、罪こそが問題だからです。救われるためには、罪という壁が取り除かれなければなりません。その除去は、受け入れられる犠牲によるしかありません。したがって、「きよめ」という言葉は、キリストが十字架で私たちのすべての罪を贖い、その罰を完全に支払われたことを指す、救い全体を表す簡潔な表現でもあります。この救いの成就是、聖書でしばしば「キリストの血」と呼ばれています([第一コリント 10 章 16 節](#); [エペソ 2 章 13 節](#); [ヘブル 9 章 14 節](#); [第一ペテロ 1 章 19 節](#); 比較:[ロ](#)

²² とくに、BB 4A「キリストについての研究」第 II 部「[イエス・キリストの救いの御業](#)」、そして BB 4B「救済論」第 III 部「救われるとはどういうことか」を参照してください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

[一マ 3 章 25 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#))。この「血」は文字どおりの血ではなく、旧約の動物のいけにえが象徴していたこと——すなわち、「神の小羊」であるキリストが、十字架の三時間の暗闇の中で、罪の全ての罰を受けられたという実際の犠牲——を表す聖書の言い方です。これは、イエスが息を引き取られる**前に**成し遂げられた霊的な死です。²³

(28) **そののち**(すなわち肉体の苦しみと、世の罪のための霊的死の後)、イエスは **今や万事が終ったこと**を知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書が全うされるためであった。(29)そこに、酢いぶどう酒がいっぱい入れている器が置いてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した。(30)すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「**すべてが終った**(すなわち救いが成就した)」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 28-30 節)

また愛のうちに歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばんしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。(エペソ 5 章 2 節)

(18)あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊の**ような**キリストの尊い血によったのである。(第一ペテロ 1 章 18-19 節)

大声で叫んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。(黙示録 5 章 12 節)

一方で、罪をきよめるための儀式という聖書の**比喩**は、まさにパウロの読者が思い起こす必要のあったものでした。というのも、彼らは実際に動物の犠牲をささげ、血を流す儀式を続けていたからです。しかし彼らは、罪からの**真**のきよめは、それらの儀式には全く関係がないことを忘れていたのです。その儀式は、主が彼らのために成し遂げられた偉大な救いを象徴する「影」でしかなく、それを続けることによって彼らは、実体であるキリストを軽んじてしまっていたのです。

²³ とくに聖書の基礎 4A: [「キリストについての研究」II.4.「キリストの血」、および II.5.「キリストの霊的死」](#)を参照。主が失血死したのではないため、聖書が「キリストの血」と言うときに文字どおりの血を指していないことは、ヨハネ福音書の記録によって明確に示されています([ヨハネ 19 章 33-35 節](#); なおギリシヤ語原文による[第一ヨハネ 5 章 6-8 節](#)参照)。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

律法が肉(罪深い人間性)により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子(キリスト)を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。(ローマ 8 章 3 節)

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかた(キリスト)を罪(罪のささげ物)とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある(申命記 21 章 23 節)。(ガラテヤ 3 章 13 節)

わたしたちは、御子(キリスト)にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。(エペソ 1 章 7 節)

わたしたちは、この御子(キリスト)によってあがない、すなわち、罪のゆるし(すなわち、救い)を受けているのである。(コロサイ 1 章 14 節)

(13)あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。(14)神は、わたしたちを責めて[主との関係において]不利におとしいれる証書(罪の性質と個々の罪)を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。(コロサイ 2 章 13-14 節)

このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法(罪:参照 [第一ヨハネ 3 章 4 節](#))からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。(テトス 2 章 14 節)

[御父の]この御旨に基きただ一度イエス・キリストのからださがさげられたことによって、わたしたちはきよめられたのである。(ヘブル 10 章 10 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物(すなわち、神へのなだめ)である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。(第一ヨハネ 2 章 2 節)

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物(文字どおり「なだめ」、すなわち神の正義に対する贖い)、として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。(第一ヨハネ 4 章 10 節)

大いなる方の右の座に着かれた：

ギリシヤ語の本文では、「座に着かれた」が主動詞であり、それ以前の内容は分詞で表されています(英語では好まれません、ギリシヤ語ではごく普通で、むしろ高度な書き方です)。「～である(being)」「～を保つ(sustaining)」は現在分詞で、永続した状態を示します。「成し終えて(having accomplished)」はアオリスト分詞で、主動詞より前に完了している出来事を表します。つまり、救いの勝利は、私たちの主が復活して父のもとに上げられる前に、すでに達成されていたということです。イエスは常に神であられました(「～である」「～を保つ」)。しかし、私たちの罪を負うためには、まことの人間とならなければなりません。「私たちの罪のきよめを成し終えた」ことによって、その地上での使命は完了しました。そしてパウロは、読者が忘れかけていた事実を強調します。すなわち、父ご自身が、子の働きに満足し、その勝利を認められたということです。救いは成し遂げられ、勝利は獲得され、影のような旧い儀式は、今や父の右における子のまばゆい栄光によって抹消されたのです。

主(父)はわが主(イエス・キリスト)に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(詩篇 110 章 1 節)

(6)わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(7)小羊は進み出て、御座にいますかたの右の手から、巻物を受けとった。(黙示録 5 章 6-7 節)

神であるイエスは、天地が造られる前から、常に父のともにおられました([ヨハネ 1 章 1-2 節](#))。救いの計画を成し遂げるために、イエスは人となり、父によってこの世に遣わされ、十字架での死によって私たちの罪をきよめられました([ヨハネ 6 章 38 節](#), [17 章 6-8 節](#); [ガラテヤ 4 章 4 節](#))。そして、救いを完成された神人(神であり人であるお方)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

三節

イエス・キリストは、今や栄光のうちに父の右に着座(セッション)しておられます。父によるこの「座していなさい」という命令と栄光の回復は、主イエスの使命と勝利が完全に承認されたことを示すものです。その結果、キリストは「長子」であり([ヘブル 1 章 6 節](#), [12 章 23 節](#); [ローマ 8 章 29 節](#); [コロサイ 1 章 15 節](#), [18 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#))、この現在の戦いの場で勝利を得たことによって、すべてを裁き、すべてを支配する権利を得られたのです([ヨハネ 17 章 5 節](#), [12 章 28 節](#), [13 章 32 節](#); [16 章 14 節](#), [17 章 1 節](#))。

(5)キリスト・イエスにあっただけいっているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(6)キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、(7)かえって、[すでに持つておられたこの神としての同等の身分にもかかわらず、]おのれをむなうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(8)[私たち、すべての者のために]おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(9)それゆえに、**神は彼を<最も-NKJV>高く引き上げ**、すべての名にまさる名を彼に賜わった。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(ピリピ 2 章 5-11 節)

(12)しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、**神の右に座し**、(13)それから、敵をその足台とするときまで、待つておられる。

(1)こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつゝく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。(2)信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つゝ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわなないで十字架を忍び、**神の御座の右に座するに至った**のである。(3)あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。(ヘブル 12 章 1-3 節)

「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。(黙示録 5 章 5 節)

(9)彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、(10)わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(11)さらに見ていると、御座と生き物と長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、(12)大声で叫んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。(13)またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。(黙示録 5 章 9-13 節)

高い所におられる：

主の着座しておられる場所は、第三の天にある天の神殿の王座の間であり(上の箇所、また[ダニエル 7 章 9-14 節](#)；[黙示録 4 章 1-11 節](#)、[6 章 9 節](#)、[7 章 9 節](#)、[8 章 3-5 節](#)、[14 章 1-3 節](#)、[15 章 2-8 節](#)、[16 章 1 節](#)、[19 章 4-5 節](#)に記されている場所)、そこに主は昇られました([エペソ 4 章 8-10 節](#)；[ヘブル 4 章 14 節](#))。そしてその王座は御父のものであり、その形は戦車に似ていて、悪魔の反逆に対する神の戦いの姿勢を象徴しています²⁴。これまでに見てきたように、創造の初めには、神はまだ汚されていない地上で裁きを行っておられました²⁵。神が第三の天に退いておられるのは一時的であり、それは反逆する者たち——そして全宇宙そのもの——がすぐに、完全に、最終的に滅ぼされるのを防ぐために必要な退避です。神のご臨在は、反逆する者たちと共に留まることができないからです。

第二の来臨では、メシヤご自身を通しての、神の統治が地上に戻って来ます。メシヤは千年間統治されます。「なぜなら、キリストは、その敵をみなご自分の足の下に置くまで、支配しなければならないからです」([第一コリント 15 章 25 節](#))。これは、千年王国の終わりに反逆する者たちが滅ぼされることで成し遂げられ([黙示録 20 章 7-10 節](#))、そして現在の汚れた天と地は、すべての罪と悪の痕跡とともに完全に焼き尽くされます。その後、御父ご自身が新しい地に戻り、私たちと再び共に住まわれます。それは

²⁴ 「[来たる艱難期 \(Coming Tribulation\) 2B: 天における前奏曲 \(The Heavenly Prelude\)](#)」の「[御座 \(The Throne\)](#)」を参照。

²⁵ 「[サタンの反乱第一部: サタンの反逆と恩寵からの墮落](#)」II.6「[七つのエデン](#)」を参照。

究極のエデン、最後のパラダイスです([黙示録 21 章 3 節](#))。

それまでは、神の御計画は止まることなく、完全に前へと進んでいます。「高いところ」という言葉は、私たちが今起こっている戦いを見ることはできなくても、それを確かに経験していること、そして第三の天にある神の本部から、最終的な勝利へ向けて導かれていることを私たちに思い起こさせます。この完全な計画は、すでに見てきたように、三つの段階から成り立っています。そこでは、神の敵が裁かれ、彼らがもたらした損害がより良いものによって回復され、そして彼ら自身が二重に置き換えられて、神の永遠の栄光となるのです²⁶。

第Ⅰ段階：制定 (Constitution) : 永遠の勝利の基盤を築く段階(「多く」の段階)。

裁き I: 創世記の間のギャップ

回復 I: 再創造の七日間

置き換え I: 最初のアダムと最後のアダム

第Ⅱ段階：完成 (Completion) : 時間の中で永遠の目的が実現する段階(「さらに多く」の段階)。

裁き II: 艱難期

回復 II: 千年王国

置き換え II: 王なるキリストとその教会

第Ⅲ段階：成就 (Consummation) : 勝利がさらに上回る祝福で冠をかぶる段階(「最も多く」の段階)。

裁き III: 最後の裁き

回復 III: 新しい天と新しい地

置き換え III: 御父の到来

私たちの主が、天の「高いところ」(すなわち第三の天²⁷)にある父の王座の間で着座しておられることは、神の御計画の第一段階を完成させています。そこでは、サタンとその仲間たちが打ち負かされ、自由意志を用いて神の権威をイエス・キリストにおいて受け入れ、結果として永遠のいのちを得ようとする者たちによって置き換えられるのです。第一段階は、永遠の勝利の土台を築きました。

²⁶ [「聖書の基礎 2B: 終末論」I「人類史に対する神の計画」](#)を参照。

²⁷ [「サタンの反逆 第一部: サタンの反逆と恵みからの墮落」II.3「三つの天」](#)を参照。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

四節

すなわち、この世の現在の支配者(サタン)に代わる新しい支配者(イエス・キリスト)、現在の暗闇の王国([コロサイ 1 章 13 節](#))に代わる新しい王国(天の御国)、そして悪魔の天使の仲間たちに代わって王に仕える、キリストの血によって買い取られた新しい民([ヒリピ 3 章 20 節](#))を備えたのです。

第一段階の間、これらの置き換えは、実際には、二つの後の段階の成就を待つ「原則として」のものです。キリストはすでに栄光を受けていますが、まだ地上に戻ってその統治を開始してはいません。王国は、信者たちとキリストの霊の中に原則として([ルカ 17 章 21 節](#))すでにありますが、実際に働いてはいません([マタイ 11 章 12 節](#)参照)。そして教会は急速に完成へと近づいていますが、まだ復活してはいません。

第二段階の間、私たちの王であるキリストは再び来られ(再臨)、その王国を受け取られます([黙示録 11 章 15 節](#))。そして地上が経験してきた中でも最悪の七年間の艱難の後に、地上でこれまで見たことのない最も素晴らしい千年の時をもたらします。その間、教会(人類の最初の六日の歴史の間に呼び集められた信者のからだ)は復活し、キリストの千年の統治を共にするのです。その時が、まもなく来るのですが、その時まで私たちは地上でその祝福された望み([テトス 2 章 13 節](#))を待ち望み、主は「高いところ」で留まりつつ、艱難期の終わりに御父が敵を「御足の踏み台」とされる瞬間([詩篇 110 篇 1 節](#))を待っておられるのです。

(4)巻物を開いてそれを見るのにふさわしい者が見当らないので、わたしは激しく泣いていた。(5)すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。(黙示録 5 章 4-5 節)

四節

[そしてその着座(3 節)においてイエスは、][明らかに]御使いたちよりすぐれた方とされた。それは、御使いたちよりはるかに栄光ある名をその御相続[の一部]として、受けられたからである。(ヘブル 1 章 4 節/NKJV)

御使いたちよりすぐれた方：

天使たちは被造物です。²⁸ イエス・キリストは、そのご性質において神でられます。私たちの主が受肉において真の人間性を取られたことは、主を宇宙における唯一の位格、ただひとりの「神の人」とする結果をもたらしましたが、そのことで主の神性が何ら損なわれることは、どんな程度においてもありませんでした。しかし、第一の到来のとき、主の神性は、まだ栄光化されていない人間の肉に覆われていたため、外から見えるかたちでは、人の目に明らかではなかったことも事実です。

彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。
(イザヤ 53 章 2 節)

イエスのことばを聞いたことがなく、またその奇跡のわざを見たこともない人たち——あるいは真理に対して心をかたくなにした人たち——にとっては、経験的な見た目の観点から、主は天使たちより「劣っている」ように見えました。これは、私たち人間が皆そう見えるのと同じです([ヘブル 2 章 6-10 節](#))。復活後の主の現れにおいても、主が再び生きておられるという事実は否定できなかったものの、その神性は、まだ人間の目に現されていませんでした(比較箇所：[マタイ 28 章 9-10 節](#), [16-20 節](#); [ルカ 24 章 13-53 節](#); [ヨハネ 20 章 11-29 節](#), [21 章 1-19 節](#)と、[使徒行伝 9 章 3-5 節](#), [22 章 6-8 節](#), [26 章 13-15 節](#); [黙示録 1 章 10-20 節](#)の比較)。エルサレムの教会の中には(使徒以外にも)主が昇天される前の四十日の期間に、主を見た人が少しいた可能性があります([使徒行伝 1 章 3 節](#))、大多数は明らかにそうではありませんでした——そして、この手紙が届く三十年も前のことです。つまり、エルサレムの信者たちは、私たち全員が**信仰によって**そうするように、キリストの神性という重大な真理を受け入れなければなりませんでした。聖書はこの重要な真理について、何の疑いも残していません。しかし、この信者たちは、律法に結びついた伝統の影響を否定的に受けていました([イザヤ 29 章 13 節](#); [マタイ 15 章 9 節](#); [マルコ 7 章 7 節](#) 参照)。そこでは、メシヤが「神が人となられた方」ではなく、天使より少し下の「非常に特別な人間」にすぎないと誤って考えられていたのです(あるいは、グノーシス主義の視点では、より低い階級の天使の一つとみなされていました)。

この考えは明らかな異端であり、聖書に真っ向から反するもので、主ご自身が地上でこの点をはっきり示しておられました([ルカ 24 章 25-32 節](#); [ヨハネ 6 章 38-58 節](#), [7](#)

²⁸ 彼ら(天使たち)の本質についての詳細は、[BB 2A: Angelology I.「天使の目的・創造・本質」](#)を参照してください。

[章 29 節](#), [8 章 58 節](#), [10 章 30 節](#), [14 章 6 節](#), [17 章 24 節](#))。

(41) パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、(42) 「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。(43) イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。(44) すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。(45) このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。(46) イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。(マタイ 22 章 41-46 節)

今日の「生ぬるい」クリスチャンが聖書をよく知らず、基本的な教理の訓練も受けていないために、「様々な教え」に吹きまわされやすいのと同じように([エペソ 4 章 14 節](#))、エルサレムの信徒たちも、律法主義とグノーシス主義が混ざった環境の中で、真理から引き離されていました。

そのため、パウロがこれらの点を、強く、そして長く語る必要があったのです。今日の私たち信者は、天使が私たちの主よりすぐれているなどと考える誘惑を感じることはほとんどありませんが、当時のエルサレム教会では、そうではありませんでした。厳密な一神教的タルムード主義の観点からは、メシヤを人間以外と見ることに強い抵抗がありました。また、グノーシス主義の観点からは、イエスを多くのアイオン(aions)——あるいはより低い階級の天使——の一つと見て、神とは認めない傾向が強かったのです。こうした混合した宗教的考えは、多くの場合、弱く、未熟で、知識のない信者たちの心の中で同時に成立してしまうものでした。少なくとも、それらを危険な嘘として拒否することなく、あり得るものとして受け入れてしまうことは可能だったのです。しかしそれは、非常に危険で、最終的には維持することのできない霊的状态であり、背教の瀬戸際に立つものです([ヘブル 2 章 1-4 節](#)参照)。だからこそ、パウロはこの危険な偽りの教えに、正面から対処する必要があったのです。²⁹

²⁹ 律法主義とグノーシス主義は、どちらもその核心においてキリストの位格と御業への攻撃であるという共通点をもっています。パウロは、両方の誤謬による基本的真理の誤用について、タ・ストイケイ(τὰ στοιχεῖα / ta stoicheia)、「要素的原理」という語を用いています([ガラテヤ 4 章 3 節, 9 節](#); [コロサイ 2 章 8 節, 20 節](#); [第二ペテロ 3 章 10 節, 12 節](#))。ペテロ・シリーズ#39「偽教師、偽教え、偽組織」を参照してください。

よりはるかに栄光ある名：

「名」という語は、聖書において非常に重要な語です。人や物を識別するだけでなく、ヘブル語の シェム(שֵׁם/shem) とギリシヤ語の オノマ(ὄνομα/ónoma) は、英語の「ネーム=name」よりも深い意味で、その人や物の本質や実体を表すことがよくあります([使徒行伝 2 章 21 節](#), [38 節](#), [3 章 6 節](#), [16 節](#), [4 章 7 節](#), [10 節](#), [12 節](#), [17-18 節](#), [30 節](#), [5 章 28 節](#), [40-41 節](#) など)。

たとえば、私たちの主が[マタイ 28 章 19 節](#)で弟子たちに、彼らの回心者を[聖霊を通して]三位一体の「御名の中へ(into the name)」バプテスマするように語るとき、主は明らかに、水のバプテスマではなく、聖霊のバプテスマがもたらすキリストとの結合、そして、神全体との結合について語っておられます。それは、「～の中へ」を意味する前置詞 エイス(εἰς/eis) が、一つの場所から別の場所への根本的な移行を表していることから明らかです。新改訳IVは「において」、口語訳は「によって」→どちらも誤訳。この例では、新しい信者が「キリストの中へ」入れられること([ヨハネ 14 章 20 節](#), [15 章 1 節以降](#); [ローマ 16 章 7 節](#); [第二コリント 5 章 17 節](#); [エペソ 2 章 6 節](#), [10 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#); [第一ペテロ 5 章 14 節](#)) が、「三位一体の『御名の中へ』(すなわち、「その人格/諸位格の中へ」)バプテスマされる」と表現されているのです。

この文脈でのギリシヤ語 onoma(名前)という語を誤解し、それを(上からの／新しく生まれる時に起こる)根本的な変化を表すものではなく、単なる口にするべき式文の文句であると取り違えたことが、多くの個人・団体・神学をこの点において異端へつまづかせてきたことは、疑いないことです。³⁰ 父・子・聖霊の「名」とは、その名が表す人格／諸人格そのものです。人が「名の中へ」実際に置かれることはできません。しかし、聖書全体の確かな証言から、私たちが信じる時、聖霊が確かに私たちを「キリストの中へ置く」ので、以後私たちは絶えず「キリスト[との結合]の中に」ある者となることが分かっています([ローマ 3 章 24 節](#); [6 章 11 節](#), [23 節](#); [8 章 1 節](#), [2 節](#), [39 節](#); [9 章 1 節](#); [12 章 5 節](#); [14 章 14 節](#); [15 章 17 節](#); [16 章 2-3 節](#), [7-13 節](#), [22 節](#); [第一コリント 1 章 2 節](#), [4-5 節](#), [30 節](#); [3 章 1 節](#); [4 章 10 節](#), [15 節](#), [17 節](#); [7 章 22 節](#), [39 節](#); [9 章 1-2 節](#); [11 章 11 節](#); [15 章 18-19 節](#), [22 節](#), [31 節](#), [58 節](#); [16 章 19 節](#), [24 節](#); [第二コリント 1 章 19-20 節](#); [2 章 12 節](#), [14 節](#), [17 節](#); [3 章 14 節](#); [5 章 17 節](#), [21 節](#); [12 章 2 節](#), [19 節](#); [13 章 4 節](#); [ガラテヤ 1 章 22 節](#); [2 章 4 節](#), [17 節](#); [3 章 14 節](#), [26 節](#), [28 節](#); [5 章 6 節](#), [10 節](#); [エペソ 1 章 1 節](#), [3-4 節](#), [6-7 節](#), [10-13 節](#), [15 節](#), [20 節](#); [2 章 5-7 節](#), [10 節](#), [13 節](#), [15-16 節](#), [18 節](#), [21-22 節](#); [3 章 6 節](#), [11-12 節](#), [21 節](#); [4 章 1 節](#), [17 節](#), [21 節](#), [32 節](#); [5 章 8 節](#); [6 章 1 節](#), [10 節](#), [21 節](#); [ピリピ 1 章 1 節](#), [13-14 節](#),

³⁰ この主題は ichthys の多くの箇所でも扱われています。たとえば、[聖書の基礎 6B: エクレシオロギ一、第 II.C.3.b 節「水のパプテスマ」](#)を参照してください。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

四節

[26 節](#); [2 章 1 節](#), [19 節](#), [24 節](#), [29 節](#); [3 章 1 節](#), [3 節](#), [9 節](#), [14 節](#); [4 章 1-2 節](#), [7 節](#), [10 節](#), [19 節](#), [21 節](#); [コロサイ 1 章 2 節](#), [4 節](#), [14 節](#), [28 節](#); [2 章 3 節](#), [6-7 節](#), [10-12 節](#); [3 章 3 節](#); [4 章 7 節](#), [17 節](#); [第一テサロニケ 1 章 1 節](#); [第二テサロニケ 1 章 1 節](#), [12 節](#); [3 章 4 節](#), [12 節](#); [第一テモテ 1 章 14 節](#); [第二テモテ 1 章 9 節](#); [2 章 10 節](#); [3 章 12 節](#), [15 節](#); [ピレモン 1 章 8 節](#), [20 節](#), [23 節](#); [第一ペテロ 3 章 16 節](#); [5 章 10 節](#), [14 節](#); [第一ヨハネ 2 章 5-6 節](#), [24 節](#), [27-28 節](#); [3 章 6 節](#), [17 節](#), [24 節](#); [5 章 20 節](#); [黙示録 1 章 9 節](#); [14 章 13 節](#))。

ここで注目すべき結論は、私たちの主のよりすぐれた「名」は、どれほど尊い称号であっても、単なる称号以上のものだということです。むしろ、この「名」は、その名の背後におられるお方ご自身を表し、その名がもつ意味において、その名を帯びておられる方の栄光と誉れを示しています。称号のすぐれていることは、称号をお持ちの方がすぐれておられることを示しているにすぎません。

(9)それゆえに、神[御父]は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(ピリピ 2 章 9-11 節)(参照. [イザヤ 45 章 23 節](#); [ローマ 14 章 11 節](#))

父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。(ヨハネ 17 章 5 節)。

イエス・キリストは、受肉の前も後も、復活・昇天・着座・栄光化の前も後も、いつも神であります。主は本質的に、いつでも栄光に満ちておられました([ヨハネ 17 章 5 節](#))。主が着座され、その栄光を取り戻され、それが完全に明らかにされた後([ヨハネ 12 章 28 節](#); [13 章 32 節](#); [16 章 14 節](#); [17 章 1 節](#), [5 節](#))、私たちの主は、この被造世界において、ご自身の神性だけでなく人性においても栄光を受けられました。それは、「神のかたち」に造られ、永遠のあり方を選ぶ権利を与えられた被造物が、必然的に避けられなかった闘いにおいて、唯一の神・人である主が勝利されたからです([ヨハネ 4 章 23-24 節](#)参照)。父の右における栄光化によって、主は今や、実際にも、否定の余地なく、そしてはっきりと、天使たちよりもはるかに優れた方となりました——主の不変の神性が変化したからではなく、人性において受けられた栄光によって、その優越がすべての目に明らかとなったのです。そしてやがて、すべての者がそれを見ることになります([ピリピ 2 章 9-11 節](#); [イザヤ 45 章 23 節](#); [ローマ 14 章 11 節](#))。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

五節

わたしはあなたの聖なる宮にむかって伏し拝み、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、み名に感謝します。あなたは**そのみ名と、み言葉**をすべてのものにまさって高くされたからです。(詩篇 138 篇 2 節)

(22)父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。(23)それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。(ヨハネ 5 章 22-23 節)

イエス・キリストは ロゴス(λόγος/lógos)、すなわち神のみことばそのものです(ヨハネ 1 章 1 節; 黙示 19 章 13 節)。上の聖句が示すように、父は、すべての者が父を敬うのと同じように子、すなわち、ロゴス、神の言葉を敬い、礼拝することを喜ばれます。御子は唯一、御父に近づく道だからです(ヨハネ 14 章 6 節)。そして、御子の栄誉と栄光を強調するために、父は子に「すべての名にまさる名」をお与えになりました。それは、単に識別のための名称ではなく、主ご自身の本質、その栄光・力・威厳を内に含む名です——そしてその名とは、「(御)子」です。

五節

いったい、神は御使たちのだれに対して、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」(詩篇 2 章 7 節)と言い、さらにまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう」(サムエル記下 7 章 14 節)と言われたことがあるか。(ヘブル 1 章 5 節)

前の節でパウロは、私たちの主が「御使いたちよりも、はるかにすぐれた名を相続された分だけ、彼らにまさる者となられた」と主張しました。つまり、イエス・キリストが十字架での勝利によって得られた位・称号・地位——すなわち「子」という名——こそが、主があらゆる面で御使いにまさっておられることの証明なのです。この主張を受け入れるなら、誤って律法を解釈した者たち(メシヤを御使いより下の、人間にすぎない存在と見た)にも、またグノーシス派(イエスをただの天使・アイオーンと見て、神が人となった方とは見なさない)にも、その主張は完全に覆されます。イエスがまさに神の子であることを証明することは、そのまま、主が御使いに完全にまさる存在であることの証明になるのです。そしてパウロは、そのことを律法(旧約聖書)そのものから示そうとしています。

主が神の子として御使いにまさることの最初の二重の証拠は、[詩篇 2 篇 7 節](#)と[サム](#)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

五節

[エル記下 7 章 14 節](#)にあります。それぞれの箇所、父なる神ご自身が語っておられます。最初の引用ではメシヤに直接語りかけ、二つ目の引用ではメシヤについて語っています。どちらにおいても父はメシヤ——イエス——を「子」と呼ばれています。したがって、どちらの引用においても、メシヤであるキリストの優越性が確立されます。「子」という語は、神のご本質において父と同じレベルに置く称号であると、主イエスの時代の不信者たちすら理解していたからです。

(17)そこで、イエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。(18)このためにユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうと計るようになった。それは、イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を自分の父と呼んで、自分を神と等しいものとされたからである。(ヨハネ 5 章 17-18 節)

[ヘブル 1 章 5 節](#)の二つの引用においても、「今日わたしは**あなたを生んだ**」「わたしは彼の父となる」という言葉は、受肉によって神の子が人性を取られたというある特定の始まりがあったことを示しており、御子の神性と人性の両方を確立しています³¹。メシヤだけが神であり人となる方であり、メシヤだけが神でありながら人となられる方なのです。このように、旧約聖書自体が、注意深く読む者には、処女降誕以来「神性と人性の両性を一つの位格に持つ方」としての主を描き出しているのです——エルサレムの信者たちは明らかにそれに気づいていませんでしたが³²。

すでに「子」という称号が、父が与え得る最高の称号であることが示されましたから、律法を誤解して主に反対していた者たちも、また教会を混乱させていたグノーシス派の者たちも、この二つの引用に対しては反論の余地がほとんどありません。これらの引用は、メシヤの神性・人性・創造全体に対する優越を明確に示しているからです。実際、この同じ方法を、主ご自身も一世代前にパリサイ人たちに対して用いられました。

(41)パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、(42)「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。(43)イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じて

³¹ ヒュポスタシ的結合 (hypostatic union) という語は、受肉の働きを説明するために神学で伝統的に用いられてきた用語です。詳しくは、[聖書の基礎 4A:「イエス・キリストの研究」I.5.e.「ヒュポスタシ的結合とケノーシス」](#)をご参照ください。

³² 私たちの主の唯一無二性についての詳細は、前脚注のリンクに加えて、[聖書の基礎 4A:「イエス・キリストの研究」I.5.f.「受肉と処女降誕」](#)を参照されたい。また、[聖書の基礎 1:「神について」II.「神格の位格:三位一体」](#)も参照のこと。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

五節

キリストを主と呼んでいるのか。(44)すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。(45)このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。(46)イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。(マタイ 22 章 41-46 節) (参照、[マルコ 12 章 35-37 節](#); [ルカ 20 章 41-44 節](#))

旧約聖書では、詩篇 2 篇 7 節に見られるように、ダビデ(預言者として御霊に語られた者)がメシヤを「主」——神——と呼んでいます。これは、メシヤが神であり人であることの反論不可能な証拠です。「主」という称号は神性と優越性を表すものであり、メシヤがダビデの子孫であるためには人でなければならず、しかしダビデが彼を「わが主」と呼ぶためには神でなければならないからです。

同様に、[サムエル記下 7 章 14 節](#)の引用でも、父の唯一の独り子([ヨハネ 1 章 14 節](#), [18 節](#); [3 章 16 節](#), [18 節](#); [第一ヨハネ 4 章 9 節](#); [ヘブル 11 章 17 節](#)参照)と呼ばれ得るのはメシヤだけです。³³ したがって、「あなたはわたしの子である」([詩篇 2 篇 7 節](#))、「わたしは彼に父となり、彼はわたしに子となる」([サムエル記下 7 章 14 節](#))という言葉は、イエスが神であり人であることを疑いなく証明しています。旧約聖書そのものが、彼ら偽教師のよりどころとされていたにもかかわらず、実際にはその彼らを恥じ入らせる内容なのです。

あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。(ヨハネ 5 章 39 節)

したがって旧約聖書は、イエス・キリストの神性を宣言しているだけでなく、メシヤである方を唯一の「神の子」と呼び、その受肉による真の人性をも示しています。そして御使いたちは、そのように父から「子」と呼ばれたことが一度もありません。御使いが被造物であるのと同じく、私たち人間も被造物にすぎません。ゆえに「子」という唯一の称号を父から与えられた方こそ、御使いたちにまさる方であることは、議論の余地なく明かです。

³³ ギリシヤ語の monogenēs (モノゲネース) は、文脈中でしばしば「独り子 (only begotten)」と訳されますが、実際には「唯一無二に生まれた」「まったく特別に生まれた」という意味を持ち、メシヤの処女降誕の独自性と、「神と人の唯一の方」としての特別な地位を強調しています。この語義は、ヘブル語の yāhīd (ヤーヒーード) に由来しています。この語は、アブラハムとサラから生まれたイサクについて用いられており、絶対的に独自で他に類を見ない誕生を示します。七十人訳 (LXX) は、この yāhīd を monogenēs と訳し、「唯一無二」という意味で用いており、「唯一生まれた」という意味ではありません。ヘブル書(たとえば [ヘブル 11 章 17 節](#))に見られる monogenēs も、まさにこの「絶対的独自性」という本来の意味を反映しています。

六節

さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」(詩篇 97 章 7 節後半)と言われた。(ヘブル 1 章 6 節)

この次の証拠も、イエス・キリストに対する御使いの優越性という主張を完全に打ち砕くものです。ここでは、父なる神ご自身が「御使いたちは皆、彼を礼拝せよ」と命じておられます。礼拝を受けるにふさわしいのは、神だけです。御使いは決して礼拝される存在ではありません(黙示録 19 章 10 節; 22 章 9 節)。さらに見逃してはならないのは、[詩篇 97 篇 7 節](#)のこの引用が「神が長子を**再び**世界に導き入れられるとき」に起こると言っている点です。つまり、これは再臨の時のことです。神が遣わされる勝利のメシヤこそ、主イエスの同時代の人々が望んでいたものでしたが、彼らは聖書から「メシヤはまず苦しみを受けなければならない」ことを学んでいませんでした([イザヤ 53 章 1 節](#)以下; [マルコ 11 章 10 節](#); [ルカ 24 章 26 節](#); [ヨハネ 12 章 13 節](#); [使徒行伝 3 章 18 節](#))。悲しいことに、旧約聖書で明らかに示されている真理に、まだなお目が開かれていなかったパウロの同時代の人たちは、「メシヤが神であり人であり、再臨して世界を裁かれる方である」という点も理解できていませんでした。しかし主が再臨されるとき、このパウロの引用のように、御使いたちはメシヤを礼拝**する**ことになります。これは、メシヤが神でなければ不可能なことであり(礼拝されるのは神のみ)、また、人として再臨されるという意味でもあります。第一の来臨では、可視的であったのは主の人性のみでしたが、第二の来臨では栄光のうちにお戻りになるからです。

御使いたちは、主の最初の来臨において、その受胎を告げ知らせ([ルカ 1 章 26-38 節](#))、誕生を宣言しました([ルカ 2 章 8-14 節](#))。[ヘブル 1 章 6 節](#)では、父なる神が「長子を**再び**世界に導き入れられるとき」に、すべての御使いが御子を礼拝するとパウロは述べています。これは、後退していた信者や誤った教えを受け入れた者たちが、第一の来臨を疑っていた状況に対し、第一と第二の来臨のつながりを示す役割も果たしています。そして「長子(Firstborn)」という称号は、メシヤであるイエス・キリストが創造のすべての存在に対して絶対的な優位を持つことを確立する称号です。

御子は、見えない神のかたちであって、**すべての造られたものに先だって**生れたかた<**長子**/NKJV>である。(コロサイ 1 章 15 節)

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

六節

キリストは人とならなければ創造の内側に属することはできませんでした。また、神でなければ、十字架において人の姿で勝利を得ることもできませんでした。この勝利のゆえに、「長子」というこの至高の称号が与えられたのです。

そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死の人の中から最初に生れたかた<「**長子**」/NKJV>である。それは、ご自身がすべてのことにおいて**第一の者**となるためである。(コロサイ 1 章 18 節)

この節が示すように、主の「長子」の地位は、主が私たちのために死なれた事実——一人類の歴史という争いの中心で勝利を得られた事実——に基づいています([黙示録 1 章 5 節](#))。これは最初から神のご計画でした([ローマ 8 章 29 節](#))。

「長子」という概念は、この書簡を受け取ったユダヤ人信者にとって特に重要でした。長子は「二倍の相続分」を得る特権が与えられていました([申命記 21 章 15-17 節](#); 参照:[創世記 48 章 22 節](#); [サムエル記上 1 章 5 節](#); [列王記下 2 章 9 節](#); [ヨブ記 42 章 10 節](#); [イザヤ 61 章 7 節](#); [ゼカリヤ 9 章 12 節](#))。しかし聖書には、その特権を失った例(たとえばルベン:[創世記 49 章 4 節](#); エサウ:[ヘブル 12 章 16 節](#))もあります。

しかし主の場合、この「長子」の地位は単なる家系ではなく、父なる神の選び([ローマ 9 章 10-13 節](#)参照)であり、主が十字架で罪に勝利されたことによって付与され、確証されたものです。

**わたしもまた 彼(メシヤ)をわたしの長子 地の王たちのうちの最も高い者と
する。**(詩篇 89 篇 27 節/新改訳IV)

主がこの称号と共に受けられた「二倍の分け前」とは、王としての務めと、祭司としての務め(メルキゼデクの例にならって: [詩篇 110 篇 4-5 節](#); [ヘブル 7 章 1 節](#))の両方です³⁴。この二つのメシヤ的役割については、この後の章でパウロがさらに取り扱いますが、特に キリストの大祭司職に重点が置かれています。なぜなら、キリストの勝利と栄光とその任命が、エルサレム教会の多くが真理に抵抗する根拠としていた(誤解して用いられていた)律法に、完全にとって代わったことを示すためです。

³⁴ 主は、すでに見てきましたように、キリストの花嫁(教会)に加えて、花嫁の友人たち、すなわち千年王国期の信者たちという「二倍の分け前」も受けられました。つまり、教会がサタンとその使いたちに一対一で取って代わるのに対し、花婿の友人たちはその数を倍にし、こうして卓越した「長子」である主に対する特別な追加の分として与えられるのです。

七節から十二節

(7)また、御使たちについては、「神は、御使たちを風とし、ご自分に仕える者たちを炎とされる」(詩篇 104 篇 4 節)と言われているが、(8)御子については、[御父は]「神よ[すなわち、メシヤよ]、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。(9)あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」(詩篇 45 篇 6-7 節)と言い、(10)さらに、[御父は]「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。(11)これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び³⁵、(12)それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変るが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」(詩篇 102 篇 25-27 節)とも言われている。

この次の詳細な証明では、御子が御使いたちにまさっておられることが、まず聖書によって説明されます(7 節)。御使いとは、神によって創造された霊的存在であり、神の使者として仕える者たちです(「天使」という語はヘブル語でもギリシヤ語でも「使者」を意味します³⁶)。しかし御子は、しもべとは呼ばれず、むしろ「神」と明確に呼ばれ、永遠の御座と神によって授けられた御国を受け継ぐ方として描かれます(8 節)³⁷。御子は、地上に真の正義の統治をもたらす義なる王であることが強調されており(これは旧約に頻繁に現れるテーマです:例:詩篇 94 篇; 96 篇; 97 篇; 98 篇)、すべての上に立つ卓越した存在とされています(9 節)。

³⁵ ここでの正しい読解は、写本アレフ(シナイ写本)の allaxeis<変える> であり、helixeis<巻き取る> ではありません。これはパウロが七十人訳(LXX)から意図的に変更したもので、諸天が「変えられる」ことと、これに対して御子ご自身は「変わることがない」ことを強調するためです。

³⁶ ヘブル語で「天使」を意味する語は malach(マラフ) であり、これは人間の「使者」を指す場合にも、天的存在である「天使」を指す場合にも用いられます(例:創世記 32 章 3 節)。またギリシヤ語では angelos(アンゲロス) が同じ概念を表す語で、ここから英語の angel(天使)が派生しています。アンゲロスは、世俗ギリシヤ語においては「使者」という意味で専ら用いられ、旧約聖書のギリシヤ語訳である 七十人訳(LXX) においても、ヘブル語の malach を翻訳する語として用いられています。

³⁷ 神として、イエスは聖書全体を通して明確に神と呼ばれています

(例:[イザヤ 9 章 6 節](#); [40 章 3 節](#); [マタイ 1 章 23 節](#); [22 章 41-46 節](#); [28 章 19 節](#); [ルカ 1 章 35 節](#); [5 章 20-21 節](#); [ヨハネ 1 章 1-18 節](#), [5 章 18 節](#); [ローマ 1 章 4 節](#); [9 章 3-5 節](#); [第二コリント 13 章 14 節](#); [ピリピ 2 章 5-8 節](#); [コロサイ 1 章 15-20 節](#), [2 章 9 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#), [1 章 8 節](#); [第二ペテロ 1 章 1 節](#); [第一ヨハネ 5 章 20 節](#); [黙示 22 章 16 節](#))。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

十三節 - 十四節

さらにそれだけではありません。御子は御使いとは本質的に異なり、宇宙とその中のすべてを創造された創造主であります。御使いたちもその創造物に含まれます(10節)。そして、宇宙がやがて滅び、新しい天と新しい地へと更新される運命にある一方で([第二ペテロ 3 章 13 節](#))、御子は創造以前と変わらず「同じ方」であり続けます(11～12節)。これは神ご自身にしか当てはめることができない性質であり、御子の神性を決定的に示すものです。

イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。(ヘブル 13 章 8 節)

十三節 - 十四節

(13)神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に座していなさい」(詩篇 110 篇 1 節)と言われたことがあるか。(14)御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。(ヘブル 1 章 13-14 節)

先に示された長い証明の後、そしてすでに示された聖書からの否定しようのない数々の証拠に続いて、この最後の短い引用と、そのあとに続く、もはやあまりに明白すぎて、ある意味では「そこまで言わなくても」と言いたくなるような結論は、パウロとしては少々やりすぎに見えるかもしれません。しかし、そこには理由があります。第一に、パウロはこの[詩篇 110 篇 1 節](#)を、相手を完全に沈黙させるための**決定的な一撃(coup de grâce)**として取っておいたのです。それは、わざと「やりすぎ」と感じるほど強烈な引用であり、イエス・キリストが神ではないと言い張る者たちの足元を完全に崩すためのものでした([第二コリント 11 章 12 節](#)参照)。なぜなら、この[詩篇 110 篇 1 節](#)において、御父ご自身がメシヤこそ来るべき万物の王であると宣言しておられるからです。

13 節は、単なる証明以上のものです。これは、主イエス・キリストの至高の地位や神性を軽んじたり疑ったりしていた者たちへの叱責になっています。「この聖句を本当に忘れていたのか？」とパウロが問いかけているかのようです。そして 14 節の問いかけは、グノーシス主義に傾いていた者たちを完全に沈黙させます。天使が神のしもべであることを否定できる人などいません。聖書を少しでも知っている者なら誰でもわかることです。そして、この章でパウロが示してきた証明は、天使たちがまず第一にキリストに仕える者であることを明白にしました。さらに天使たちは、救いを受け継ぐことになる**私たちの**ために仕えるように神から任命されています。彼らは目に見えないしもべであ

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

十三節 - 十四節

り、私たち人間の信者に奉仕するように遣わされています。これは、彼らが従うべき方であるキリストのおかげで、私たちがその助けを受けているということです。

ここではまだ明確には示されていませんが、パウロがこの箇所です。私たちが人間を話に登場させている理由は二つあります。第一に、キリストが神であると同時に人間でもあるという事実をもって、天使より劣っているかのように主張することはできない、という点を示すためです。というのも、私たち人間は完全に人間であり、天使とは異なる存在であるにもかかわらず、天使たちが仕える対象になっているからです。私たちが天使に仕える側では**ありません**。では、天使を創造し、彼らを導くお方であるイエス・キリストについては、なおさらそのような誤った比較は成り立たないはずです。

第二に、この指摘は、次の2章でパウロが展開する議論の準備になっています。ここでは、キリストが人となられた必要性、人類が神の計画の中で持つ役割、そしてキリストがその地上での生涯で行われた救いの業(十字架での霊的死)について思い起こさせることになります。これらを忘れることは非常に危険です([ヘブル2章1-4節](#))。神のみ国を受け継ぐのは天使ではなく人間であり([ヘブル2章5-8節](#))、そのために主は人となる必要があられたのです([ヘブル2章9-18節](#))。

(5)キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(6)キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、(7)かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(8)**[私たち全ての者のために]**おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ2章5-8節)

結論：

この手紙が書かれたのは約二千年前ですが、そのメッセージは、私たち——艱難期の直前に立っている現代の信者たち——にとって非常に重要であり、まったく古びていません。ラオデキヤの時代と呼ばれる現在の教会時代では、生ぬるさが支配し、私たち信者は、当時のユダヤ教の律法主義と同じように霊的成長を阻む伝統主義・教派主義の力と、グノーシス主義的とも言える情緒的体験や娯楽を求める潮流(メガチャーチ運動やカルスマ運動)の間に挟まれています。これらは当時の二つの危険思想と完全に同じではないにせよ、日に日に似た方向へ進み、真理から離れつつあります。

第一章：天使よりも優れた神の御子

IV. 節ごとの註解

十三節 - 十四節

だからこそ、1 世紀の信者たちが直面した問題と、パウロが彼らを回復させようとした努力には、私たちが学ぶべきことが多くあります。悪が増大し続けるこの時代において、対抗できる唯一の力は神の御言葉の真理です。私たちが主イエスにより近づき、心の中で主を第一にし、神の御子であり人となられた主が私たちの罪のために死んでくださったことを常に覚え、主と共に歩むことでのみ、世界全体に臨もうとしている試練の時([黙示録 3 章 10 節](#))に備えることができます。

ただ、心の中でキリストを主とあがめなさい。(第一ペテロ 3 章 15 節)(参照.
[イザヤ 8 章 13 節](#))

わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。(黙示録 3 章 11 節)

[次はヘブル第 2 章]

第三章：モーセにまさるイエス…

IV. 節ごとの注解

十七-十九節

パウロのヘブル人への手紙

ロバート・D・ルギンビル博士 著

<https://ichthys.com/Hebrews-chapter2.htm>

からの訳